

島津家文書『御文書』外中世文書集

小瀬玄士・畑山周平・村井祐樹 編

JSPS 20H01307

「原本史料情報解析」の方法による中世西国武家文書の研究と展開（研究代表者／本郷恵子）

島津家文書 『御文書』 外中世文書集

目次

島津家文書『御文書』外中世文書集

文書二十九通 一

一、(年未詳)七月二十五日	島津勝久書狀
二、(年未詳)三月二十日	龍造寺家門書狀
三、(年未詳)十月十九日	近衛尚通書狀
四、(天正十一年)八月十四日	近衛信輔書狀
五、(永祿十二年力)十二月二十四日	有馬義純書狀
六、(永祿七年)三月十三日	近衛前久書狀
七、(天正元年力)十一月二十八日	志岐麟泉書狀
八、(天正元年)十二月六日	土持親成書狀
九、(天正二年)十一月六日	天草鎮尚書狀
一〇、(天正五年)十二月二十六日	土持親成書狀
一一、(年未詳)六月十八日	飛鳥井雅繼書狀
一二、(天正七年)五月十五日	島津義久書狀案
一三、(永祿十二年力)六月十六日	足利義昭御内書
一四、(天正六年力)十月十五日	島津義久書狀案

3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16

一五、(天正八年)九月十九日	近衛前久覺書	17
一六、(天正九年力)八月二日	龍造寺隆信書狀	18
一七、(天正十年)十一月二十六日	近衛信輔書狀	19
一八、(年未詳)八月二十四日	島津義久書狀	20
一九、(天正十一年)九月十三日	伊集院忠棟書狀	21
二〇、(年未詳)十月二十日	島津義久書狀	22
二一、(年未詳)八月四日	島津義久書狀案	23
二二、(天正十四年)正月二十五日	毛利輝元書狀	24
二三、(天正十四年)三月二十三日	島津義久書狀	25
二四、(年未詳)三月二日	秋月種実書狀	26
二五、(天正十三年)三月十五日	安国寺恵瓊書狀	27
二六、(年未詳)四月十二日	松浦鎮信書狀	28
二七、(天正十四年)五月十一日	小早川隆景書狀	29
二八、(天正十五年)正月十九日	島津義久書狀案	30
二九、(年未詳)五月二十八日	梶井宮最胤法親王御内書	31
三〇、(年未詳)九月十五日	青蓮院宮尊朝法親王書狀	32
三一、(年未詳)二月二十九日	島津義久書狀	33
三二、(年未詳)三月五日	近衛前久書狀	34
三三、(年未詳)八月三日	近衛前久書狀	35

文書十九通 二

一、(年月日未詳)	近衛前久書狀	36
二、(年未詳) 四月十七日	島津義久書狀	38
三、(天正十九年) 五月三日	豊臣家奉行連署奉書	39
四、天正十九年十二月二日	島津家人質番組書上	40
五、(年未詳) 五月三日	近衛前久書狀	42
六、(天正二十年) 六月九日	近衛前久書狀	44
七、(年未詳) 六月十九日	石田正澄書狀	46
八、(年未詳) 八月二十二日	島津義久書狀	47
九、(天正十七年力) 十一月二日	島津義久書狀案	48
一〇、(年未詳) 十二月二日	島津義久書狀	49
一一、(年未詳) 十二月十三日	島津義久書狀	50
一二、慶長二年六月九日	島津義久知行宛行狀	51
一三、(慶長四年) 五月二十四日	島津義久書狀	52
一四、(慶長四年) 九月十四日	島津義久書狀	53
一五、(年未詳) 十二月十六日	島津義久書狀	54
一六、(慶長十年) 正月八日	照高院如雪(道澄)書狀	55
一七、(慶長四年力) 四月六日	石田三成書狀	56
一八、(慶長十三年力) 二月二十六日	島津義久書狀	57
一九、(慶長十三年力) 三月二十六日	島津義久書狀	58

文書二十九通 三

一、(年未詳) 八月十六日	秋月種実書狀	59
二、(年未詳) 六月九日	照高院如雪(道澄)書狀	60
三、(年未詳) 三月二十四日	甲斐宗運(親直)書狀	61
四、(天正十三年) 閏八月二十九日	島津忠平書狀案	62
五、(天正十五年) 五月七日	島津義弘書狀	63
六、(年未詳) 十月三日	青蓮院宮尊朝法親王書狀	65
七、(年未詳) 八月十四日	豊臣秀吉朱印狀	66
八、(天正二十年) 二月二十一日	島津義弘書狀	67
九、(年未詳) 二月十二日	某一之書狀	68
一〇、(年未詳) 三月二十三日	山中長俊書狀	69
一一、(年未詳) 六月二十日	島津義弘書狀	70
一二、(文祿二年) 七月八日	島津義弘書狀	71
一三、(年未詳) 八月十日	島津義弘書狀	72
一四、(年未詳) 十月十二日	島津義弘書狀	73
一五、(文祿四年) 四月十五日	近衛前久書狀	74
一六、(文祿五年五月力)	近衛前久白筆書狀	75
一七、(慶長五年) 七月十五日	島津義弘書狀案	77
一八、(年未詳) 七月二十九日	大谷吉繼書狀	78
一九、(慶長五年) 十一月十三日	井伊直政書狀	79

二〇、(慶長五年) 十二月二十三日

黒田長政書状

80

他家文書

二一、(慶長八年) 十二月八日

島津義弘書状

82

一、(文治五年) 八月十五日

源頼朝袖加判平盛時奉書写

103

二二、(年未詳) 十二月

島津義弘書状

85

二、文治三年三月 日

平重澄寄進状案

106

二三、慶長七年八月十日

島津義弘起請文案

86

三、元仁二年三月 日

弥勒寺寺家公文所下文

107

二四、(慶長十一年) 二月十一日

島津義弘書状

87

四、仁治二年九月十五日

関東御教書

108

二五、(慶長十四年) 十月二十八日

松浦宗静(鎮信) 書状

91

五、建長七年十二月二十五日

関東下知状案

109

二六、(慶長十五年) 四月七日

島津義弘書状

92

六、文永八年十二月十六日

比丘尼成阿請文案

112

二七、(慶長十五年) 八月十七日

島津義弘書状

93

七、嘉元三年七月 日

沙弥行惠讓状

114

二八、(慶長十五年) 二月十四日

細川忠興書状

94

八、嘉元四年七月 日

沙弥行惠讓状

115

二九、(年未詳) 八月三日

相良長每書状

96

九、嘉元四年七月 日

沙弥行惠讓状

116

文書二十五通 四(抄)

一、(年未詳) 六月十七日

石田三成書状

97

一〇、嘉元四年八月二十一日

沙弥行惠置文

117

二、(慶長四年) 十月六日

島津忠恒書状

98

一一、徳治三年十一月十一日

藤原純貞質券

119

三、(慶長七年) 十二月一日

島津忠恒書状

99

一二、徳治三年十一月十一日

藤原純貞質券

120

四、(慶長七年) 十二月四日

島津忠恒書状案

100

一三、正和三年三月二十二日

平こくさう丸・同母避状

121

一四、正和三年三月二十二日

平こくさう丸・同母避状

122

一五、正和三年六月十六日

平もとすみ避状

123

一六、正和三年六月十六日

平もとすみ避状

124

一七、正和三年十月二十九日

沙弥本仏・比丘尼妙法連署相博状

125

一八、正和四年六月十日

平もりすみ置文

126

一九、正和四年六月十日

平もりすみ置文

127

二〇、	元応二年十一月四日	平さたすみ置文	128
二一、	元享元年五月十八日	平さたすみ置文	129
二二、	元享二年八月九日	沙弥了導請取状	130
二三、	元徳元年十一月二十九日	鎮西下知状(前欠)	131
二四、	元徳元年十二月五日	鎮西御教書	138
二五、	元徳元年十二月二十五日	鎮西御教書	139
二六、	元徳元年十二月二十五日	鎮西下知状	140
二七、	元弘三年六月二十三日	平すへすみ置文	143
二八、	元弘三年八月二十九日	後醍醐天皇綸旨	144
二九、	建武三年八月十五日	二階堂真頭讓状	145
三〇、	建武三年九月二十三日	沙弥きやうい置文	146
三一、	建武五年九月二日	二階堂行雄讓状	147
三二、	建武五年九月二日	二階堂行雄讓状	148
三三、	暦応三年三月三日	某袖判良秀奉書	149
三四、	康永二年四月十二日	足利直義軍勢催促御教書写	150
三五、	貞和七年三月三十日	二階堂行雄讓状	151
三六、	観応二年四月二日	惣公文重円等連署注進状	152
三七、	正平七年二月十日	平惟純讓状	153
三八、	康安二年七月二日	斯波氏経奉書	154
三九、	貞治五年七月十日	通喜・泰久連署出挙米借券	155
四〇、	天授元年十一月十二日	禅麟讓状	156

四一、	応永二十年九月二十三日	宗光契状	157
四二、	(延慶四年) 四月二十三日	比志島忠範書状	158
四三、	(貞和二年) 八月十三日	薩摩国宣	159
四四、	(年月日未詳)	沙弥かくち讓状	160

島津家文書「御文書」外中世史料部集 総目録

例言

●本報告書は、本所所蔵国宝『島津家文書』のうち、「御文書」に含まれなかった中世文書の調査図録である。『島津家文書』には「御文書」と名付けられた卷子が二三八巻存在し、慶長年間より以前の中世文書は、原本・案文・写を含めてほぼこのグループに収められている。しかし「御文書」の外に以下の五巻には中世文書がまとめて成巻されている。

架番号 S 51 1 「文書二十九通 一」

S 51 2 「文書十九通 二」

S 51 3 「文書二十九通 三」

S 51 4 「文書二十五通 四」

S 45 29 「他家文書」

これらが「御文書」に洩れた理由は不明であるが、おそらくは「御文書」が成巻された十七世紀半ば以降に島津家に入った可能性が高い。

●本図録においては、右記の順に写真と釈文を載せた。ただし「文書二十五通 四」については時代の古い四通のみを収めた。なお巻末に総目録を附した。

●翻刻にあたっては、以下の要領によった。

一、漢字の字体は、常用字体を用い、異体字は原則として常用字体に改めた。なお、一部の変体仮名について、片仮名を以て代用したことがある。

一、本文には、読点（、）および並列点（・）を適宜加えた。

一、欠損・不読文字は、字数を推算して □ で示し、その字数不明の場合は、字数を推算し、相当分の で示した。

一、原本の文字に置き換えるべきものには 「」 「」 参考または説明のためものには （ ） を以て傍注を施した。

●本文書の撮影は本所谷昭佳・高山さやかが行い、図録の編集は小瀬玄士・畑山周平・村井祐樹が担当した。

●本報告書は、JSPS 20H01307「原本史料情報解析」の方法による中世西国武家文書の研究と展開」の研究成果の一部である。

文書二十九通

一

文書十九通

二

文書二十九通

三

文書二十五通

四



一——一 島津勝久書狀

其方御心底之通、今度以
 莊嚴寺、細々示給候、祝着
 此事候、然者則北原方へ談
 合候之間、以得心般若寺別當
 為使節被申候、彼依旨意
 趣、其方之相談可為肝要候、
 此方之事、(島津忠良・貴久)
 憑存候、覚悟之外更無他候、
 細碎莊嚴寺可被申之
 条不能審候、恐々謹言、

文月廿五日 勝久(花押)

(島津忠良)
 相模守殿



一——二 龍造寺家門書狀

御治世之趣承及候、千秋万歳

此御事候、至御祝儀早々可

令申候之處、海路依遠方

乍存延引候、非疎略候、幾日

御同前可畏入候、仍轡一口 明珍

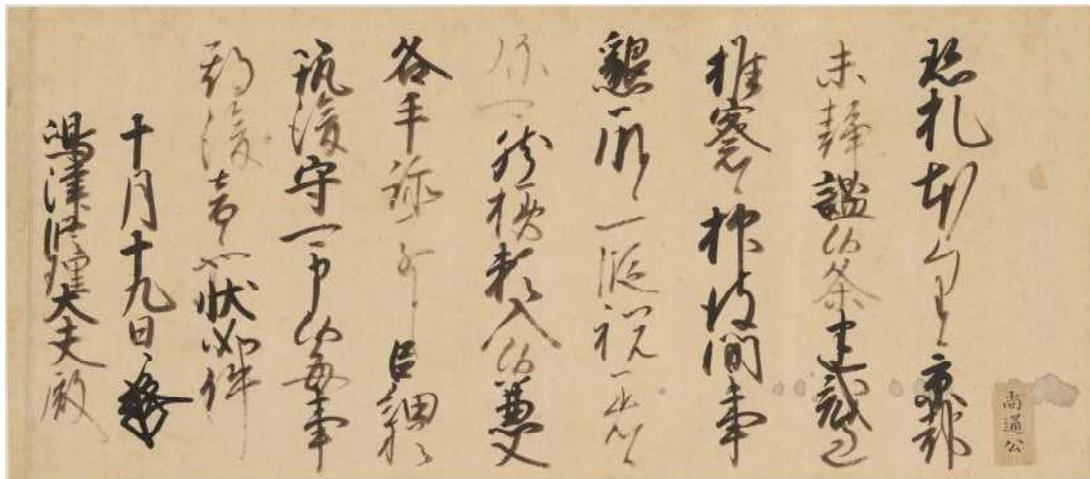
進覽候、誠表御慶計候、可

得御意候、恐惶謹言、

三月廿日 三郎兵衛尉家門 (花押)

謹上 嶋津殿

進覽御宿所



一—三 近衛尚通書狀

珍札本望候、京都

未静謐候条、迷惑過

推察候、抑彼間事

懇承候、一段祝着候、

弥可然様頼入候、兼又

各手跡進之候、巨細猶

筑(進藤長英)後守可申候、每事

期後音候也、状如件、

十月十九日 (花押)

嶋津修理大夫殿



一—四 近衛信輔書狀

雖無指儀候、的便之間

染筆候、其元弥無異儀

由珍重候、仍去年差下

進藤筑後守候處、諸事預

馳走旨其聞候、喜悅之至候、

爰元無外方躰候間、万端

引立頼入計候、猶穎娃左馬助

可申之間、不能巨細候、恐々謹言、

(天正十一年)
八月十四日 (花押)

(島津義久)
修理大夫殿



一—五 有馬義純書狀

去五月晦日之貴札、今月廿日到着、
 拜見珍重候、如示蒙候、依海路遠、
 遠、従是も無音押移候、聊非心疎候、
 仍貴国牛草之城、(義陽)相良方依加勢相
 拘候之処、被執詰、当時者彼表悉被
 属御勝運候之由候、千秋万歳候、向
 後於相応之儀者、可申談候、每事御
 入魂所仰候、随而御太刀并御馬贈
 給候、何様可致秘藏候、然者太刀
 一带・織物一端令進献之候、誠補
 御礼計候、心緒猶伊集院善左衛門尉方
 可令演説給候、此旨可得御意候、
 恐惶謹言、

(永禄十二年力)
 十貳月廿四日 義純 (花押)

(義久)
 嶋津殿 貴報

其後者疎遠之至、背
 本意候、仍官途之事、遅々
 如何之間、申調候、尤珍重候、
 就中短冊十枚雖憚
 多候、染悪筆進之候、尚
 進藤左衛門大夫可申候也、状如件、
 三月十三日
 花押
 嶋津修理大夫殿

一—六 近衛前久書状

其後者疎遠之至、背

本意候、仍官途之事、遅々

如何之間、申調候、尤珍重候、

就中短冊十枚雖憚

多候、染悪筆進之候、尚

進藤左衛門大夫可申候也、状如件、

(永祿七年) 三月十三日 (花押)

嶋津修理大夫殿

總令啓入候之旨、近年請
 上意候處、公私御丁寧蒙仰候、外実
 忝奉存候、尤節々可申上候處、且者遠方
 且者依途中難成子細、乍存候、聊非
 粗略之儀候、仍而去々年当郡之立柄、
 就中久玉落着之儀、遂言上候處、
 具被成 (島津) 上意候、存其旨、到天草大夫、
 義虎御同前彼和融之儀申達候、
 彼方然与純熟被申候、然処無程以
 計策久玉知行候、拙者不閉目罷成候、
 悉失面目候、既薩州・天草際及弓箭候、
 此堺同篇候、雖無申迄候、大口御静謐之
 刻、励心底候事者、御存知之前二候之条、
 不及巨細候、右以御用捨可被達 上聞二事
 奉頼候、猶用口上候、恐々謹言、
 十一月廿八日 麟泉 (花押)
 伊集院右衛門大夫殿
 村田越前守殿
 平田美濃守殿
 河上上野入道殿
 御宿所

一七 志岐麟泉書狀

態令啓入候、任先例之旨、近年請

上意候處、公私御丁寧蒙仰候、外実

忝奉存候、尤節々可申上候處、且者遠方

且者依途中難成子細、乍存候、聊非

粗略之儀候、仍而去々年当郡之立柄、

就中久玉落着之儀、遂言上候處、

具被成 (島津) 上意候、存其旨、到天草大夫、

義虎御同前彼和融之儀申達候、

彼方然与純熟被申候、然処無程以

計策久玉知行候、拙者不閉目罷成候、

悉失面目候、既薩州・天草際及弓箭候、

此堺同篇候、雖無申迄候、大口御静謐之

刻、励心底候事者、御存知之前二候之条、

不及巨細候、右以御用捨可被達 上聞二事

奉頼候、猶用口上候、恐々謹言、

十一月廿八日 麟泉 (花押)

伊集院右衛門大夫殿

村田越前守殿

平田美濃守殿

河上上野入道殿

御宿所

今度從豐州到南蠻國被
 差遣候御船、既帰帆之刻、於御領中、
 少々風破之由絶言語候、然者就彼
 船之儀、兩國可被相及御等閑之通、甚
 以不可然之儀候歟、就中當時其堺御
 弓箭之儀、向後者到豊符被遂御
 旨趣、從此表一行被仰促哉否之由、
 相存候処、覺外之御題目、寔令仰天候、
 一者御代々骨肉之好、于今無異儀
 可被仰談事、乍恐所希候、拙夫事、
 依伊東闔國近代雖違幕下候、
 前々之持節難忘之条、不顧惶令言
 上候、尖右之船被成御調儀、永々於御一
 致者、終可為日州御退治之基候那、此等之
 趣、可然様御披露所仰候、恐惶謹言、
 (天正元年)
 十二月六日
 親成 (花押)
 (忠棟)
 伊集院右衛門大夫殿

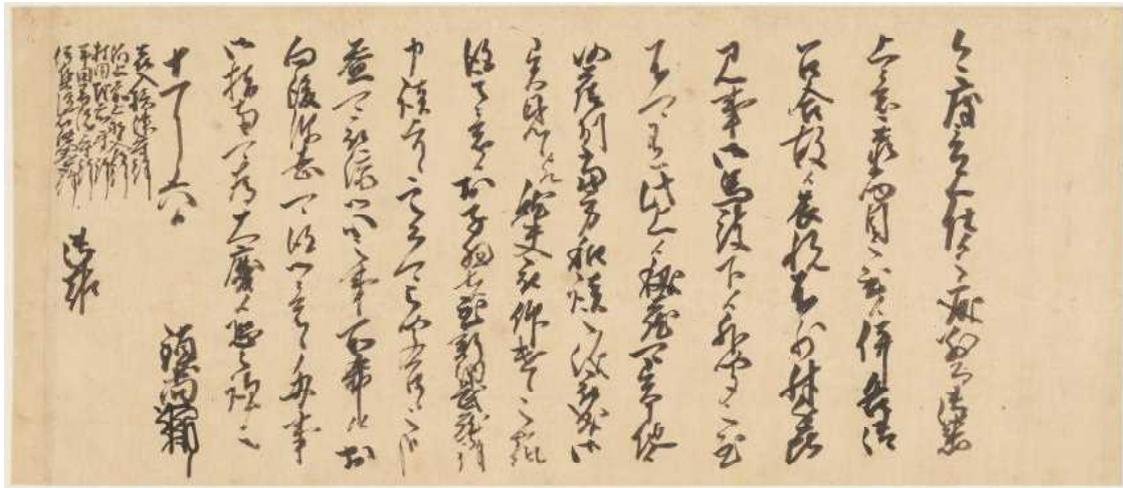
一一八 土持親成書狀

今度從豐州到南蠻國被

差遣候御船、既帰帆之刻、於御領中、
 少々風破之由絶言語候、然者就彼
 船之儀、兩國可被相及御等閑之通、甚
 以不可然之儀候歟、就中當時其堺御
 弓箭之儀、向後者到豊符被遂御
 旨趣、從此表一行被仰促哉否之由、
 相存候処、覺外之御題目、寔令仰天候、
 一者御代々骨肉之好、于今無異儀
 可被仰談事、乍恐所希候、拙夫事、
 依伊東闔國近代雖違幕下候、
 前々之持節難忘之条、不顧惶令言
 上候、尖右之船被成御調儀、永々於御一
 致者、終可為日州御退治之基候那、此等之
 趣、可然様御披露所仰候、恐惶謹言、

(天正元年)
 十二月六日
 親成 (花押)

伊集院右衛門大夫殿



一一九 天草鎮尚書狀

今度言上仕候之处、別而御懇
上意、忝面目之至候、併各御
召合故候、畏悦不少、殊近比
見事御馬被下候、外聞之至

不可有此上候、秘藏可異于他候、
仍薩州・(島津義虎)当方和談之儀、被成御

異見候歟、就夫被仰遣候之趣、
得其意候、於子細者、至新納武藏守許
(忠元)

申談旨候、定而被聞召候之哉、
益可被添御心之事所希候、於

向後深甚可得御意候、每事
御指南可為大慶候、恐々謹言、
(天正二年)

十一月六日 鎮尚(花押)

喜入撰津守殿

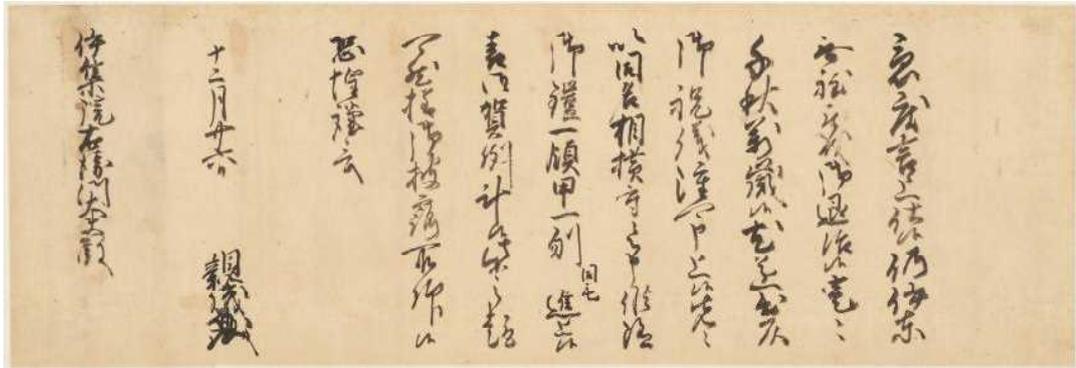
河上(忠光)前上野入道殿

村田(經定)越前守殿

平田(昌宗)美濃守殿

伊集院(忠棟)右衛門大夫殿

御報



一一〇 土持親成書狀

急度言上仕候、仍伊東

無程被成御退治候、寔々

千秋万歳候、尤遂出頭

御祝儀雖可申上候、先々

以同名相模守令申候、随

御鎧一領・甲一刎^{同毛}進上候、

表御賀例計候、此等之趣

可然様御披露所仰候、

恐惶謹言、

(天正五年)
十二月廿六日 親成 (花押)

伊集院^(忠棟)右衛門大夫殿

厥后者杳不申承候、遠路之
 条非疎意候、仍今度於向州表、
 被得大和、平均被仰付之由、京都
 無其隱、乍寄特難紙上尽存候、尤
 使者差下申度、乍心緒、(織田)信長殿御
 手遣付切々御上洛之条、執紛不及
 是非候、境節從愛宕好便_下之間、乍
 自由令啓達候、於爰元相応之御用
 可被仰上候、猶右衛門大輔可被申入候、
 恐々謹言、

六月十八日 雅繼

嶋津修理大夫殿

一——一 飛鳥井雅繼書狀

厥后者杳不申承候、遠路之

条非疎意候、仍今度於向州表、

被得大和、平均被仰付之由、京都

無其隱、乍寄特難紙上尽存候、尤

使者差下申度、乍心緒、(織田)信長殿御

手遣付切々御上洛之条、執紛不及

是非候、境節從愛宕好便_下之間、乍

自由令啓達候、於爰元相応之御用

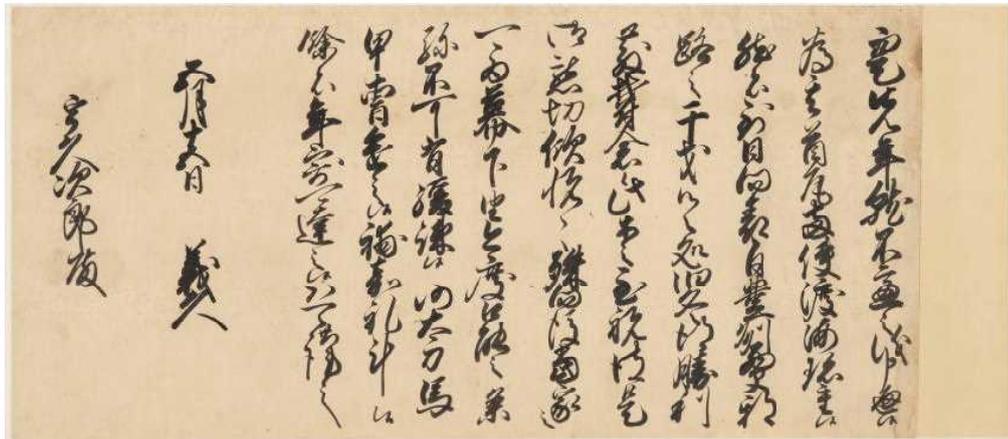
可被仰上候、猶右衛門大輔可被申入候、

恐々謹言、

六月十八日

雅繼

嶋津修理大夫殿

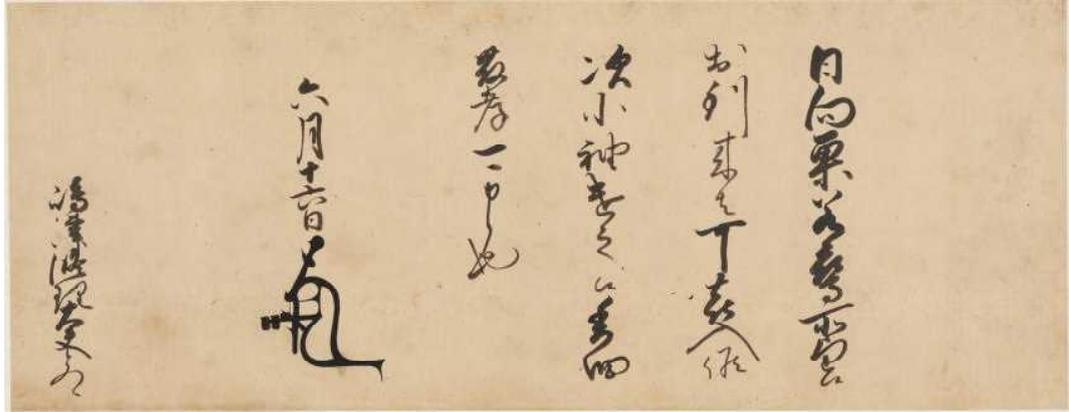


一——一二 島津義久書状案

寔先年就慮之儀申通候、
 為其首尾、兩使渡海珍重候、
 然者到日向表、自豊州覃邪
 路之干戈候之处、旧冬得勝利、
 散鬱念候、此等之至祝、彼是
 御懇切欣悦候、殊向後当家之
 可為幕下由、今度口能之条、
 弥不可有緩疎候、仍太刀・馬・
 甲冑進之候、補嘉礼計候、
 余者年寄可達之候、恐々謹言、

(天正七年)
 五月十五日 義久

宇久次郎殿
(純玄九)



一——三 足利義昭御内書

日向葉若鷹所望候、

於到来者可喜入候、

次小袖遣之候、委細

藤孝(細川)可申候也、

六月十六日(永祿十二年カ)
(花押)

嶋津修理大夫(義久)とのへ

一——四 島津義久書狀案

今度其境依雜說、到

已下等騷動之由、風聞

如何候之哉、無心元候、縱對

此方雖有被疑儀、於度々

向後不可有隔心之旨、互

神文之上、聊非別義候、猶

諸神^茂御照覽、從是

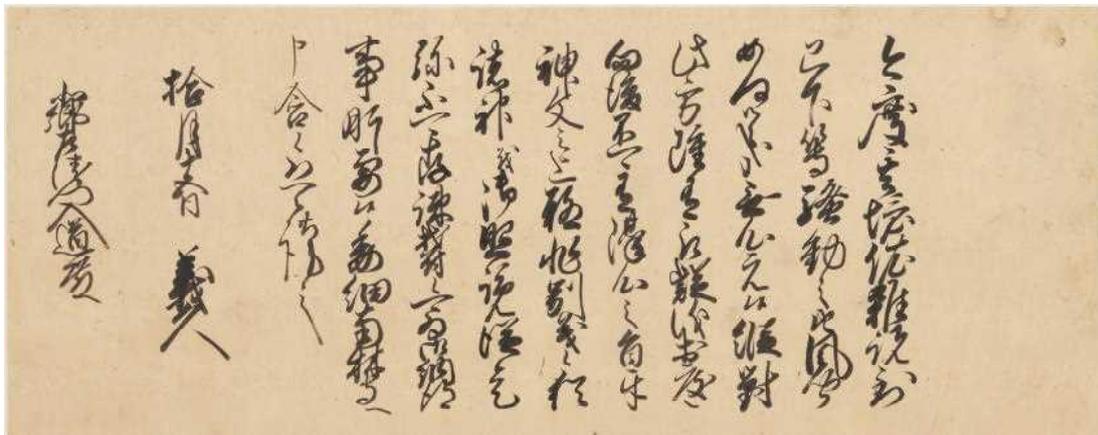
弥不可存疎鬱候、可為御納得

事肝要候、委細南林寺へ

申含候、恐々謹言、

(天正六年九)
拾月十五日 義久

北郷左衛門^(時久)入道殿



光
 一 鷹鳥之事 付信長公江數進上可然事
 一 殿料之事
 一 領知方之事 同於日州事
 一 御朱印御礼事
 一 無事於御同心者 被差上使者可然事
 一 於兩國和睦者 御出馬之刻 一廉人数
 不被相立事
 一 相良無表裏者 最前筋可被申合事
 以上
 九月十九日
 修理大夫殿

一——一五 近衛前久覚書

覚

- 一、鷹之事、付信長公江數進上可然事、
- 一、殿料之事、
- 一、領知方之事、同於日州事、
- 一、御朱印御礼事、
- 一、無事於御同心者、被差上使者可然事、
- 一、於兩國和睦者、御出馬之刻、一廉人数
(大友・島津)
 可被相立事、
- 一、相良無表裏者、最前筋可被申合事、
(義陽)

以上、

九月十九日
(天正八年)

(花押)

修理大夫殿
(島津義久)



一——一六 龍造寺隆信書状

(島津) 義久・(義陽) 相良方間和睦

之段、每度雖申入候、然々無

一着候、乍去重疊申入候、此節

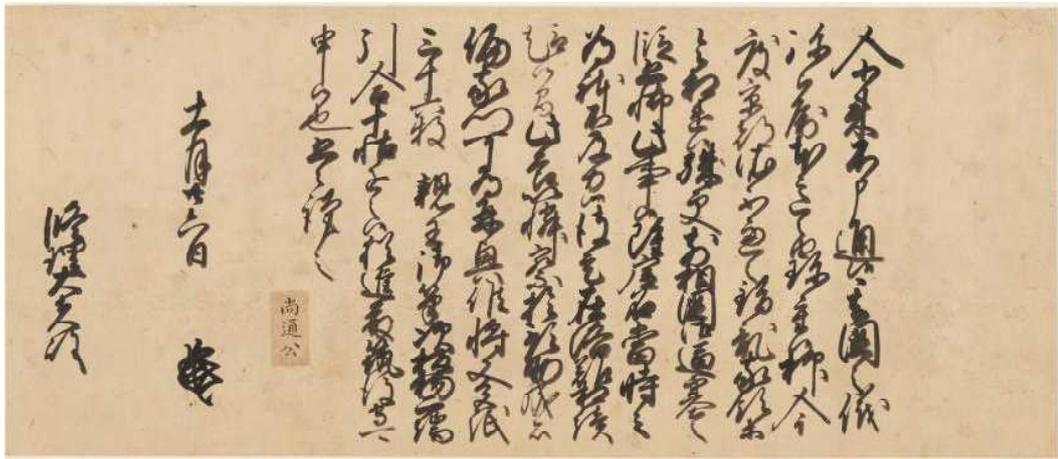
以御納得落着候様、御取

合可目出度候、我等意分、

彼者含口上候、恐々謹言、

(天正九年力)
八月二日 隆信 (花押)

伊集院右衛門(忠棟)大夫殿
御宿所



一一一七 近衛信輔書状

爾来不申通候、其国之儀、
 弥被属本意之由、珍重候、抑今
 度京都依不慮之錯乱、家領等
 令相違候、殊更前相国御逼塞之
 段、恐怖此事候、雖虚名当时之
 為躰不及力候、彼是在洛難相統
 趣候間、此節以憐察、於預助成者、
 偏家門可為再興候、将又色紙
 三十六枚、親王御筆、次板物二端、
 引合十帖進之候、猶進藤筑後守可
 申候也、恐々謹言、

(天正十年)
 十一月廿六日 (花押)

(島津義久)
 修理大夫殿



一——一八 島津義久書状

追而鎧・甲預候、令

祝着候、自是茂

太刀一腰弘恒・馬一疋

河原毛
印鷹金

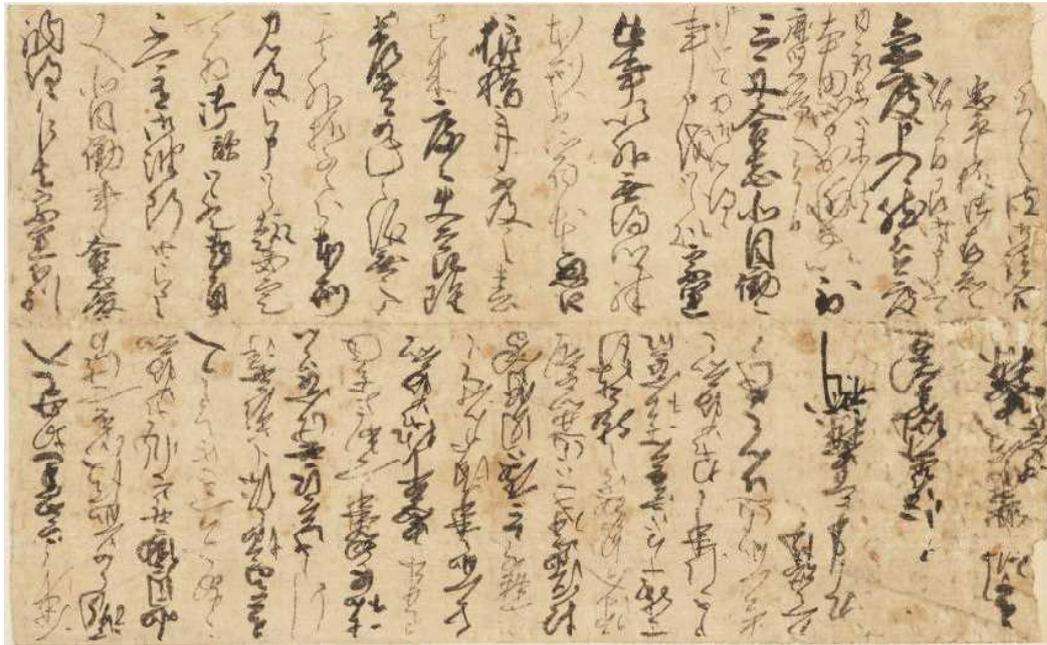
誠表微志計候、

恐々謹言、

八月廿四日 修理大夫義久 (花押)

謹上 大友左衛門督入道殿

(義統)



一一一九 伊集院忠棟書状

猶々、彼御談合
(親重)
 忠平様御存知之
 儀候間、即時申上候、
 急度申入候、然者今度
(正親)
 日取等、未仕候、
 本田刑部少輔方以到
 鹿兒嶋へ今日
 三舟・合志、北目働之
 申上候、為御心得候、
(甲斐)
 事申越候之處、宗運
 返事以外無得心候、殊
 本刑於宿本悪口
 狼藉之事、不及申候、春
 已来度々使節雖
 差遣候、如此之儀無之候、
 其外様子之分、本刑
 見及被申候之趣、必定
 可為御敵候歟、菟角
 不可有御油断由被申候、
(親重)
 又北目働之事も合志殿ハ
 納得候、乍去宗運分別
 次第候、宗運於無入
 魂者、前後心遣可仕候間、
 北目働無是非候、御存知
 之前たるへき由被申候、又
 有馬境之儀も差無御
 行候、此節無仕合候者、
 諸口悪事可出候歟、去年
 已来忠平様御存知候、
 近所之事頃見せ候も
 不替候、今度ハ同名日向守
 相添、岸きハ迄忍寄候、
 隙入間敷由申候、然者彼行
 可然候する哉、爰元談合衆
 申され事候、為御存知之、
 貴所迄先々如此候、
(天正十一年)
 恐々謹言、
 九月十三日 忠棟 (花押)
(墨引)
 伊集院右衛門大夫
(貞重)
 有川雅楽助殿
 御宿所 忠棟



一—二〇 島津義久書状

從 (近衛前久) 御家門様 到相良方、

壹張可申組之由被仰下候、

先年頭 神名、互雖非

疎隔候、御意之上者、猶

春日大明神・八幡大菩薩

照覽 弥可為深重事、聊不可

有異儀候、以此旨宜預

披露候、恐々謹言、

拾月廿日 義久 (花押)



一——二一 島津義久書状案

去春八城及遂發足、到

其境軍衆少々差向候之刻、

無異儀当邦之可為幕下

段、尤以肝心候之处、為右之

御祝詞、使書并太刀・織筋

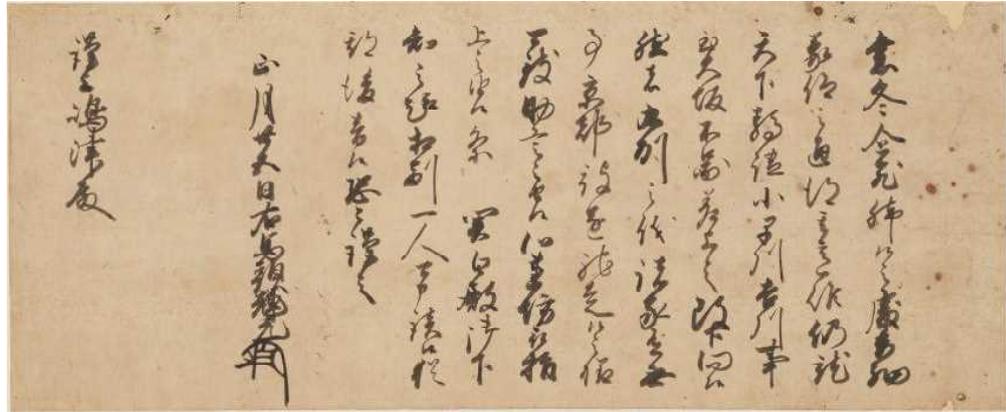
到來珍重候、於弥向後不

可有疎意候、猶委細年寄○可

申候、恐々謹言、

八月四日 義久

内空閑備前守殿



一—二二 毛利輝元書状

旧冬企飛脚候之处、委細

蒙仰之通、得其意候、仍就

天下静謐、(隆景)小早川・吉川事、(元長)

至大坂不図差上之、改下向候、

然者九州之儀、諸家有無

事、京都被遂馳走候之様、

可致助言之由候、(面高頼俊)心蓮坊被指

上之由候条、(秀吉)関白殿御下

知之趣、相副一人可申談候、猶

期後音候、恐々謹言、

(天正十四年)
正月廿五日 右馬頭輝元 (花押)

謹上 嶋津殿 (義久)



一——二三 島津義久書状

猶々今度於筑州立者、

可被成自身出張候之歟、是又

示預可得其心候、

厥後無音之躰、心外之至候、仍

頃從忠棟所註進之趣、筑紫(伊集院)

進退之事、構逆儀候之条、可討果

依談合、内端之軍衆、急速雖

可差登由候、巨細以稅所新介可

相達之段、就到來未申付候、

當者可伺 御神慮哉、菟角

御存分之通有之儘、承候而可

得其心候、將又巢本之儀、何分

相聞得候之歟、京都へ申登子細

候之間、是非以今年者鷹數

多見來候之様、御入魂所

希候、彼是為納得染筆候、

恐々謹言、

(天正十四年)
参月廿三日 義久 (花押)

(島津義弘)
兵庫頭殿 義久



一—二四 秋月種実書状

御書拝見仕候、仍而

今度鬱憤之御弓箭

御儀定之由、千勝万勢、

乍恐悴家本望此節候、

何様相応之馳走不存

緩候、然者被 仰出候趣

慥致承知、至兩家申渡、

彼意分税所新介殿迄

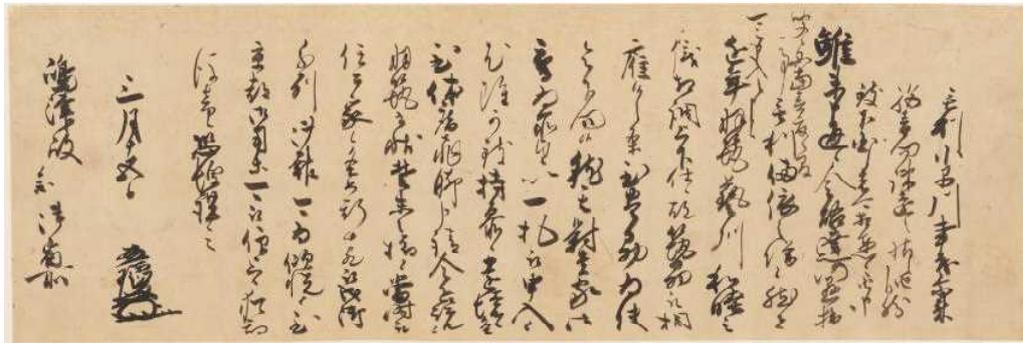
申入候条、定而可有言上候、

此由可得貴意候、恐惶

謹言、

三月二日 種実 (花押)

(義久)
嶋津殿参 貴報人々御中



一—二五 安国寺惠瓊書状

(輝元) (隆景)

毛利・小早川事茂、爾来

絶音問疎遠之様候由、自然

致下国候者、可相達之由申

聞候、必当春夏之間、

可被申入候、かしく、

〔候脱〕

雖未申通候令啓達、仍愚拙

事、毛利備依之儀候、然者

近年羽筑・芸州和睦之

儀相調、上下仕候故、筑州被相

雇候之条、至豊州為使

令下向候、就其対貴家御

鷹為所望、以一札被申入候、

尤雖可致持参候、遠境候条、

至休庵飛脚申請、令進覽候、

羽筑書状楚末之様候、当時被

任公家候条、如斯候歟、被成御

分別、御報可為欣悦候、至

京都御用等可被仰上候、猶期

後音候、恐惶謹言、

(義久)
鳴津殿 参 御宿所

(天正十三年)
三月十五日 惠瓊 (花押)



一—二六 松浦鎮信書状

謹言上仕候畢、 抑

今年之御祝儀、 重畳不可

有休期候、 殊諸邦被任

尊慮候、 御静謐千秋万歳候、

随而御太刀一腰金覆輪・縮

五端令進上候、 表御祝儀計候、

此等之趣、 宜預御披露候、 恐

惶謹言、

卯月十二日 肥前守鎮信 (花押)

進上 本田下野守殿 (親貞)



一—二七 小早川隆景書状

謹而致言上候、抑先日者

真蓮坊(面高頼俊)就被差上、我等式

迄被成御書、御丁寧之

儀忝候、随而今度(秀吉) 関白殿

被遂御対談、鎌田殿御帰(政広)

国尤珍重候、当時之儀乍恐

不可過御賢慮候、猶伊集院

右衛門大夫殿可有御披露候、(忠棟)

恐惶謹言、

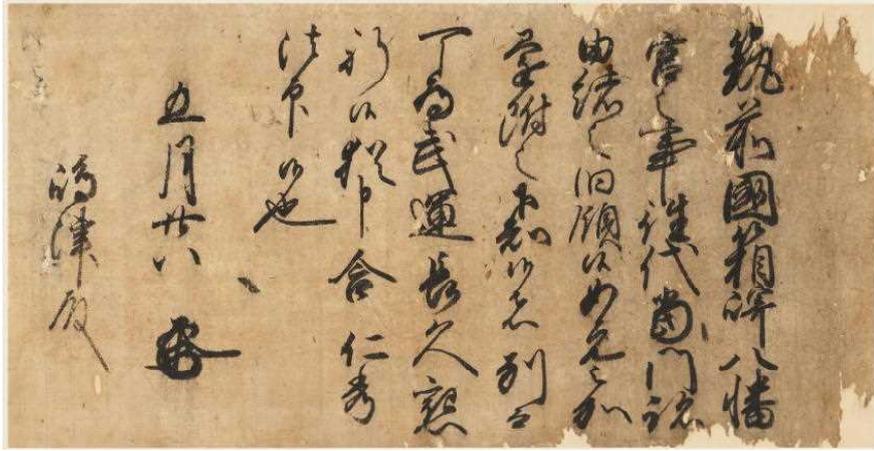
五月十一日(天正十四年) 左衛門佐隆景(花押)

謹上 伊集院右衛門大夫殿

節々可令啓之処、遠境故無其儀候、
 仍旧冬以兩使如申登候、大友家連々
 懇望候之哉、引率他邦被執懸之由、
 顯然之条、分国覃折角、日向堺迄
 致出張、為防矢軍衆差向候、然者
 千石殿・長宗我部殿、義統被為一致之
 段、其間得候之間、到右兩所今度出馬
 儀、縦 関白殿雖御下知候、従当家封
 京都聊不存疎隔上者、何条可有
 御遺恨歟、用捨肝要之旨、支而
 雖申渡候、無承引被相懸候、不及実
 儀、不慮之一戰得勝利、殊豊之衆
 依敗北乱、千・長諸勢之不分差異、
 数千騎討果候、案外之至今更無
 是非候、然共深重為申入筋者、京都
 四州之士卒、於府内表無為方
 砌、弟中務少輔為暖、大船三四艘、
 堅固被遂出船候、不可有其隱候、
 旁以御遠慮時々可預取合事、
 所庶幾候、恐々謹言、
 (天正十五年)
 正月拾九日 義久
 宰相殿 御宿所

一—二八 島津義久書状案

節々可令啓之処、遠境故無其儀候、
 仍旧冬以兩使如申登候、大友家連々
 懇望候之哉、引率他邦被執懸之由、
 顯然之条、分国覃折角、日向堺迄
 致出張、為防矢軍衆差向候、然者
 千石殿・長宗我部殿、義統被為一致之
 段、其間得候之間、到右兩所今度出馬
 儀、縦 関白殿雖御下知候、従当家封
 京都聊不存疎隔上者、何条可有
 御遺恨歟、用捨肝要之旨、支而
 雖申渡候、無承引被相懸候、不及実
 儀、不慮之一戰得勝利、殊豊之衆
 依敗北乱、千・長諸勢之不分差異、
 数千騎討果候、案外之至今更無
 是非候、然共深重為申入筋者、京都
 四州之士卒、於府内表無為方
 砌、弟中務少輔為暖、大船三四艘、
 堅固被遂出船候、不可有其隱候、
 旁以御遠慮時々可預取合事、
 所庶幾候、恐々謹言、
 (天正十五年)
 正月拾九日 義久
 宰相殿 御宿所



一—二九 梶井宮最胤法親王御内書

筑前国箱崎八幡

宮之事、往代当門跡

由緒之旧領候、如元被加

還附之下知候者、別而

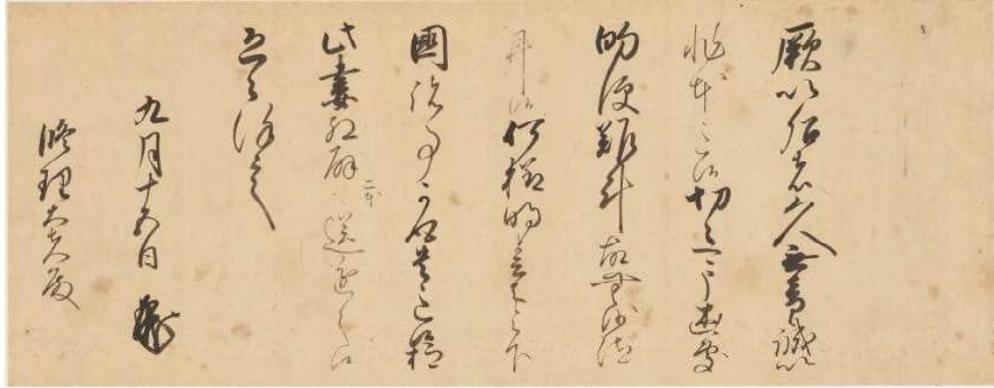
可為武運長久懇

祈候、猶申含仁秀

法印候也、

五月廿八 (花押)

(義久)
鳴津殿



一—三〇 青蓮院宮尊朝法親王書狀

厥以后者久無音候、誠以

非本意候、切々可申述候處、

的便難計故無沙汰

耳候、何様明春者令下

国、諸事可得貴意候、抑

此妻紅扇二本送進之候、

恐々謹言、

九月十五日 (花押)

(島津義久)
修理大夫殿



一—三一 島津義久書状

当年之御慶珍

重々々、仍節々音信

之儀令祝着候、然者近

日中可致上洛用

意候之間、上着之刻

何篇可申候、此旨其方

か、へも心得有へく候、

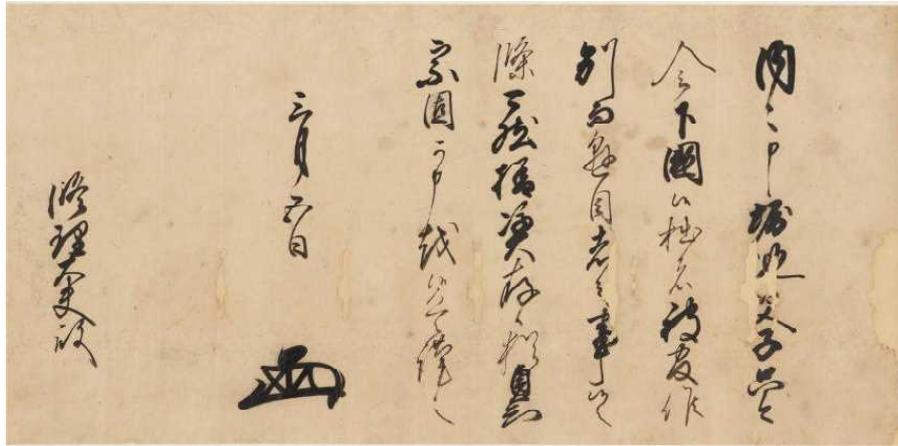
乍乏少鹿皮五枚進

入候、誠祝言之驗計候、

恐々謹言、

二月廿九日 竜伯 (花押)

宗固 (道正庵)



一—三二 近衛前久書状

内々申候、堀池父子(宗叱・弥次郎)只今

令下国候、拙者被官候、

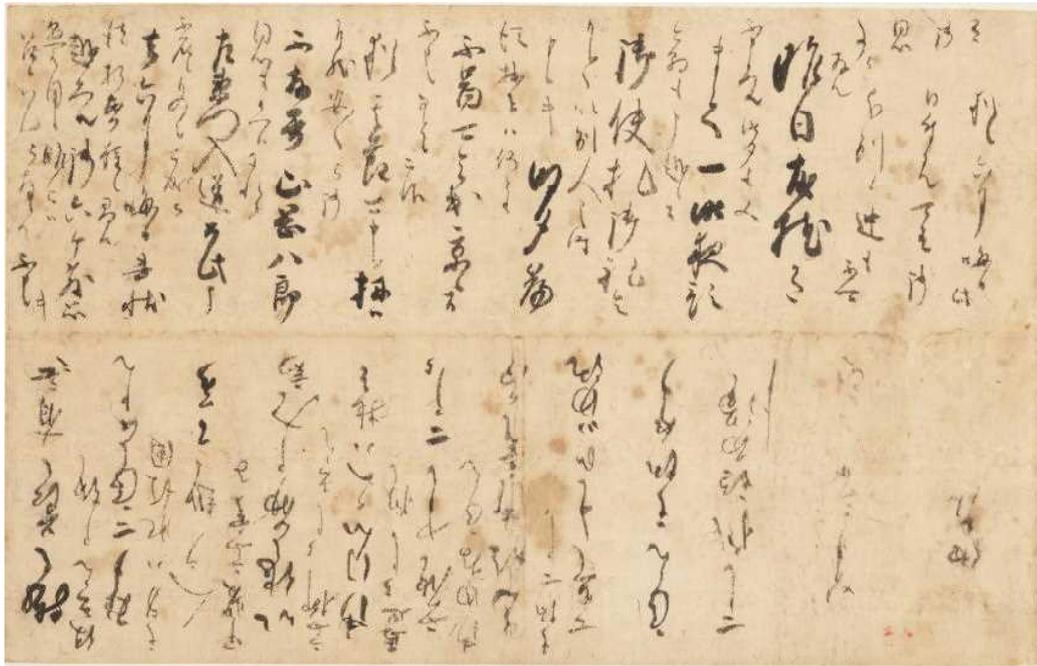
別而懸目者之事候之

条、可然様憑存候、猶貞知(伊勢)・

宗固(道正庵)可申越候、恐々謹言、

三月五日 (花押)

(島津義久)
修理大夫殿



一—三三 近衛前久書状

有御同心事与存候て

猶々、六月晦日、此

日付にて可有御

分別候、迎も不可

(伊勢貞知)

昨日友枕かた

不申候へ共、昨夕も又

まて一昨夜預

今朝も申越候間、

御使札、御礼令

もしく、以別人申候時、

申候キ、明夕篇

從拙者へ何とも

不凶可令出京候間、

不申候など、被仰、

猶其節可申候、扱ハ

自然安くと御

不存寄、山岡八郎

同心も候へハ、われら

左衛門入道如此申候、

不届候ものに可成与

去六月晦日書状

彼折紙種々尋候て

越候へ共、御六ヶ敷思

懸御目候、昨今ハ

召候八んと存候て不申候キ、

然々節々有無之

使者にて申越候、

御返事可承之由申候て

其身ハ肥後國

人ヲ越候間、若

甲斐宗雲子

以他之筋申入候刻、

宗柳与申者にて

御同心候へハ、拙者

馬也与申候、猶々

不届候やうに可申与、

御内存承候て、

先得御意候、如何

其趣可申候、

可在之事候哉、御内証

承候て、其趣返事

可申候、猶期面謁候、

八月三日 山

かしく、

伯老

(島津義久)

明日、大坂の御間、申てくれ候へど申候へ共、既
下にて候間、七日八日兩日之中と
ことく御間、申てくれ候へど申候へ共、既
御札令披見候

これ可令張行之由、
仍昨日者、賀茂
相心得可申旨候
競馬足汰為御
客來故令省略候、

又内々新造御振
廻申入度と申候事、以
勝吉郎何時にても
可有御出候之由被仰候とて、
見物御出之由、御慰与
存候、拙者も御跡より
可参与たくみ申候処、
難去事俄ニ候て
打過申候、就其御
再返一段殊勝ニ存候、
則書付禅林寺へ遣候、
将亦節供為御礼、
如大坂明日御下向
候之由、御苦勞与存候、
大黒被牽候趣、尤之
被仰付様ニ候、惣別
馬鷹ハこ□おしめと

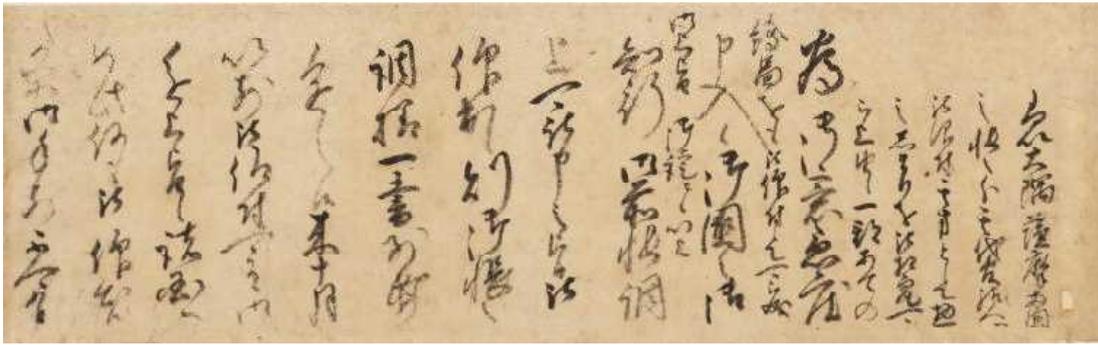
申習候、当時ハ大名之
馬所之大守もよき
馬をハ人ニ遣かね候て
おしめ、悪馬、さてハくせ
馬の用に不立思所の
あるならてハ不遣候由、申
沙汰にて候、御意ニ入
たる馬にて候ハ、たれく
縦申請候共、御同心候
ましく候、次禅林寺之
連歌十日比ニ候、御上洛候
ましきかのよし、いつ
にても貴老御帰京
次第ニ候、長老も、貴老
を申入度との会興行
まてにて、御発句それに
つき被申候へ共、御理候間、
然者御発句の代ニ脇
を御沙汰候やうとの
念にて候キ、いつにても御
帰京之刻たるへく候、猶
(聖護院道澤カ)
期其節候、今日ハ聖門
師弟子一条殿・祐乘・
(伊勢貞知)
友枕などこれへ来臨
にて候、旁追而可申入候、
山 かしく、

乃刻
(島津義久)
伯老
御返事

依無指題目、其後
 者御無音罷過心
 外候、仍巢鷹之儀
 從京都被仰付候間、
 通道之儀求麻へ度々
 雖申理候、曾以無
 合点候、就夫如阿蘇
 表兩人差通度候、
 儒者路次等之儀、無
 其煩様可被仰付
 事所仰候、兼又
 隣所之儀候条、何篇
 御用等於有之者
 互可申承候、恐々謹言、
 鳴津入道
 龍伯 (花押)
 加藤主計頭殿
 参

二——二 島津義久書狀

依無指題目、其後
 者御無音罷過心
 外候、仍巢鷹之儀
 從京都被仰付候間、
 通道之儀求麻へ度々
 雖申理候、曾以無
 合点候、就夫如阿蘇
 表兩人差通度候、
 儒者路次等之儀、無
 其煩様可被仰付
 事所仰候、兼又
 隣所之儀候条、何篇
 御用等於有之者
 互可申承候、恐々謹言、
 鳴津入道
 龍伯 (花押)
 加藤主計頭殿
 参

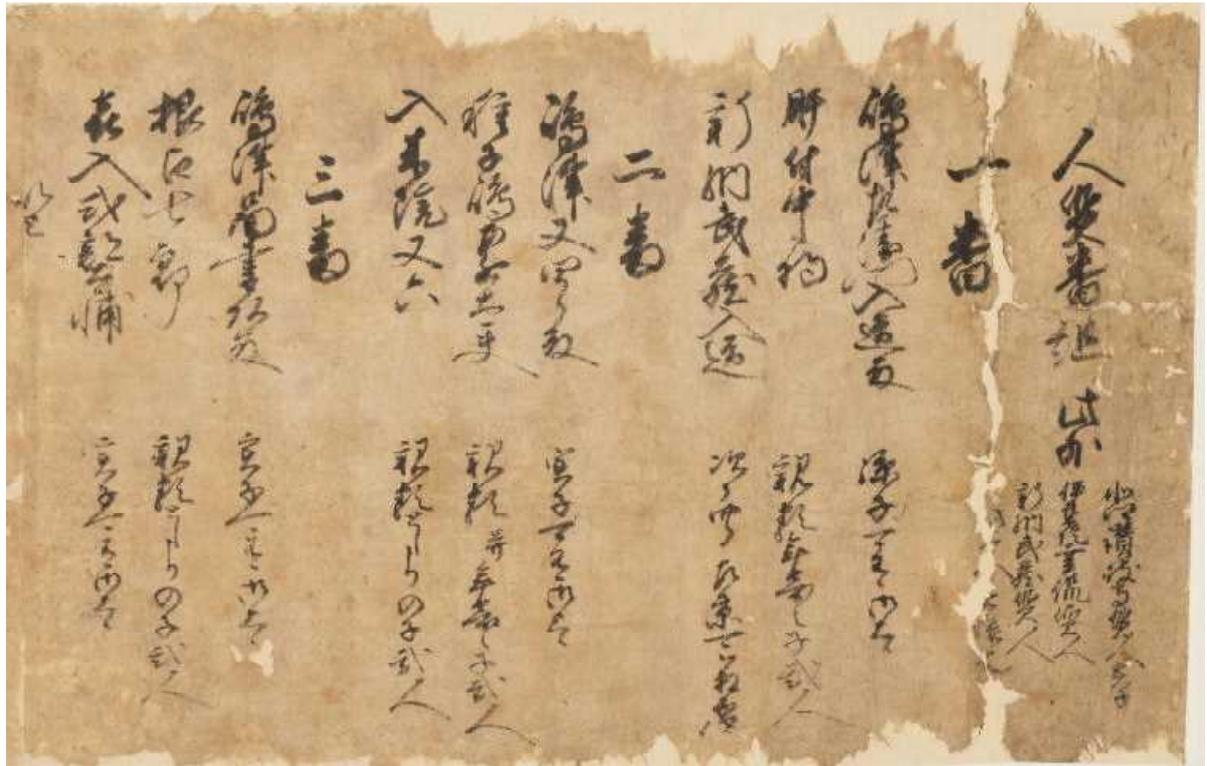


二—三 豊臣家奉行連署奉書

尚以大隅・薩摩兩國
 之帳之分、其代官給人へ
 被仰付、其方として惣
 之しまりを被相究可
 被上由候、一郡あての
 繪図をも被仰付候て、可被成
 御上旨 御詮二候、以上、
 為御意急度
 申入候、御国之御
 知行御前帳調
 上可被申之旨、被
 仰出候、則御帳之
 調様一書別紙
 進之候、来十月
 以前、被仰付可有御
 進上旨候、諸国へ
 如此何も被仰出候
 条、御手前不可有

御油断候、恐々謹言、
 長東大藏大輔
 (天正十九年) 五月三日 正家 (花押)
 増田右衛門尉
 長盛 (花押)
 石田治部少輔
 三成 (花押)
 民部卿法印
 玄以 (花押)

(島津義弘)
 薩摩侍從殿
 人々御中



二—四 島津家人質番組書上

人質番組 此外

北郷讚岐守質人実子
(忠虎)
 伊集院幸侃質人
(忠棟)
 新納武蔵質人
(忠元)
 此三人常詰也、

一番

嶋津左衛門入道殿
(歳久)

孫子可有御上候、

肝付中将
(兼三)

親類年寄之子式人

新納武蔵入道

次郎四郎・左京可被相替候、
(新納忠光)
(同忠増)

二番

嶋津又四郎殿
(彰久)

実子可有御上候、

種子嶋左近太夫
(久時)

親類并年寄之子式人

入来院又六
(重時)

親類としよりの子式人

三番

嶋津図書頭殿
(忠長)

実子可有御上候、

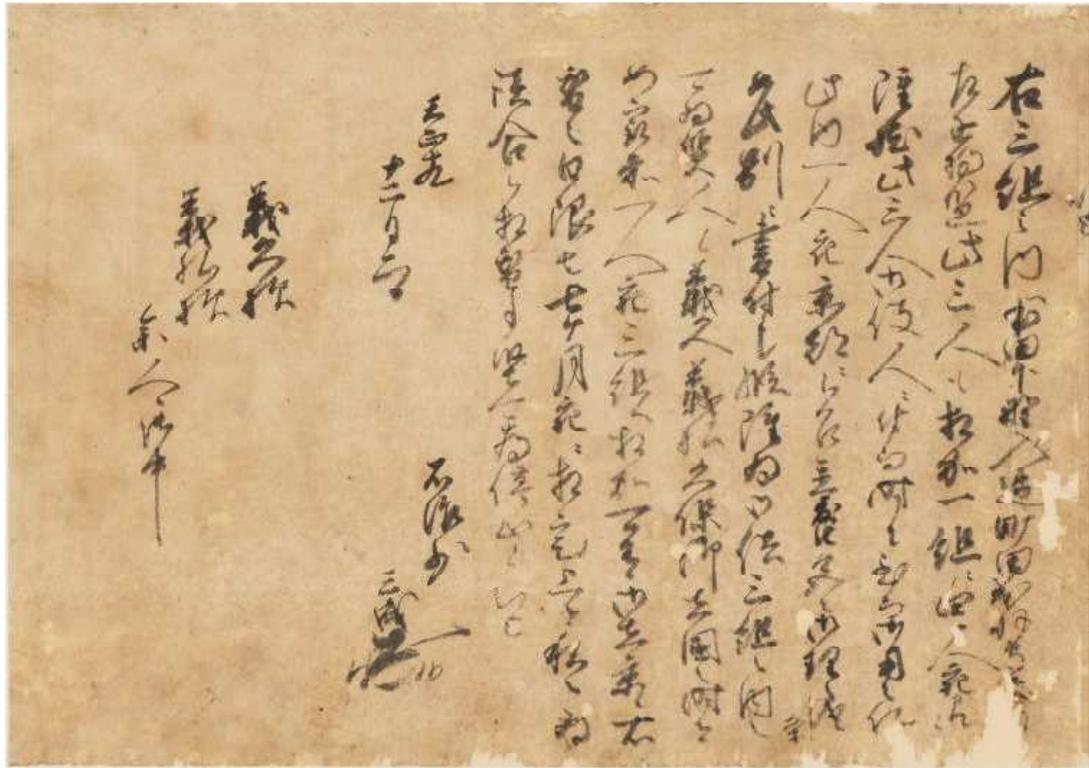
根占七郎
(重張)

親類としよりの子式人

喜入式部太輔
(久通)

実子可有御上候、

以上、



右三組之内へ、本田下野入道・町田出羽守・平田

左近将監、此三人も相加、一組二四人充にて候、

雖然此三人御役人ニ付而、時に至而御用之仁、

此内一人充京都ニ被召置度由、色々御理之儀候条、

如此別ニ書付申候、縦雖為御供、三組之内之

可為質人候、義久・義弘・久保御在国之時者、

如最前一人充三組へ相加、可有御在京候、右

替之日限者七ヶ月充ニ相定上者、私之為

談合被相替事堅可為停止候、以上、

天正十九

石治少

十二月二日

三成 (花押)

義久様

義弘様

参人々御中

猶々、依無好便久不能
書信候、扱々今一度懸御
目度念願迄候、年寄

病者二成申候躰にてハ可令
下国事ハ

不可成候かと
無念候、猶

未当年者不申承候、朝暮

御床敷存候、一段息災二御
入候由、御同名又四郎被申候間、何

よりハ肝要与目出度令満足候、
扱々我等年寄病者二成申

無正躰候、筋相煩、腰立かね、
行歩不自由候、一町とも歩候

事不成候、此躰二候へとも、鷹ハ
執心不止、自然は山へも野へも

籠にて出見物申候、馬をハひか
せ申候躰はかりにて、籠をハ不

出候、をかしき躰御推量之
外候、よき鷹共令所持候をも

難去、皆々所望申持絶候、
給候鶏于今秘蔵申候、如御

書中よく取申候、京廻ニハ鶉
まれに候て、物数ハ中ハ不

成候、もし取損候へハ、わたりかね、
殊更立はしり候間、一をとく

事いか、と、かたく申付候、京都ハ
鷹すへあけ候へは、かくし不申候、

此鷹のなんハきつく候て氣
遣候、并給候犬一段よくかみ候て

秘蔵申候、犬数八十はかりも方々
よりくれ候へ共、給候犬ニまさりたるハ

無之候、奥州より四五年以

前ニ男犬つかれ一給候、一段人
くらひにて候つるか、野も山もよく

かみ申候つるか、相煩候て当年
春死申候、残多候、然而又四郎

犬二疋給令祝着候、菟角
御国之犬よくみえ候、大鷹も

御国ニ出来、家康へ被遣候、以
来も度々うちおとされ候由候、

殊ニ半子去年之鷹被打
落候由候、大鷹にてもなく、兄

鷹にてもなくハ、半子とも、
はしたいとも申候歟、はしたいハ

少秘事之やうに承候、今ハ存たる
者無之候、兄鷹ハ御嫌之由候

つる、弟鷹ハ中ハ望も不成候事二候、
若明年にても、さ明年にても、

兄鷹御おとし候ハ、拙老命之
中二見申度候、西国鷹各別候、

東国鷹御用候者、令馳走下
可申候、馬ハ珍敷ハ無之候歟、拙者も

只今一二疋如形之若馬令所持候、
懸御目度候、次此筆十対・油煙二、

当時一興二候、誠空書を補候
躰計候、猶追々可申候、已上、

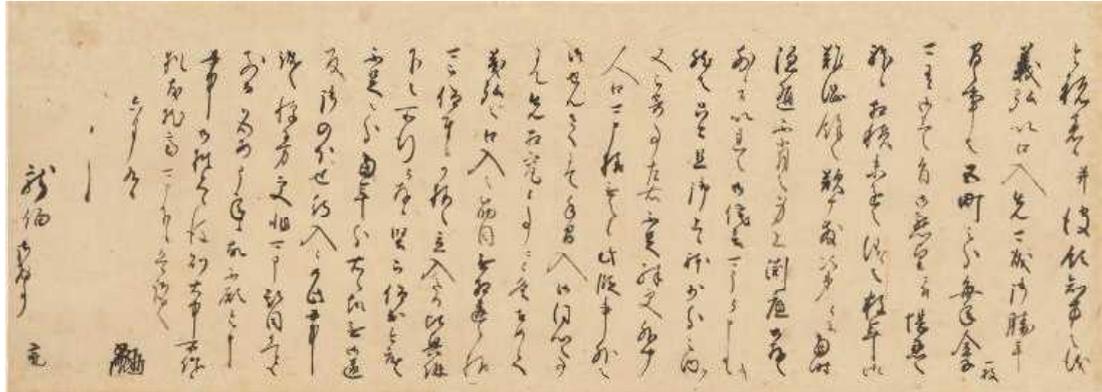
五月三日

(花押)

(墨引)

□ □ 老

山 □



令祝着候、并彼領知方之儀、
 義弘以口入先可成御勝手
 間之事者、五町之分毎年金子一枚
 可有御上之旨、御懇望二付、堪忍之
 躰候、相積未進之儀者、数年御
 難渋、余々歎ケ敷次第与云、当時
 隱遁不肖之身上、洵底御存之
 前候間、以連々御侘言可申与申事候キ、
 然者只今且御上候躰、少分之内
 又被寄事左右不足、殊更外聞
 人口可申様無之候、此段事外之
 御せんさくにて手間入、御同心之事
 にて、先相究候事二候条、せめて
 義弘之口入之筋目、無相違之様
 可被仰付候、か様之立入たる比興、併
 下々所行与存候、堅被仰出、今度之
 不足之分・当年分、右之趣無御違
 反御のほせ待入候、如此書中
 誠々憚千万、更非可申題目候へとも、
 別而御心安承候故、不顧令申候、
 書中御披見之後、則火中所仰候、
 猶友枕齋可申下候、恐々謹言、

(天正二十年)
六月九日

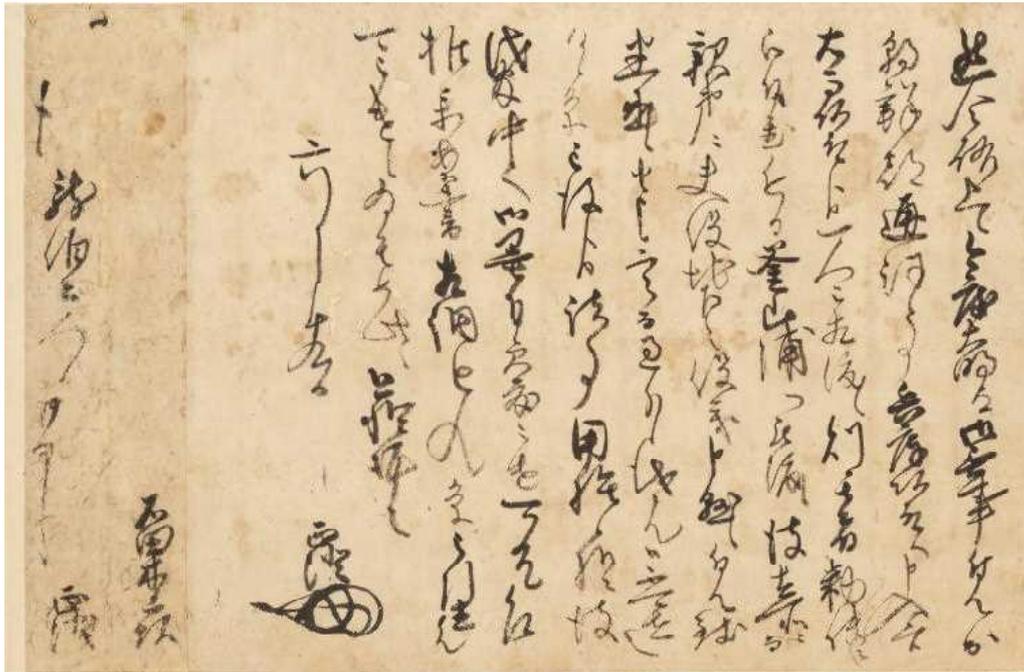
(花押)

(墨引)

(島津義久)
龍伯

御返事

竜



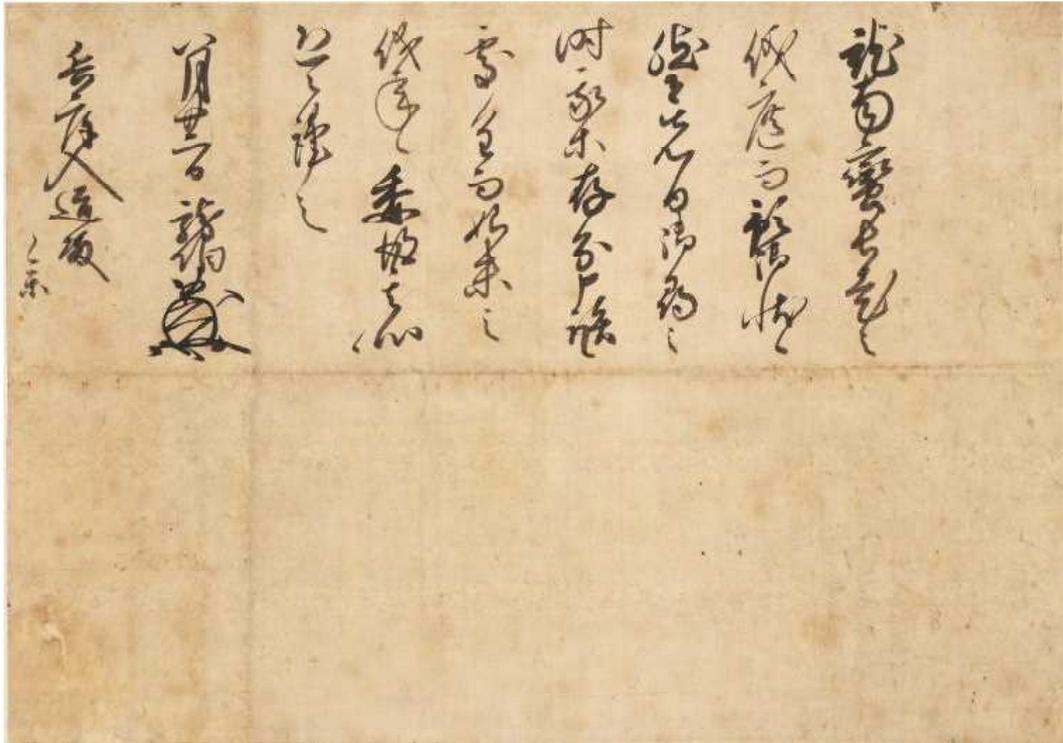
二一七 石田正澄書状

態令啓上候、今度大明^(島津義弘)与御無事付て、於朝鮮都通詞之事、兵庫頭殿へ申入候へハ、^(同以之)右馬頭殿より一人被相渡候、則其者勅使三被付置、近日釜山浦へ罷渡候、彼在所ニ而、親弟ニ夫役・地下之役義申懸候付て、致迷惑候由申候、定而過分之儀ニてハ不可在之候之条、已後より諸事用捨候様ニ、彼代官中へ御墨付、急度被遣、可下候、乍推参案書相調進入候条、被引直候て可被遣候、為其如此候、恐惶謹言、

六月十九日

正澄 (花押)

一 (墨引) ^(同義之) 龍伯公 人々御中 石田木工頭 正澄



二一八 島津義久書状

就南蛮長老之

儀、遮而預御状候、

然者先日御尋之

時、我等存分申談候

処、重而始末之

儀承候、委得其心候、

恐々謹言、

八月廿二日 龍伯 (花押)

(島津義弘)

兵庫入道殿

参

尚以、彼使者廿七日二上着仕候
 条、翌日廿八二龜山へ指通、昨日
 漸歸來候之間、追付今日美濃
 のことく、和田玄番助相添遣申候、
 如何様返事可相聞候之条、巨細之
 段追而可申候、
 就南蛮船之儀、使僧被差上候
 間、即彼者龜山へ差越候、(石田三成)
 濃州へ為御檢地御下向候之条、先々
 日記之趣三兵被成一覽、無合点
 之段、被仰書狀貳通到來候之間、
 為御存知進之候、就中船元江
然与
 貴所無滞留之儀、不届之由被仰
 事候、殊幸侃へ一書、無御登儀、一段不可
 然旨、三兵被仰候、(伊集院忠棟)
 幸侃茂亦述懐
 之様相聞候、此旨納得候て、被入御念
 尤肝要候、恐々謹言、
 十一月二日 龍伯
(天正十七年九)
 兵庫頭殿
(島津義弘)



二一〇 島津義久書状

歳暮之御吉慶

珍重々々、猶更不可

有尽期候、抑為此等之

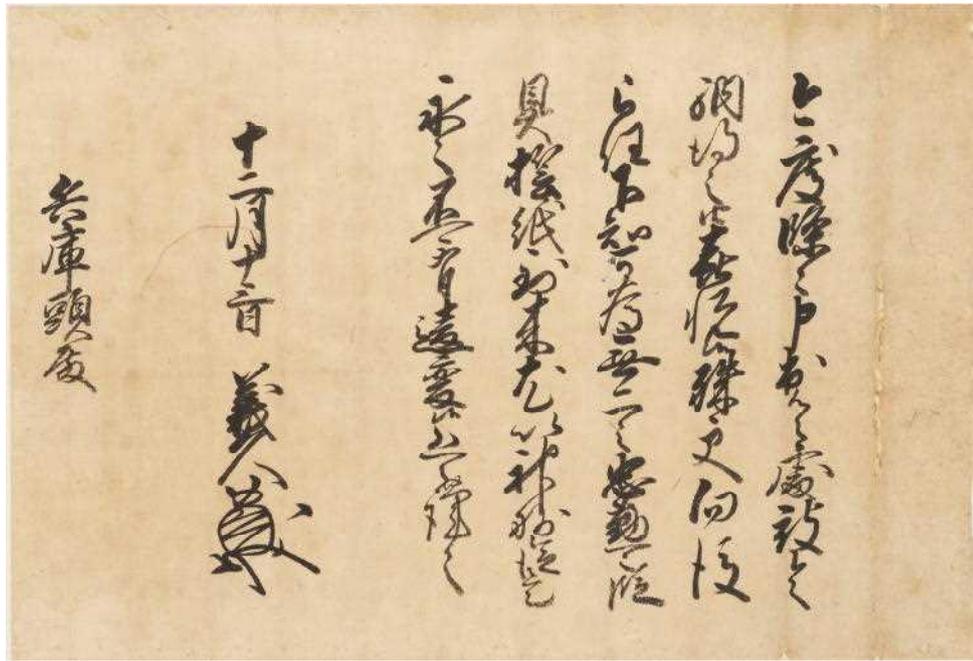
祝言、佳札并五明二本

進之候、倍諸賀明

春可申加候、恐々謹言、

十二月二日 龍伯 (花押)

(島津忠恒)
又八郎殿



二——一一 島津義久書状

今度条々申出候之处、被令

納得之由喜悦候、殊更向後

被任下知、可為無二之忠勤之段、

具誓紙到来尤以神妙候、従是

永々不可有違変候、恐々謹言、

十二月十三日 義久 (花押)

(島津義弘)
兵庫頭殿

下五七二年

息女公領

日別りつて郡之内

高千九百七拾石五斗七升四合貳夕

惣高千四百五十石五斗六升三合六夕之内

高千貳拾九石四斗二升五合八夕

惣高千四百五十石五斗六升三合六夕之内

以上

惣高千石やくなし之地進之候、抑幼少

已来いまに在京、誠以御苦勞之段、併

当家之奉公何事如之乎、然上ハいかやう

之儀雖有之、右知行無異儀可被成格護

儀尤候、向後相違有ましく候、仍状如件、

慶長二年六月九日 りう伯 (花押)

二——二 島津義久知行宛行状

息女公領

日州もろかた郡之内

やつしろ之村

高三千九百七拾石五斗七升四合貳夕

ふかとしの村

惣高千四百五十石五斗六升三合六夕之内

高千貳拾九石四斗二升五合八夕

以上

惣高千石やくなし之地進之候、抑幼少

已来いまに在京、誠以御苦勞之段、併

当家之奉公何事如之乎、然上ハいかやう

之儀雖有之、右知行無異儀可被成格護

儀尤候、向後相違有ましく候、仍状如件、

慶長二年六月九日 りう伯 (花押)



二——一三 島津義久書状（前欠）

ハンすらんと存事ニ候、
 将又庄内通融之儀ニ
 付、於御領内稠成敗共
 有之由承及候、是又
 祝着之至ニ候、弥往還
 無之様ニ頼入候、恐々
 謹言、

（慶長四年） 嶋修入
 五月廿四日 龍伯（花押）

伊東豊 （祐兵）
 □□□



二——一四 島津義久書状

猶以、山口直友(山口直友)山勘兵衛尉殿上洛之儀

御急候へ共、庄内無事之噯

種々申儀有之付而、于今抑留

申候、為御心得候、

就伊集院楯籠、御

使書被差下、殊隣国衆

加勢之儀被仰付候、誠以

外聞実忝次第二候、尤

早々御人数可申請之处、

私之討罰故、到 公儀衆

不慮之儀共出来候而ハ如何、

与存、此節者先以令用捨候、

然者山口勘兵衛尉殿へ致

相談、源二郎下城之儀被仰

聞候处、容易領掌仕、

和睦可相濟之刻ニ、何方

より之到来候之哉、頓ニ相違

仕無事破候、さりとてハ

無念至極二候間、可相果

心底深重候、併勘兵衛尉殿

今度御噯之筋ニ和平仕

儀候者、于今も別儀有ましく

存事候、縦若手之衆無

同心候共、可申調内意二候、

此等之旨具勘兵衛尉殿へ

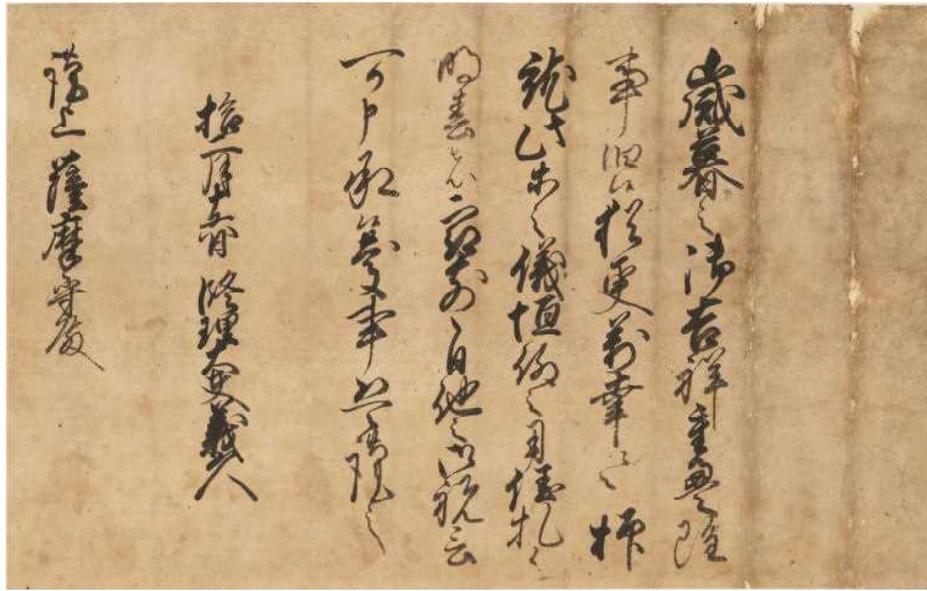
申達候間、被聞召届候而

御取合頼存候、恐々謹言、

嶋修入

(慶長四年) 九月十四日 龍伯 (花押)

伊那□書頭殿



二——一五 島津義久書状

歳暮之御吉祥、重畳雖

事旧候、猶更万幸々々、抑

就此等之儀、恒例之用佳札候、

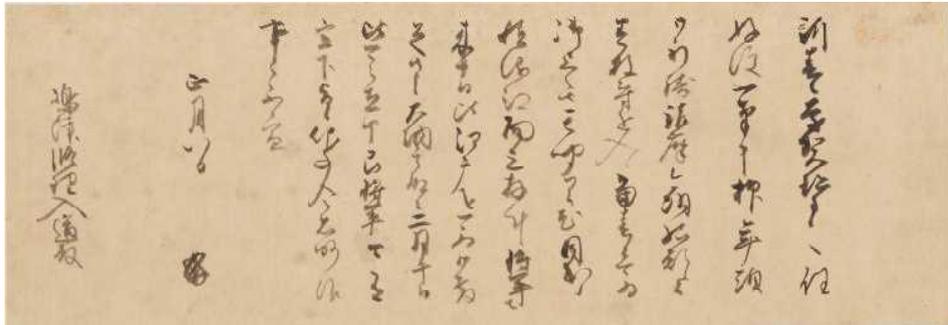
明春者、最前自他之御祝言

可申承候、慶事恐々謹言、

拾二月十六日 修理大夫義久

謹上 薩摩守殿

(島津義虎力)

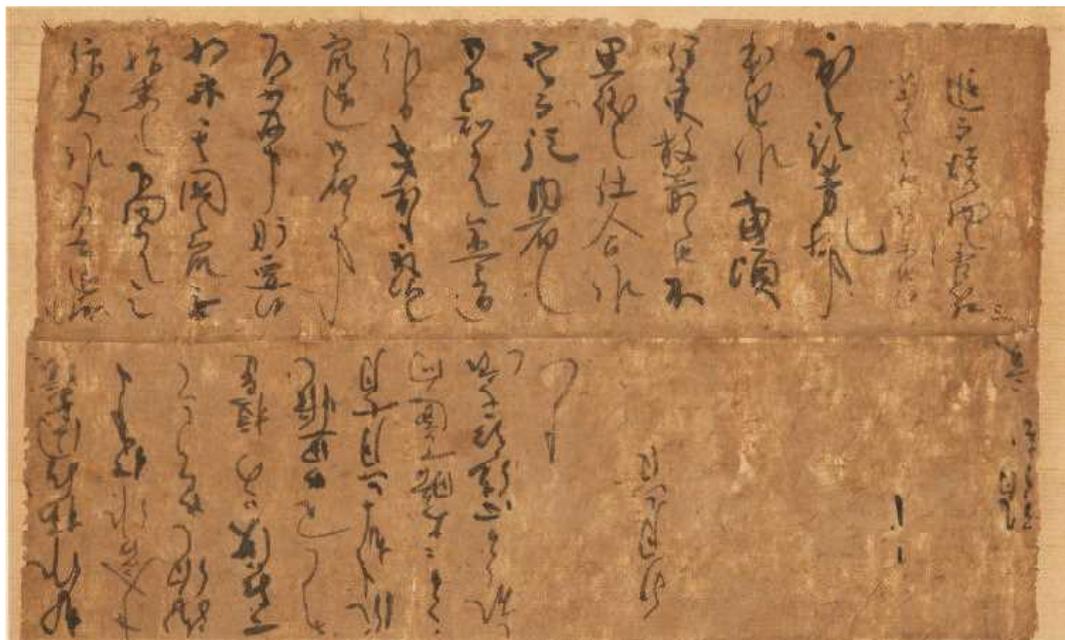


二——一六 照高院如雪（道澄）書状

新春之慶賀珍重々々、任
 好便一筆申候、抑年頭
 御祈禱護摩、今朝結願候間、
 卷数・守進入候、当春者可為
 御上之由、其聞候間、尤目出候、
 積儀期面上存計候、將軍者（徳川家康）
 来十日比江戸を可為御發
 足由申候、大納言殿者二月十日（徳川秀忠）
 比可被立由候、即將軍可有
 宣下旨候、他事令省略候、
 事々、不宣、

（慶長十年）
 正月八日
 （花押）

鳴津（義久）修理入道殿



二一七 石田三成書状

追而焼物之香箱^三

菊かたより被参由候、

度々預芳札事

尤候、様躰円乗坊ニ

本望候、当頃

申合候、何事も

伊東^(祐兵)放箭之由、不

^(島津義久)龍伯之御上候ハ、

思儀之仕合候、

可相済との校量

定而從内府之^(徳川家康)

にて候へ共、御思惟之

御下知にてハ不可有之

段も尤候、六月七月

候与、幾度も取次之

之間ニ大略可遂向

衆迄御届候事、

顔候間、心緒期其節候、

乍不及申肝要候、

かしく、

将亦其国之衆、無

^(慶長四年カ)
卯月六日

始末之下向にて令

(墨引)

仰天候、乍去退屈も

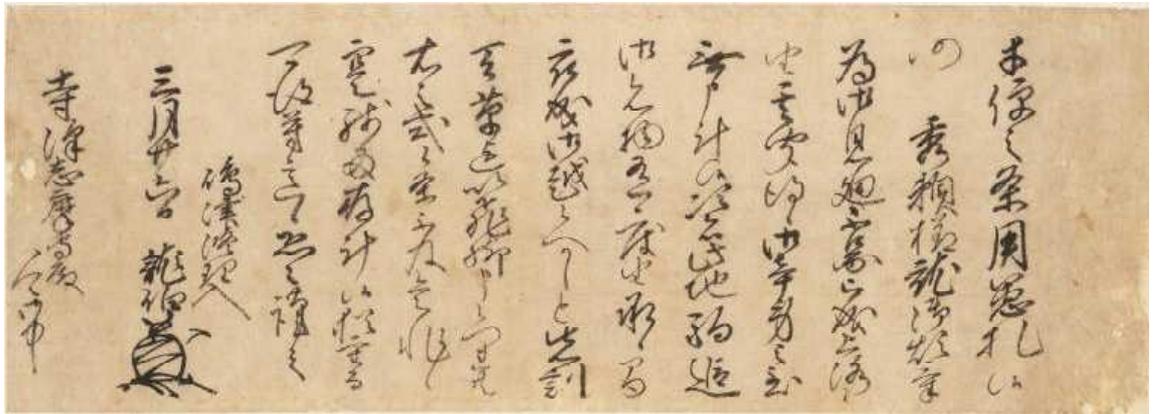
龍伯老

三成

其已來御無音罷過候、
 誠非本意奉存候、然者
 折々忝蒙 上意候、弥
 以恐悦不少候、今一度遂
 上洛、御礼雖申上度候、中々
 不叶心意為躰候之間、同名
 撰津介差(喜入忠統)者彼者
 申含候、仍御太刀一腰・御
 馬一疋、并雖不珍候綴子
 五拾端致進上之候、旁宜
 預御披露候、恐々謹言、
 二月廿六日 龍伯(花押)
 本多上野守殿

二——一八 島津義久書狀

其已來御無音罷過候、
 誠非本意奉存候、然者
 折々忝蒙 上意候、弥
 以恐悦不少候、今一度遂
 上洛、御礼雖申上度候、中々
 不叶心意為躰候之間、同名
 撰津介差(喜入忠統)者彼者
 申含候、仍御太刀一腰・御
 馬一疋、并雖不珍候綴子
 五拾端致進上之候、旁宜
 預御披露候、恐々謹言、
 二月廿六日 龍伯(花押)
 本多上野守殿



二一九 島津義久書状

幸便之条、用愚札候、

仍 (豊臣) 秀頼様就御煩氣、

為御見廻不図被成上洛候

由、其聞得候、御辛勞之至

無申計候、次者此地駒追

御見物有度由承候間、

被成御越候へかしと、先刻

天草迄以飛脚申候つれ共、

右之式候条、不及是非候、

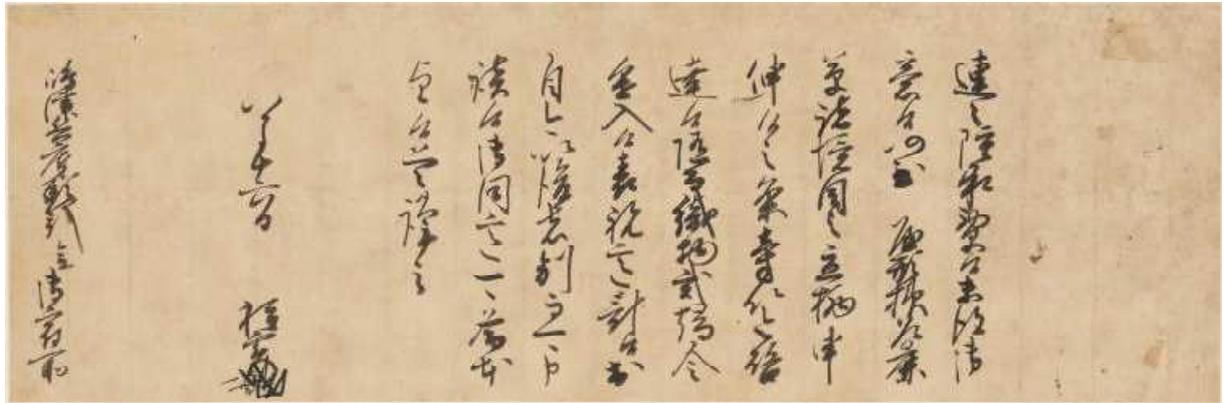
寔残多存計候、猶重而

可得芳意候、恐々謹言、

嶋津修理入

三月廿六日 龍伯 (花押)
(慶長十三年九)

寺沢志摩守殿 (公高)
 人々御中



三十一 秋月種実書状

連々雖承覃候、未得御

意候、仍至 (島津義久) 屋形様、乍鹿

草諸境目之立柄申

伸候之条、旁以令啓

達候、隨而織物貳端令

進入候、表祝意計候、於

自今以後者、別而可申

談候、御同意可為本

望候、恐々謹言、

八月十六日 種実 (花押)

嶋津 (忠平) 兵庫頭 駿御宿所

依未申通、最前従是
 不得賢意候之處、遮而
 態芳翰、欣然之至候、仍
 銀子參拾兩送給之候、
 尤悦入候、祈念之事、
 友枕齋就伝語不存疎意候、
 如此之儀者、相応之子細
 候之處、慇懃之芳染、却而
 令迷惑候、近日可為御
 上由候間、事々期其節、
 不能詳候、猶從友枕齋
 可有演說候也、謹言、
 六月九日 (花押)
 鳴津兵庫頭殿

三—二 照高院如雪(道澄)書狀

依未申通、最前従是

不得賢意候之處、遮而

態芳翰、欣然之至候、仍

銀子參拾兩送給之候、

尤悦入候、祈念之事、

友枕齋就伝語不存疎意候、

如此之儀者、相応之子細

候之處、慇懃之芳染、却而

令迷惑候、近日可為御

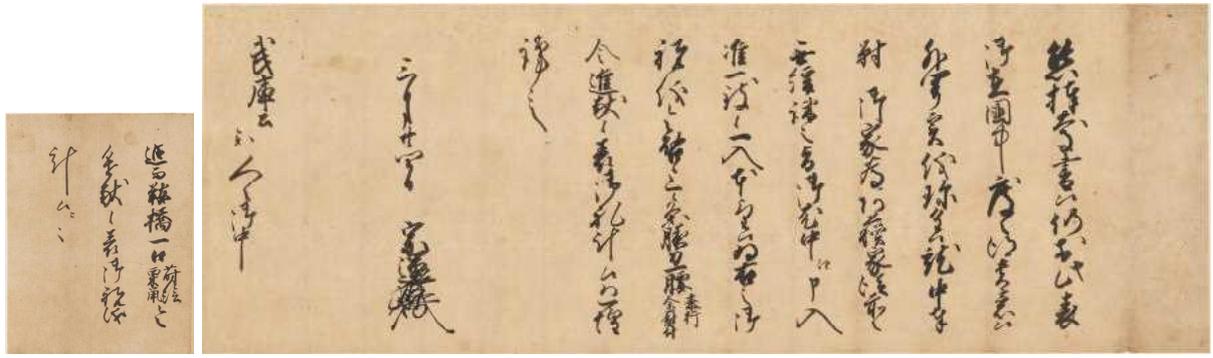
上由候間、事々期其節、

不能詳候、猶從友枕齋

可有演說候也、謹言、

六月九日 (花押)

鳴津兵庫頭殿



三—三 甲斐宗運（親直）書状

態捧慶書候、仍於此表
 御在国中度々得貴意候、
 外聞実儀珍重候、就中奉
 対 御家、為阿蘇家従前々
 無緩疎之旨、御老中^江申入、
 准一致候、一入本望候、為右之御
 祝儀令啓上候条、腋刀一腰^{奉行}
 令進献候、表御礼計候、恐惶
 謹言、

三月廿四日 宗運（花押）

武庫公^{（島津忠平）}
 参人々御中

追而、鞍橋一口^{時繪}
 進献候、表御祝儀^{栗鼠}
 計候々々、



三—四 島津忠平書状案

誠此表之干戈、得勝利

到于阿蘇家無殘党

致所勘候、為右之祝言

使書并太刀二色到来、

御懇志之段珍重候、倍

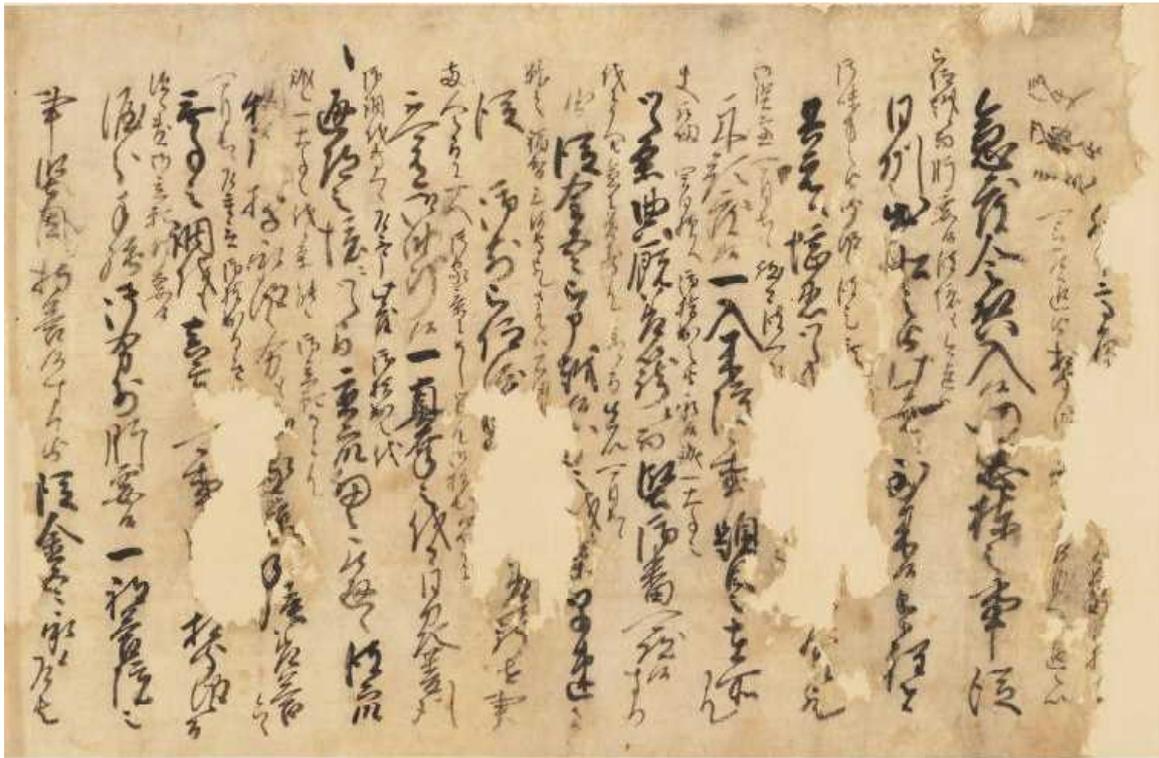
方角之儀、可被運

堅才事專一候、恐々謹言、

(天正十三年)

潤八月廿九日 忠平

小代下(親泰)総守殿



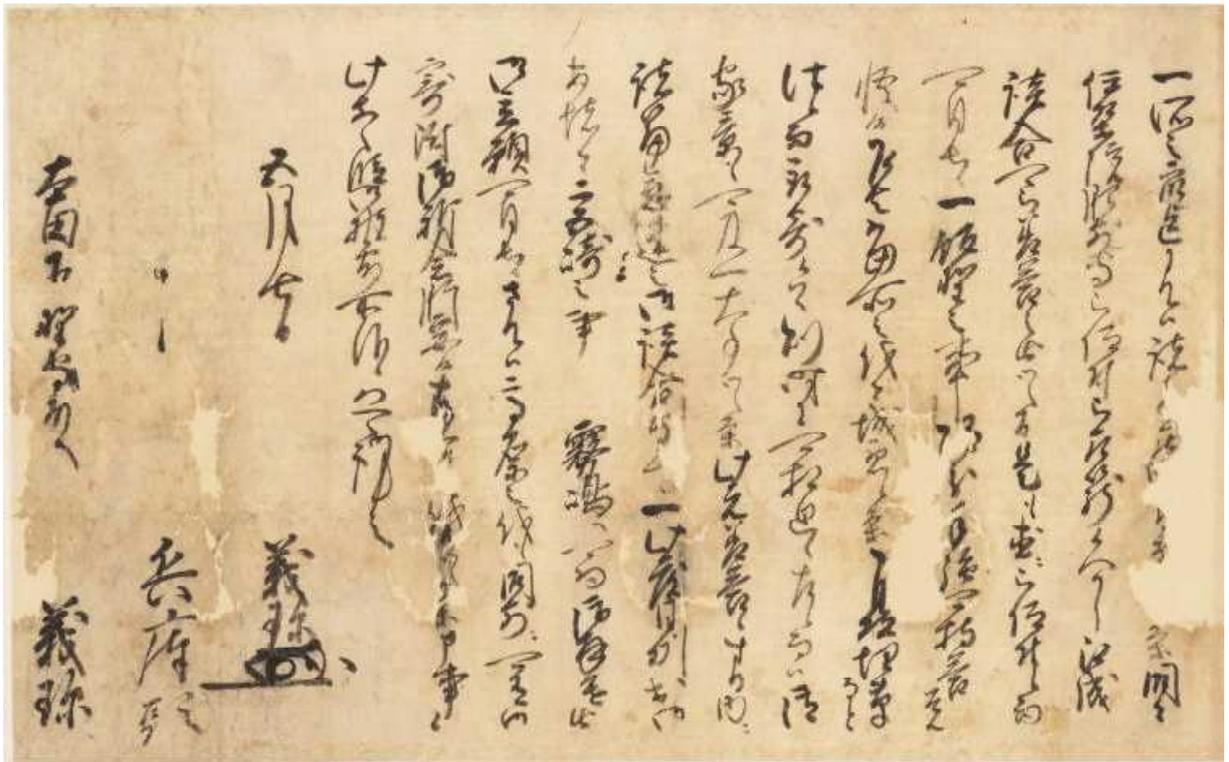
三—五 島津義弘書状

猶々高原□
 可被罷退由相聞得、
 御使御頼之由、重疊
 被仰越候而肝要候、彼境も今迄ハ
 御味方之由聞得候、彼は無御
 御賢慮可目出候、然者彼一通
 使罷帰、関白様へ御指出之由承候、誠一大事之
 儀に候へ共、急に差寄候て参候間、先以可目出候、
 就之福智三河守歟、さて八石田
 両人之間に一人御家景にめし留候て、御指出候やうに
 御調儀專一候、乍不申此度御指出之儀、
 誠々一大事之儀候条、能々御立願な候て
 可目出候、乍重言御指出なき
 深々敷御立願肝要候、

急度令啓入候、仍忠棟之事從
 日州出船之由、此元ニ到来候、今程者
 其元へ堪忍候之哉□
 示預度候、一、入来院之事、題目之在所にて
 候之条、典厩差籠ニ而堅御番可然候する
 由、從金吾被申越候、尤之儀候条、早速ニ
 從 御前被仰渡、典□
 不可有御油断候、一、真幸之儀者日州・菱刈
 通道之境ニ候之間、京衆細々罷通候、彼衆
 物語□拙子承得候分も、□家景手強差答候ハ、
 無事之調儀も真実可事□□相聞得候間、
 涯分手強御分別肝要候、一、祁答院之
 事、堅固ニ持答候する由、從金吾承候、乍去

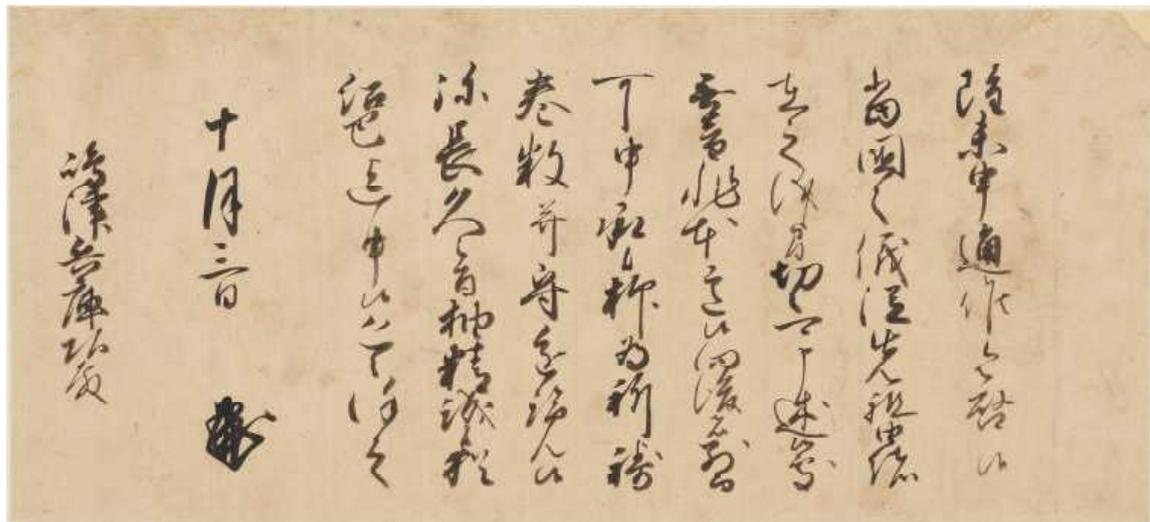
吉田若狭□
 庄内へ□追々以

差籠せ事



一所之衆迄にてハ、諸事罷□間敷□条、同者
 伊集院肥前守被仰付、被召籠候へかし、被成
(久信)
 談合可被差答之由候之間、是も直^二被仰付候而
 可目出候、一、飯野之事、随分手強可持答覚
 悟^二候、乍去当所之儀者城悪候条、自然埋草など
 仕候而取寄候ハ、則時に可相廻候、左候而ハ御
 家景も可及一大事候之条、此元差答候する内^二、
 諸篇急速之御談合專一候、一、此度日州於御
 安堵者、宮崎之事、霧嶋へ可為御拜進由、
 御立願可目出候、さてハ高原之儀も同前^二可有御
 寄附、御祈念肝要候、存分之儀共候之条申事候、
 此等之段、御披露所仰候、恐々謹言、
(天正十五年)
 五月七日 義珍(義弘) (花押)
 (墨引) 兵庫頭
 本田下野守殿へ 義珍(親貞)

※本文書、前半の傍注を省略する。



三一六 青蓮院宮尊朝法親王書狀

雖未申通候令啓候、

當国之儀、從先祖由緒

在之儀候間、切々可申述候処、

無音非本意候、向後者、別而

可申承候、抑為祈禱

卷数并守進覽候、

弥長久之旨、抽精誠候、猶

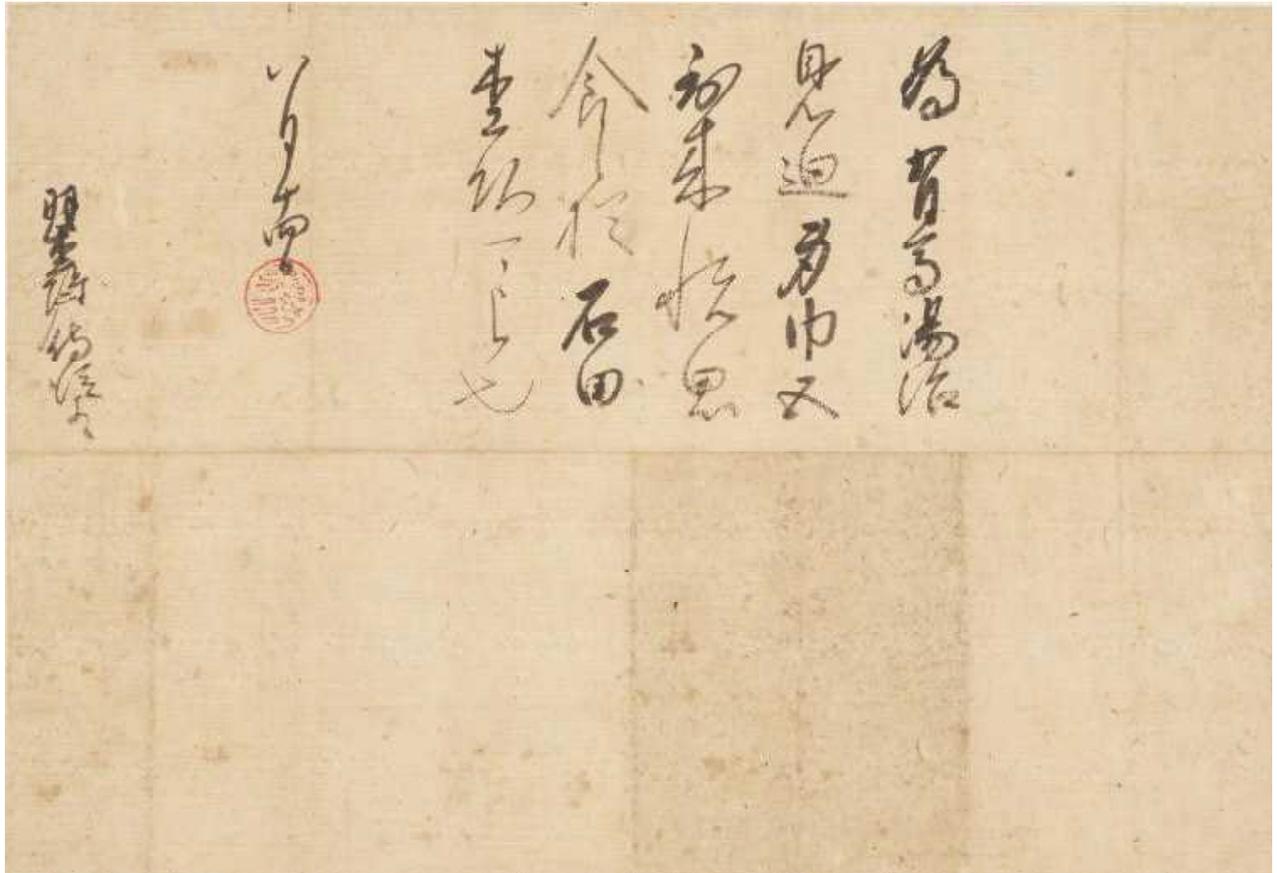
紹(里村)巴迄申候、恐々謹言、

十月三日

(花押)

鳴津兵庫頭殿

(義弘)



三一七 豊臣秀吉朱印状

為有馬湯治

見廻、身巾五

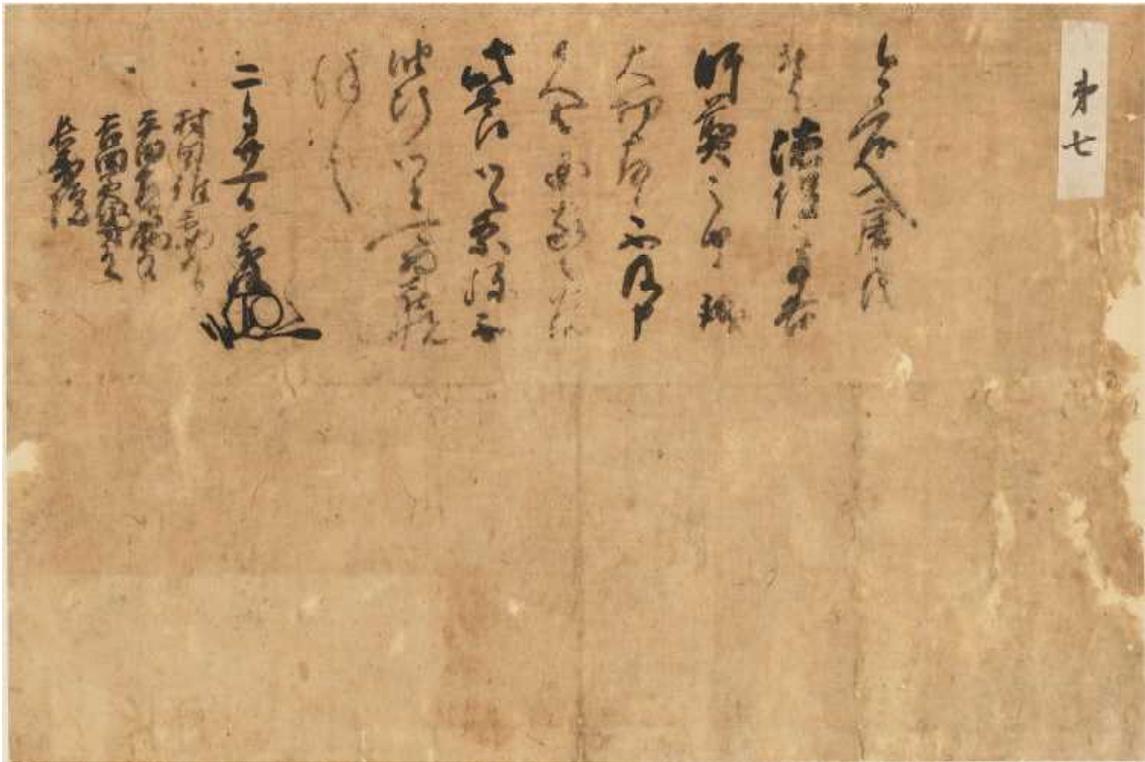
到来、悦思

食候、猶石田

杓頭(正澄)可申候也、

八月十四日 ○

羽柴薩摩侍従(義弘)とのへ



三——八 島津義弘書状

今度入唐之儀

付て徳役之事、各

肝煎之由候、誠

大切存候、不及申

候へ共、国家之為

此節候之条、弥無

油断候者可為喜悦、

謹言、

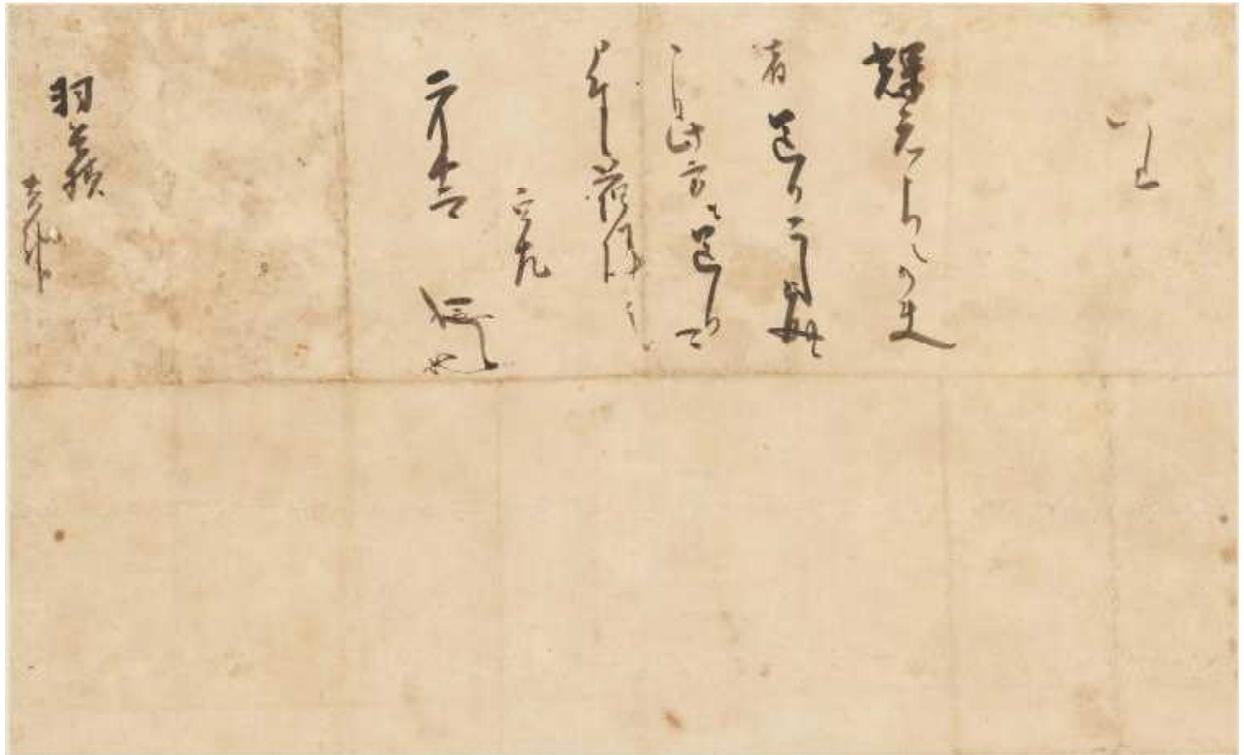
(天正二十年)
二月廿一日 義弘 (花押)

村田雅樂助殿
(經宣)

平田左馬助殿
(増宗)

吉田美作守殿
(清存)

長寿院
(盛淳)



三一九 某一之書状

以上、

輝元(毛利)より之御使

者、送りこし被成候、

自此方も送り可

申付候、恐惶謹言、

二月十二日 宇左 一之(花押)

羽兵様(島津義弘)
貴報



三——一〇 山中長俊書状

於博多其表御置
 兵糧可計渡旨被
 仰出候、御手前御船
 御着岸時分可罷
 下旨、御意候、於
 様子者、御兩御使可
 被相達候、無油断舟
 可被差渡候、奉待候、
 委曲其節可申入候、
 恐惶謹言、

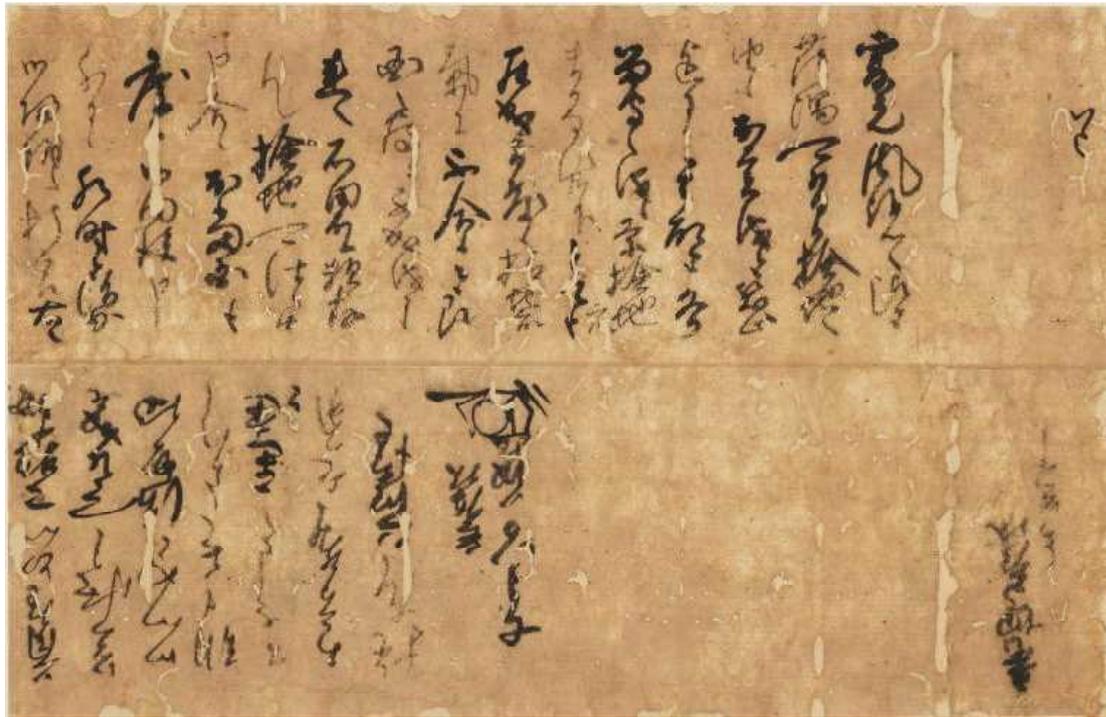
山々城
 三月廿三日 長俊 (花押)

(島津義弘)
 羽薩侍様
 人々御中

三十一 島津義弘書状 (前欠)

捧壹翰候、仍赤国之始末
 未見分躰候間、
 不可有程之由、其意候、
 然者 尊老様御渡海
 静謐已後、被成御渡
 海候てハ、御外聞旁御
 分別不可然候、とても
 於被成御渡海者、急度
 可被思食立候、
 一、乘馬衆之事、去年
 相良新右・白坂七右にて
 申上候へ共、無其首尾候、
 不及是非候、ことに今度
 跡立之人衆、馬に乗

へき程の者、其用意も
 無之候、曲事迄に候、
 毛利彦州(吉成)など、家中ハ
 五十石・六十石取候者も、
 馬にハ乗候と見之候、
 可被食列御供衆、各
 馬に乗候へき用意專
 一候、無御由断可被仰付候、
 先度も如申上候、可被仰
 付候、惣別馬に乗候
 程の者、さし物さし候
 ハぬハ無之候、但右之条、
 各用意候など、申二付
 御渡海御延引なされてハ
 笑止二候、とかく万事を
 さしをかれ、御渡海之儀者、
 不可有御由断候、恐惶敬白、
 兵庫頭
 六月廿日 義弘(花押)
(島津義久)
 竜伯様
 参人々御中



三——一二 島津義弘書状

以上、

爰元風説之趣者、
 薩・隅可有御檢地之
 由候、於実儀者笑止
 迄に候、其故者、各
 留守之儀候条、檢地衆
 まかなひ被下^{〔以カ〕}、とても
 罷成間敷候、檢地衆
 氣に不合候者、即
 国之為^二不成儀に候、
^{〔三成〕}
 連々石田殿頼存
 候て、檢地可仕之由
 申合候、於当国も
 度々御内談申
 分に候、然時者治少
 御帰朝之折節、右之

首尾を以可頼存候

覚悟に候、可被成其

御心得候、治少御帰

朝も近々たるへく候

間、さして遅速者

有間敷候歟、御用

捨尤候、恐惶謹言、

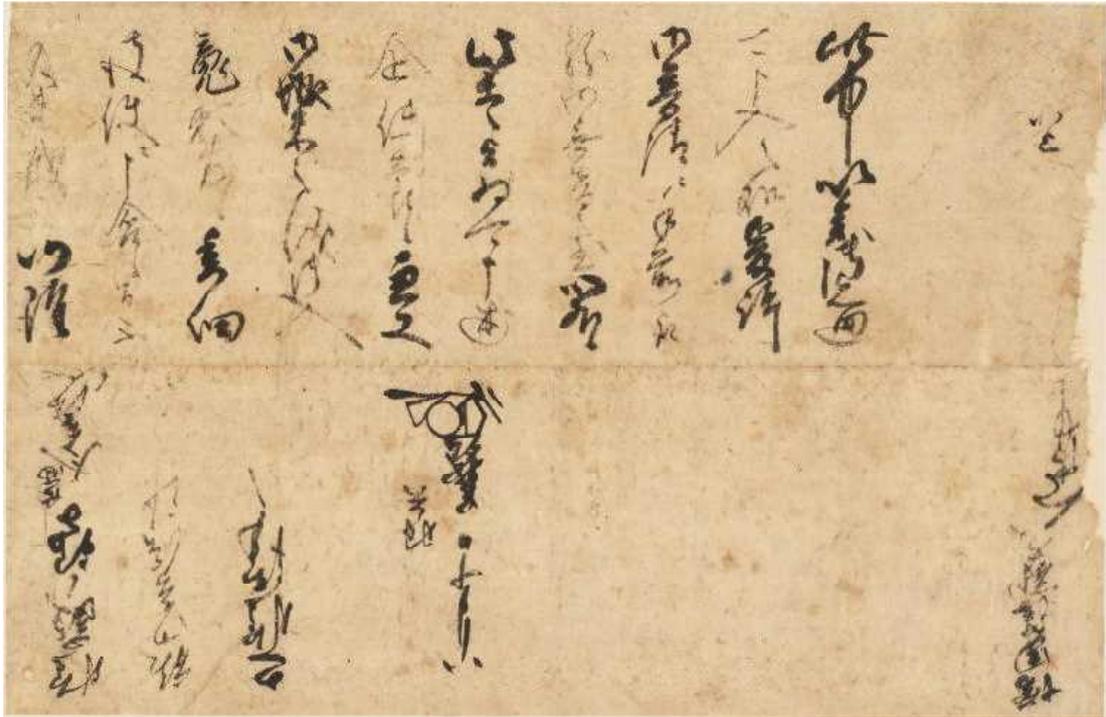
兵庫頭

^{〔文祿二年〕}

七月八日 義弘 ^{〔花押〕}

^{〔島津義久〕}
 竜伯尊老様

参足下



三——一三 島津義弘書状

以上、

輕微候、銀子廿兩令進覽候

此中以參御見廻

聊御音信計候、

可申入之處、爰許

恐惶謹言、

御普請二手前取

紛、御無音之至心外候、

羽兵

此等之旨為可申述、

八月十日 義弘 (花押)

企使節候、兼又

御城米之儀、御入

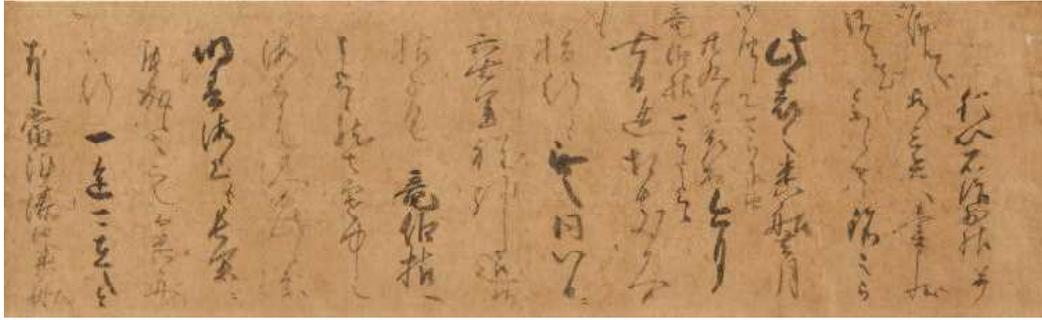
魂頼存候、委細

彼使二申合候間、不

及書載候、仍雖

增田右衛門尉殿 (長盛)

人々御中



三——一四 島津義弘書状

(石田三成)

猶以石治少様并

(安宅秀安)

安三兵へ書状

参らせ候、銘々被

御覧分、

使者を以

御届候て可被下由、

(島津義久)

竜伯様へ可被申上候、

以上、

此表之番船、去月

廿九日差出、今月

七日迄相支候へ共、

指行も無之、同八日^二

六七里程引退候

様子、具 竜伯様へ

申上候、然者寒中之

海上にてさへ如此候条、

明春海上も長閑^二

罷成候ハ、定而番舟

之行、一途可在之と

存候、当陣湊口へ番船

相支候て、日本船之

通用、一切不可在之候、

左様^二候者、当陣兵糧

可相続様有間敷候、何

としても兵糧之儀、年内

被差渡候様、遮而国元へ

被仰付尤候、於御由断者

可為迷惑候、自是も

国元へ度々申越候へ共

不調候間、被入御念候様

可被申上候、恐々謹言、

十月十二日 義弘(花押)

(本田親貞)

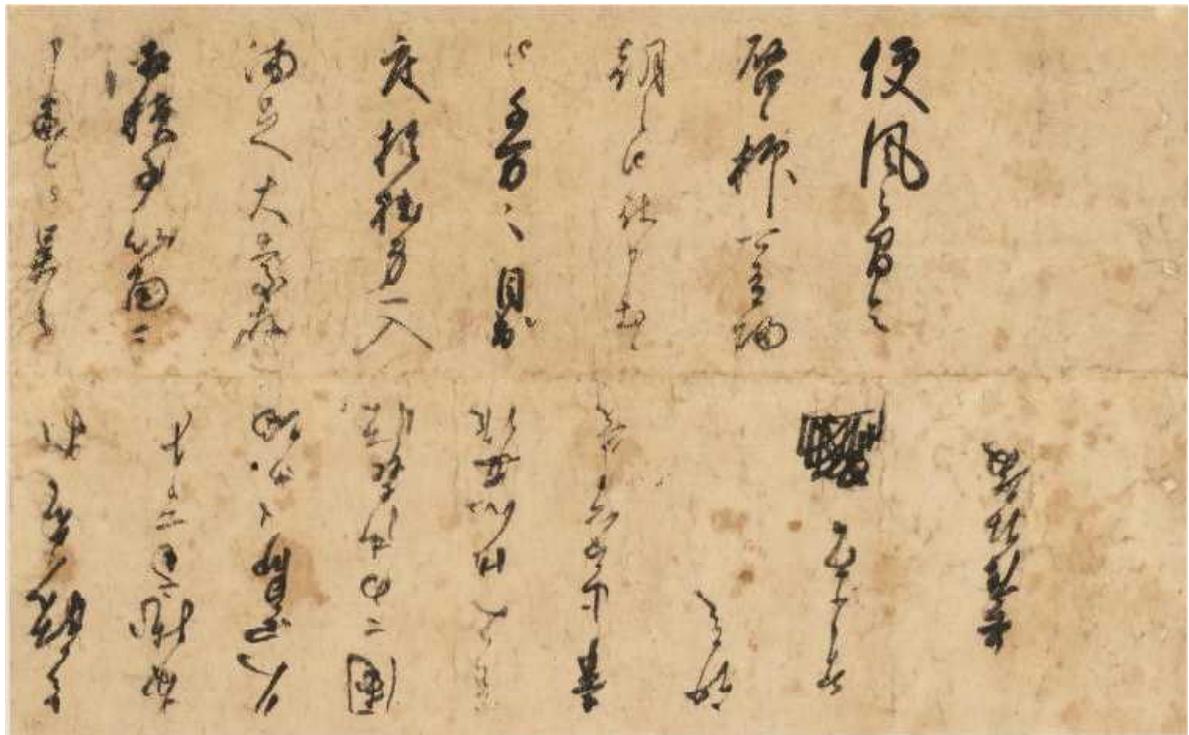
本野州

(新納忠元)

新武入

(町田久倍)

町羽入



三——一五 近衛前久書状

便風候間令

令祝着候、猶

啓候、抑可有帰

(伊勢貞知)
友枕齋可申下候、

朝之由被申出候

(島津忠清)
久四郎も御帰

由、千万々々目出

国可為御喜悦候、

度、於拙身一入

是又御心安候、

満足大慶存候、

旁追而可申候、恐々

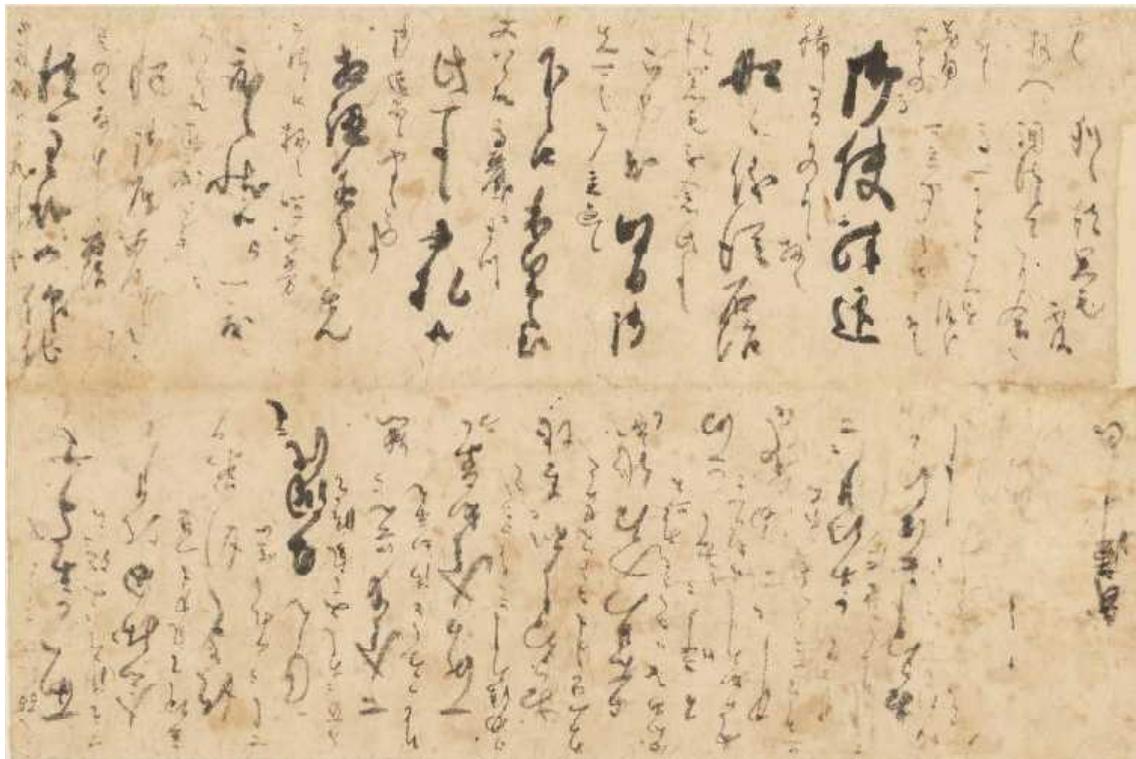
相積事以面可

謹言、

申述候、吳々

(文祿四年)
卯月十五日 (花押)

(島津義弘)
兵庫頭殿



三一六 近衛前久自筆書状

方々 猶々、彼黒毛不及
数人^ニ 調法候て、自余之
申付候、馬一かと候ハんを涯分
菟角 可立聞之由申付候、
一かとの馬
御使殊迎

稀なるものにて候、扱々
船之儀、從石治
彼黒毛無念此事候、
被申出、明日御

先可申候ヲ置延候、
下之由、本望之至

^(島津忠恒)
又八郎殿高麗^ニまつ
此一事候、書札共

御逼留候やう^ニとの事
相認進之候、先

被仰候由、扱々咲止千万、
度之状共与一度^ニ

又八郎殿退屈可参候と
慥御届所仰候、次^ニ

是のみ存計候、^(石田三成)
彼馬之儀、如仰他

御取成ハ不成事候哉、

定路次迄ま

所へ参候事、無

可有御上候^ニ、又跡へ被
念残多次第候、

立帰候ハ、氣力もつき

彼馬之行衛ヲ

可申と、くれ〜咲止

承候て、及調法^ニも

千万^ニ存候、又天氣晴候ハ、

可令才覚与、態

ちとかる〜と御出京候て、

一昨日令出京候而

御物語候へ候、こ、もと御なくさみ

相尋申候処^ニ、青地

あるへき事もなく候へ共、せめて

与右衛門入道他出候

御心安を御なくさみにと思召、

間、呼^ニ遣候、今明

必々御出候へ候、御出候ハんと

中^ニ可帰宅之由

思召候ハ、一兩日以前^ニ御左右

申候間、参次第二可

可承候、ちと〜我等

相尋候、無由断候、

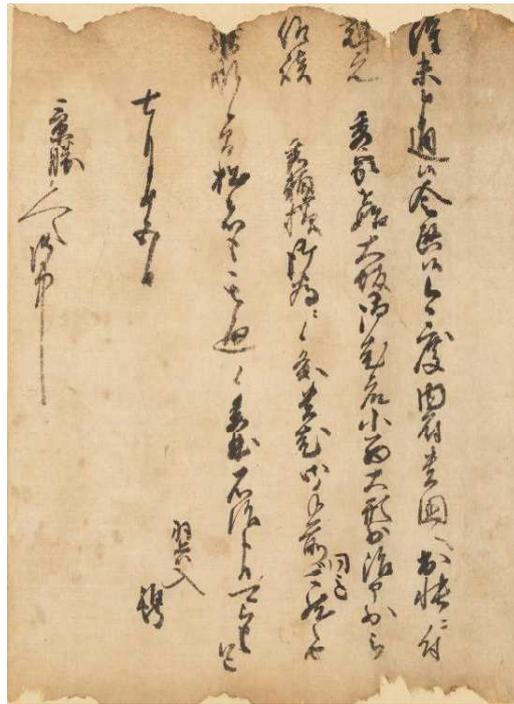
他行候へハ、いか、と かしく、

(墨引)

^(島津義弘)
武庫

山

※文禄五年五月ごろのものか。



三一七 島津義弘書状案

雖未申通候令啓候、今度内府貴国へ出張二付、

(徳川家康)

輝元・秀家を始、大坂御老衆小西・大刑少・治部少被

(行長)

(大谷吉継)

(石田三成)

仰談、秀頼様御為ニ候条、貴老御手前。可然之由

(豊臣)

(同意)

強承候間、拙者も其通候、委曲石治より可被申候、以上、

羽兵入

維新

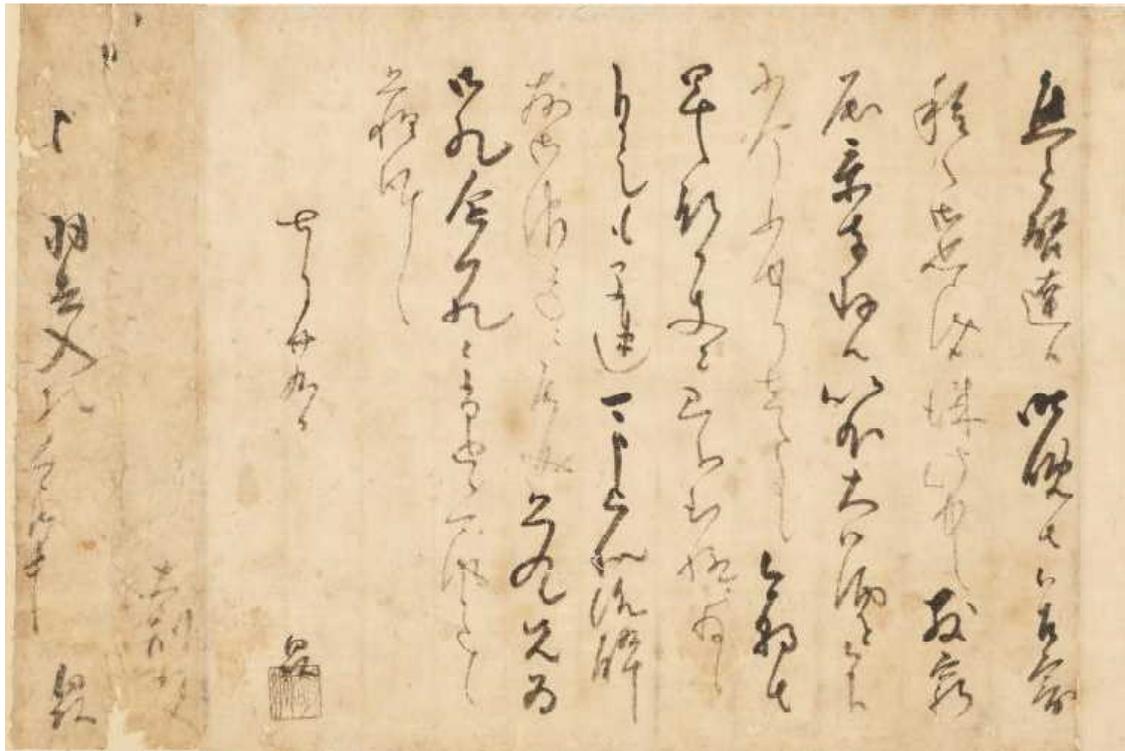
七月十五日

(慶長五年)

景勝

(上杉)

人々御中



三一八 大谷吉繼書状

態令啓達候、昨晚者被召寄

種々御懇之儀共、誠此中之散窮

屈、忝奉存候、以外大御酒を被下、

于今ふせり在之事情、今朝者

早々預御使者、過分至極ニ存候、

自是も早速可申上処、沈酔

故御報遅々罷成恐入候、先為

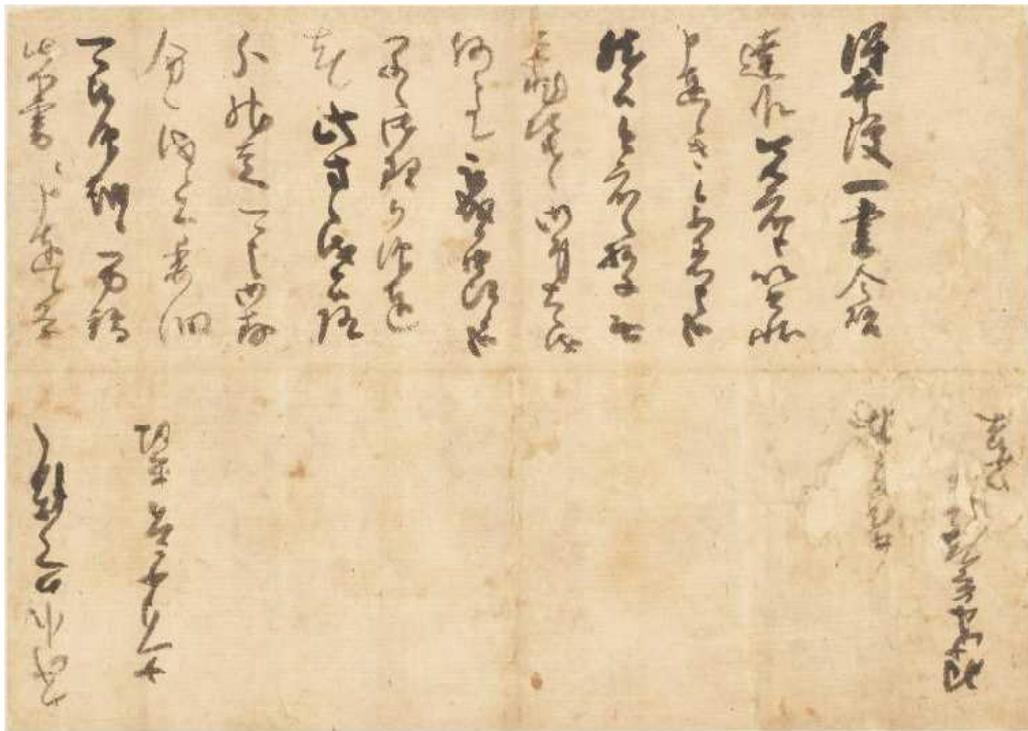
御礼企一札候、尚追々可得御意候、

恐惶謹言、

七月廿九日

白頭□

「 (墨引) 羽兵入様 (島津義弘) 大刑少入
人々御中 白頭
」



三——一九 井伊直政書状

得幸便一書令啓

如此候、恐々謹言、

達候、先度も以書状

申達候き、参着申候哉、

(慶長五年)
十一月十三日 直政

然者今度之様子、無

是非次第候、御身上之儀、

何とて被成御由断候哉、

早々御理被仰達

尤候、此方之儀者、随

分馳走可申候、御存

分之儀候者、委細

可被仰越候、万端

井伊兵部少輔

先書二申達候条

(島津義弘)
羽柴兵庫頭殿

御宿所

態以使者申入候、仍拙者事

筑前致拝領、当月上旬

入国仕候条、令啓上候、

一、御身上之儀(長毎)付而相良・

(種長)秋月下国候刻、従大坂

以書中申候処、兩通御

返書拝見仕候、然者

御家之儀、我等式御指南

申儀如何ニ候へ共、従先年

申談儀者、かやうの節

推量をも申、又者可得

御意ためと存知申合

たる筋目候条、不殘(井伊)

愚意申入候、急度并(直政)

兵少以御侘言御尤候、

於様子者鳥井勘左衛門尉ニ

申合候、従最前使者

可進之候へ共、兩人者相

煩、一人者上方ニ在之

候之間、此使者進入候、

高麗以來色々様々

御座候へ共、拙者式などハ

かりそめも表裏別心

無御座候事、貴老洩底

御存知之前候条、只今も

無御疑、此者口上被聞

召届、御分別候て、早速

対(徳川家康)内府様、御懇望

専用ニ存候、

一、先度於豊前表、此

方へ取申候舟之乗衆、

返し可進之由候て、書立

被懸御意候、拙者手前ニ

在之者志人女式人

男、都合三人進之候、

○以下追而書く行間書

相殘分者 内府様へ上り

申候間、是者致才覚自跡

可進入候、如在存間敷候、

一、龍伯(島津義久)・又八殿(同忠恒)へも以書中

申進候、是又御届頼存候、

猶追々可得 尊意候間、不能

委細候、恐惶謹言、

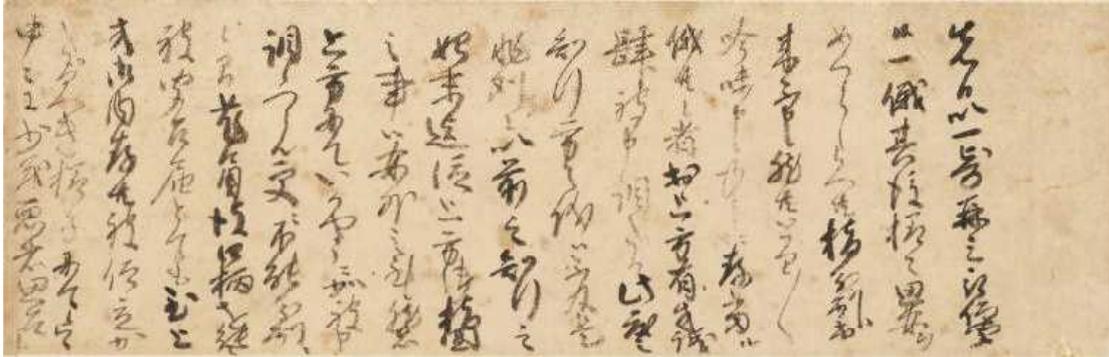
(慶長五年) 黒田甲斐守

(島津義弘) 十二月廿三日 長政

羽兵入様人々御中

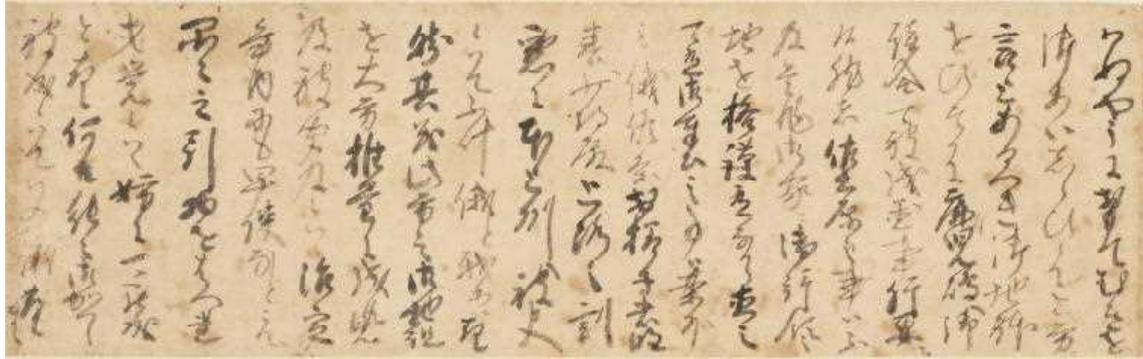
猶以、御兩三人へ、従井兵少

以書状被申達候、御報所仰候、以上、



三——二一 島津義弘書状

先日以一寄再三被仰聞
 候一儀、其後様々思安ラ
 めくらし候へ共、指分別出
 来不申候、然共とりく
 吟味申候中ニ存当ル
 儀共候者、於上方有方、誠
 肆被申調たる、此度之
 知行方之儀ハ不及是
 非、列々以前之知行之
 始末迄、従上方御指図
 之事ハ安外之至候、然者
 上方にていかやうニ加被申
 調候つらん、更ニ不能分別
 候間、菟角彼口柄を能々
 被聞召届、とても至上
 方御内存共被仰立、か
 たかるへき様子にて候ハ、
 中々に少^茂悪者思召候



ハぬやうに、おもてむきを
 御あいしらひ候て、上方ニ
 言上あるへき御地躰
 を、ひそかに鹿兒嶋へ御
 談合可被成置事、肝要ニ
 候、然者佐土原之事ハ不
 及是非、御家ニ御拝領之
 地を格護有なから、直之
 可有御奉公之事ハ、案内
 之儀候条、於様子者明
 春少将殿上洛之刻、
(島津忠恒)
(本多正純)
 懇に本上州へ被申入
 候ハて不叶儀と、我等ハ存候、
 就其茂此方之御地組
 を大方推量に成共、見
 及被聞及候ハ、治定
 年内にも早使なとて、
 品々之引物をハへられ
 才覚候ハ、妨に可罷成
 と存候、何共能々御かくし
 被成候ハてハの儀と存候ま、



少将殿へも此趣申遣候、
 誠々心遣之あまりニ
 存寄所を申上候、御
 内存之通被仰聞
 候ハ、其上にて吟味申
 度候、恐惶謹言、

(慶長八年) 兵庫入道
 極月八日 惟新 (花押)

進上
 竜伯尊老様
 (島津義久)



三——二二 島津義弘書状

(前欠)

無御別儀

佐渡守殿差

山口勘^(直友)兵衛

殊本多佐州^(正信)よりハ以

拙者 迄^ニ別儀

座有間敷

誠々喜悦不 存候、少

事、本多 被存

雖可申 候、爰許

如三

事 前延引仕迄

同名

申旨候、猶追々可

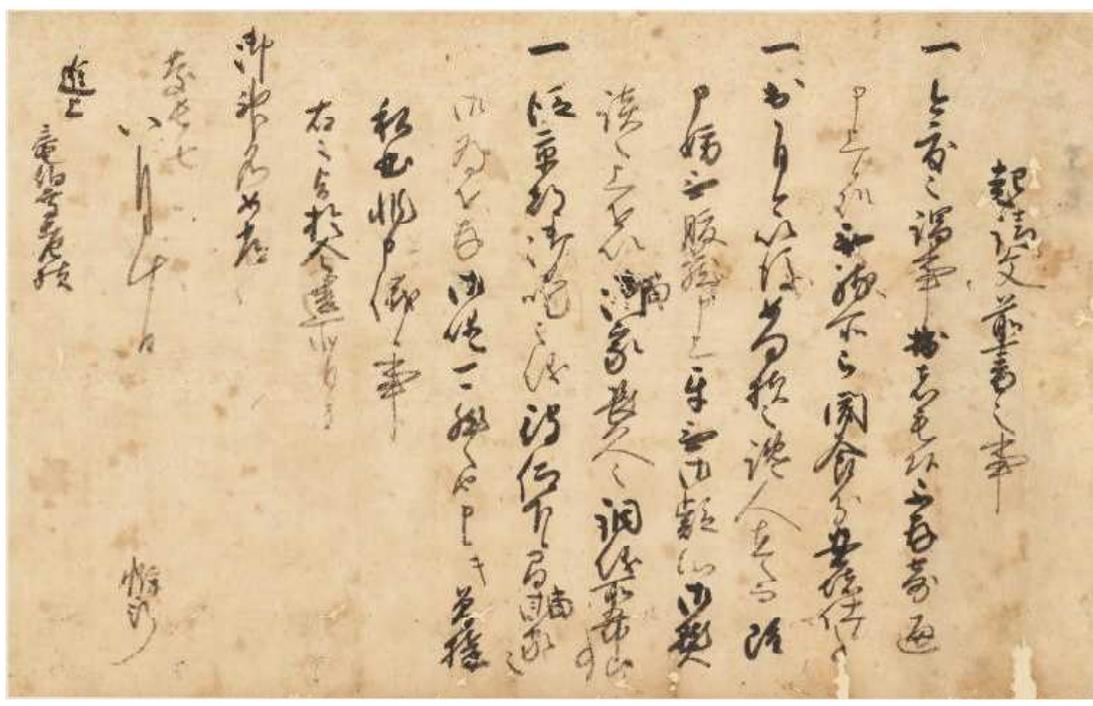
恐惶謹言、

羽柴兵庫入道

十二月 惟新

中性院

御同宿御中



三—二—三 島津義弘起請文案

起請文前書之事

- 一、今度之謂事、拙者毛頭不存寄通
- 申上候処、無残所被聞食分、安堵仕候事、
- 一、於自今以後、如何様之讒人在之而、雖
- 申妨、無腹蔵申上、互無御疑心御熟
- 談之上を以、御家^当長久之調儀所希候事、
- 一、從京都御暖之儀被仰下候間、御家^当之
- 御為を存、御暖可然之由申候キ、曾構
- 私曲非申儀候事、
- 右之旨、於今違背者、

御神名如常、

慶長七

八月十日

惟新

進上

(島津義久)
竜伯尊老様

態令啓入候、

一、度々如申候、御当家之事、

貴所迄及廿代雖御家候、

漸末^ニ罷成歟と存候、其謂ハ

今年^ニ限大事之儀まで

つ^ニ躰^ヒ候間、夜を日^ニつき肝を

被入候共、生得国から^ニて何事^モ

ハかゆかす候、題目石漕船^モ

大方出来たるも在之由候へ共、

いまた不出船之由候、京泊^ニハ

帖佐方之船少々まはりたる

よし候、先今度之百五十艘

之儀^モ、貴所被聞召たる^ニ相替、

急^ニハ出船可難成様^ニ、我等ハ

承得候、左様^ニ候而縦江戸へ

着船候共、時分後^ニ候而御用^ニ

不立など、候而、無御請取候ハ、

御代物ハ被給置、不届仕立

など、世上之可為風聞

候之歟、さも候ハ、終者何と可

成行候哉、諸事御油断

有ましく候、

一、御乗船^モ未廻着、貴所出船

さへ無之様^ニ候間、兼日可有

参上通、御約束被申上^ニ付、

可被仰合儀共在之旨、被成

上意由候へ共、御待退屈被成、

御上洛候者、是もすり違可申候、

縦年内国元を打立候とも、

遠国と云海上ハ不任心之条

躰^ニより、中途^ニ延引可被成

儀も可有之候、左様^ニ候而時宜

不可然時ハ、誰か曲事、誰か

後など、候へ共、家のたすかり

^ニハ不罷成、被失面目事候条、

よく^ニ御油断有ましく候、

一、有説^ニ承付候、去年上洛之時、

於御城御能之刻、御前

^ニて貴所御能^ニ心をうつし、

居なから仕舞などをまね

られ候もやうを側より見

させられ候、大名衆殊外之

能数寄^ニて候物哉、立而不

被舞迄^ニて候つるよし、以後^ニ

物沙汰共之通承付候、多分

それ^ニ心をうつし候へハ、

何事^ニよらす左様^ニ在之

物^ニて候へハ、日来能^ニすかれ候

ま、治定油断^ニて御取乱^モ

可被成と存候、是又為御嗜候、

一、毎年上下之御辛勞在之

事^二候条、諸事之儀を奉行^二被任置、貴所事ハ遊覽のミ^二させられへき由申候つれ共、今ハ誰そ精^二被入人も無之候条、入鹿入細何篇直^二可被仰付事專一候、

一、御所様ハ御酒御きらいのよし候間、御酒過候ハぬやう^二御嗜肝要候、就中 御前之御酒可有斟酌事專一候、并 公家方へ細々御寄合候ハぬやう^二御分別尤候、

一、於御城各出仕之躰を見申候^二、惣別田舎侍之上法をまねられ候事、見苦敷事にて候、只田舎侍ハ田舎人一篇^二候而能候由見得申候、旁為御分別候、

一諸大名付合之時ハ、上下之人よりおくらくこわものと見なされ候而、御為可然候ハんと存候、亭主ふり^二も客ふり^二も御取乱たる為躰ハ、物浅見得申候、一人悪由申候ハ、皆それ^二成事候間、相構々々不可有失念候、

一、江戸之御隙明候而上洛候ハ、

何歟と候而、京・伏見^二徒^二一日も無御滞留、追付下向可在之候、人^二より役を望、知行を望^二存、心なき真実たてをいたす者も、世上有ならい^二候、殊我手前之為よきやう^二と碎心中、御前をつくろう事も御座候条、真実之人迄^二てハ存之間敷候、於拙者ハ右之

為可然様^二と存事迄^二候条、老躰極不期明日躰^二候へ共、貴所事能、上^二ても能様^二と存候而、くり事ながら平生存念之通申事候、念比^二御披見肝要候、恐々謹言、

(慶長十一年)
二月十一日

惟新

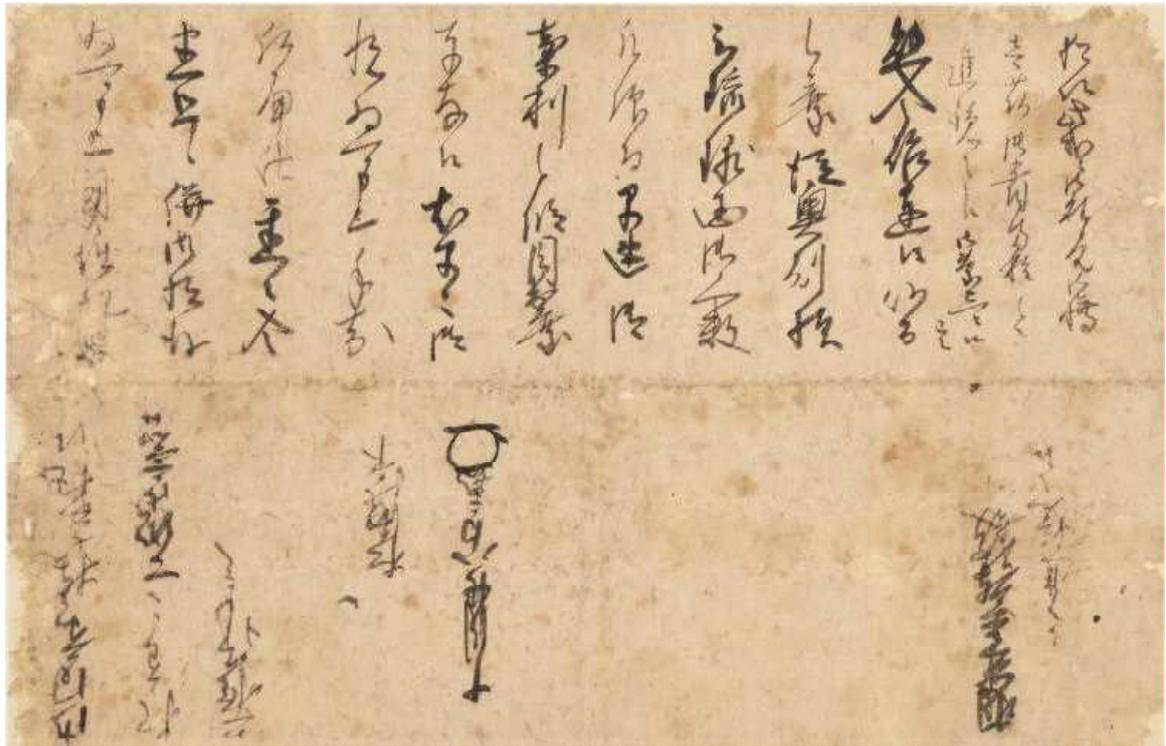
(島津忠恒)
陸奥守殿へ進候状ノ案文にて候、細々披見有へく候、

比志嶋紀伊守殿

(貞昌)
伊勢兵部少輔殿

陸奥守殿

参



三—二五 松浦宗静（鎮信）書状

猶以此式^二御座候へ共、御樽

壹荷・御肴兩種令

進覽之候、御慶迄に候、已上、

態令啓達候、仍而 御同前二捧嘉札候、

今度從奧州様、^{（島津家久）} 猶重々可得御意候、

至琉球国御人数 恐惶謹言、

被仰付、早速御

案利之段、目出度

奉存候、尤早々御

悦為可申上、手前

何角仕遅々、令

迷惑候、併御祝儀

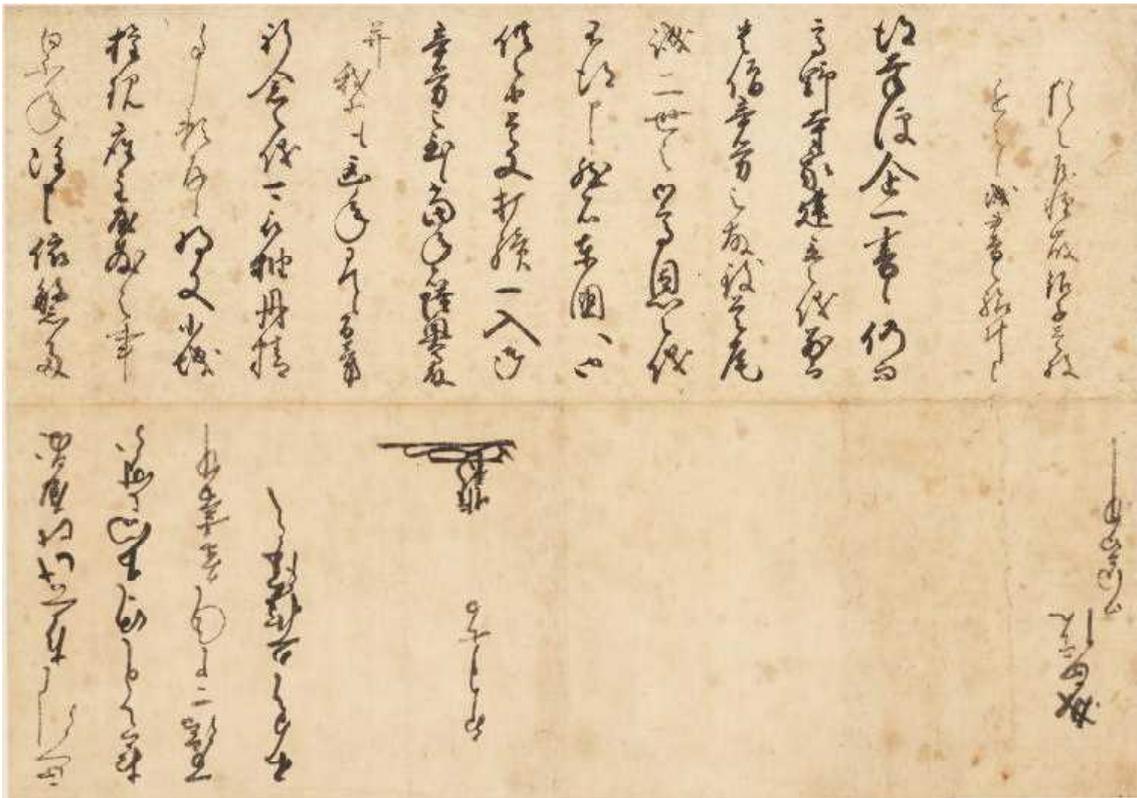
為可申上用使札□、

松浦法印

^{（慶長十四年）} 十月廿八日 宗静（花押）

^{（島津義弘）} 羽柴兵庫頭殿

令進覽之候



三一—二六 島津義弘書状

猶々、乍輕微銀子壹枚

進之候、誠書音之驗計候、

得幸便企一書候、仍而

延引候、左候へハ、此比屋敷

高野寺家建立之儀、別而

相定事候、何も下向之時分

貴僧辛勞之故致首尾、

万端可申承候条、書中

誠二世之御高恩之儀、

不具候、恐惶謹言、

不得申候、然者東国へ御

供之由、是又打統一入御

(慶長十五年)
卯月七日

惟新 (花押)

辛勞之至候、当年者陸奥守殿

并我等も凶年にて候間、旁

祈念之儀可被抽丹精

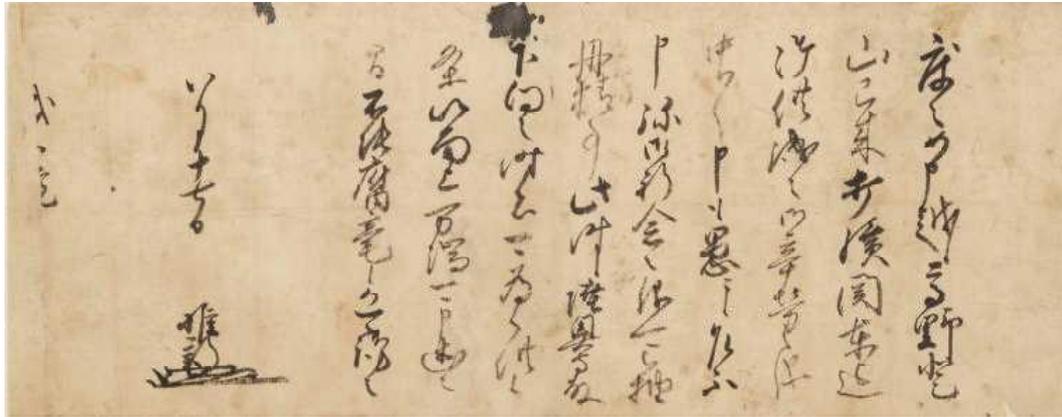
事頼存候、将又小城

権現座主屋敷之事

累年雖申候、依繁多

(頼真)
成正院

御同宿中



三一—二七 島津義弘書状

度々如申越候、高野登

山已来、打続関東迄

御供、誠々御辛勞之儀、

中々申も愚二候、乍不

申弥御祈念之儀、可被抽

丹精事此時候、(島津家久)陸奥守殿

下向之時者可為御供候

条、以面上万端可申述之

間、不能腐毫候、恐々謹言、

(慶長十五年)
八月十七日 惟新(花押)

(頼真)
成正院

一、我等者駿府へ遣、十日
 計已前ニ罷歸候、
 大御所様来三月中ニ
 可為 御上洛之由候、若
 左候者、三月下旬可
 為 御出京かとの儀ニ候、
 但是者伝説ニ承候
 事、
 一、將軍様之若君様
 つれまいらせられ候て
 被成 御上洛、
 將軍ニ被成 御成候由候、

將軍様二月末駿府
 迄可被成 御座之由、
 大御所様ヨリ被 仰
 遣之由候、御参会之以後
 大御所様尾州なこや
 まで被成 御上、御城之
 御普請等被仰付、
 御上洛之由候、
 三月下旬可
 為 御出京かとの儀ニ候、
 但是者伝説ニ承候
 事、
 一、將軍様之若君様
 つれまいらせられ候て
 被成 御上洛、
 將軍ニ被成 御成候由候、

三——二八 細川忠興書状

將軍様二月末駿府

態以飛脚申入候、当年之
 御慶雖事旧候、弥不可
 有尽期候、
 遣之由候、御参会之以後

一、我等者駿府へ遣、十日

大御所様尾州なこや

計已前ニ罷歸候、

まで被成 御上、御城之

大御所様来三月中ニ

御普請等被仰付、

可為 御上洛之由候、若

それより 御上洛之由候、

大御所様御煩など

左候者、三月下旬可

にて候者、 將軍様

為 御出京かとの儀ニ候、

御上洛之由、慥申来候事、

但是者伝説ニ承候

一、又昨日申来候、

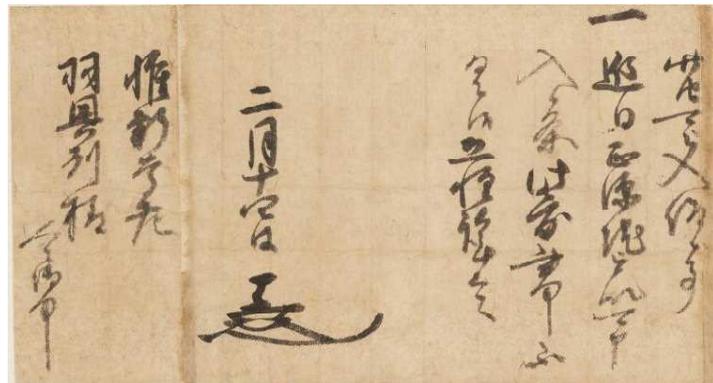
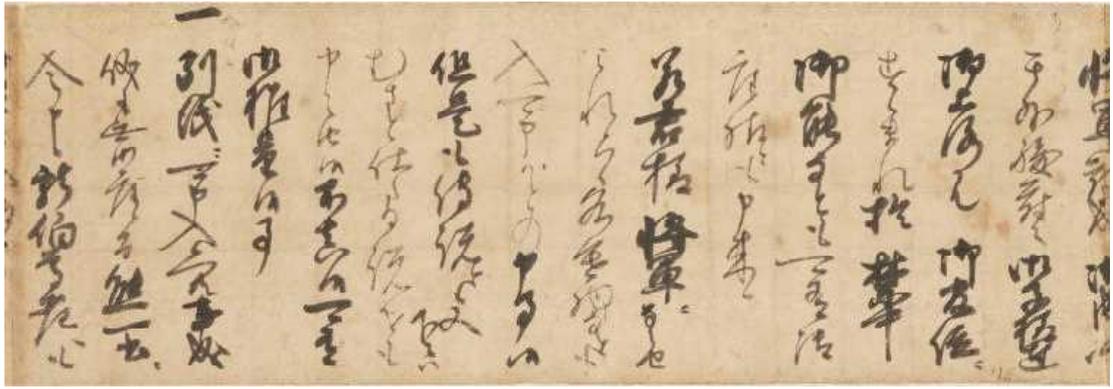
事、

一、將軍様之若君様

つれまいらせられ候て

被成 御上洛、

將軍ニ被成 御成候由候、



其外駿府之御子様達

御上洛にて、御官位ニ

す、まれ、於禁中

御能なども可有御

座様ニも申来候、

若君様將軍ニならせ

られ候ハ、各進物なども

入可申かとの申事候、

但是も伝説ニ候、又下々ハ

むさと仕たる説をも

申之由候、不真候、可有

御推量候事、

一別紙ニ可申入候へ共、事成

儀も無御座候間、態一書ニ

令申候、龍伯尊老へも

此由可被入仰候事、

一、近日正源院を以可申

入候条、此度書中不

具候、恐惶謹言

(慶長十五年)

二月十四日

(花押)

(島津義弘)
惟新尊老

(同家久)
羽奥州様

人々御中



三——二九 相良長每書状

態啓上候、今日

益々御達者之由

真幸表罷通候、

承、大慶至極ニ奉

伺公を以可得

存候、恐惶謹言、

貴意処ニ、路次

相良左兵衛佑

草臥故、直ニ帰山

八月三日 頼房 (花押)

申候、上方弥御

静謐候、為御存知候、

先以申上候、去月

廿八日之御返書

於中途拝見候、

(島津義弘)
惟新様
人々御中



四——一 石田三成書状

御祝詞以參雖可申

入候、爰元不得寸暇

二付而、先以使者申入候、

仍御太刀一腰・五百疋

并御樽一荷三種

進覽之候、聊表御

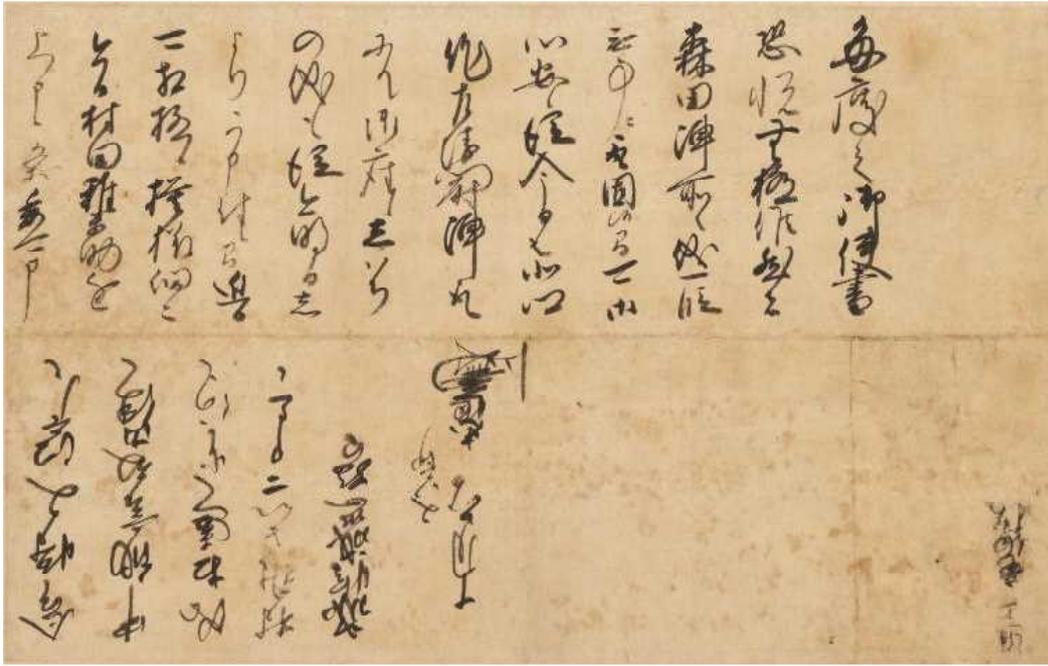
祝言計候、恐々謹言、

石田治部少輔

六月十七日 三成 (花押)

嶋津又八郎殿

御宿所



四—二 島津忠恒書状

每度之御使書

恐悦至極候、然者

森田陣所之儀、一段

無事二取固候間、可御

心安候、從今日者北郷

作左衛門尉陣取

にて御座候、しハち

の儀も、從今日し

より可申付候間、近日

可相極候、模様細々

今日村田雅樂助進

上申候条、委可申

含候、將又江戸之

中納言殿御使之

儀、相違之由候、何も

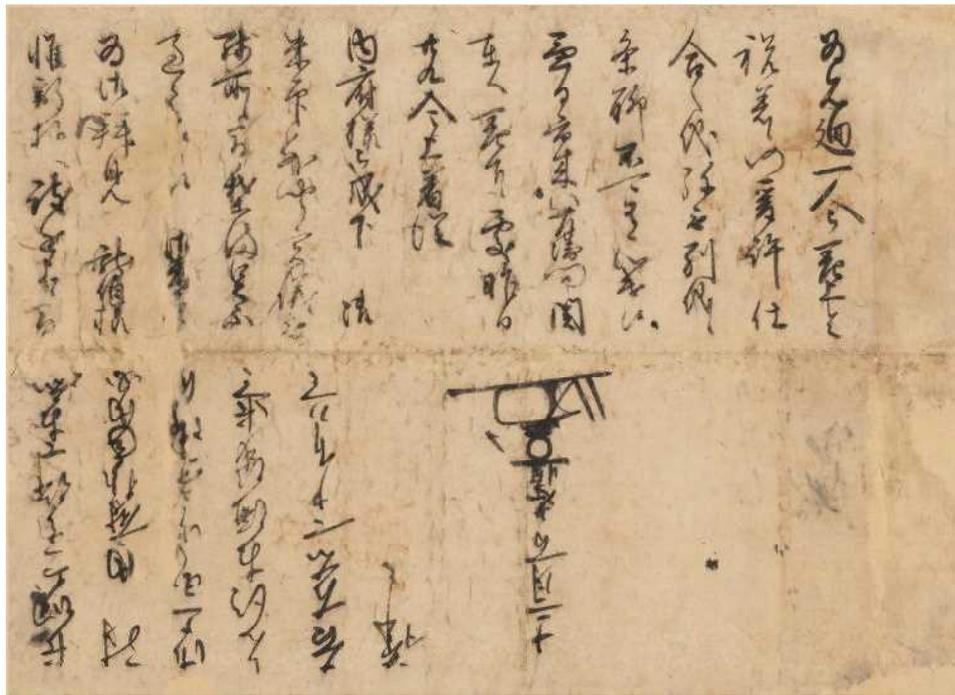
村雅を以、可申上候、

誠惶誠恐敬白、

又八郎

十月六日 忠恒 (花押)

進上 竜伯様



四—三 島津忠恒書状

為見廻一人被差上令
 祝着候、仍爰許仕
 合之儀、弥無別儀候
 条、聊不可有心遣候、
 兼日市来八左衛門尉(家繁)関
 東へ差下候処、昨日
 廿九令上着、從
 内府様被成下 御
 朱印、外聞実儀無
 残所候間、我等満足不
 過之由候、 御朱印
 為御拜見、 (島津義久) 龍伯様
(同義弘)
 惟新様へ致進上候間、

巨細於其許可存知候、
(徳川家康) 殊 内府様年内必
 御上国之由候条、御目
 見得相濟次第、追々
 吉左右可申下候、恐々
 謹言、

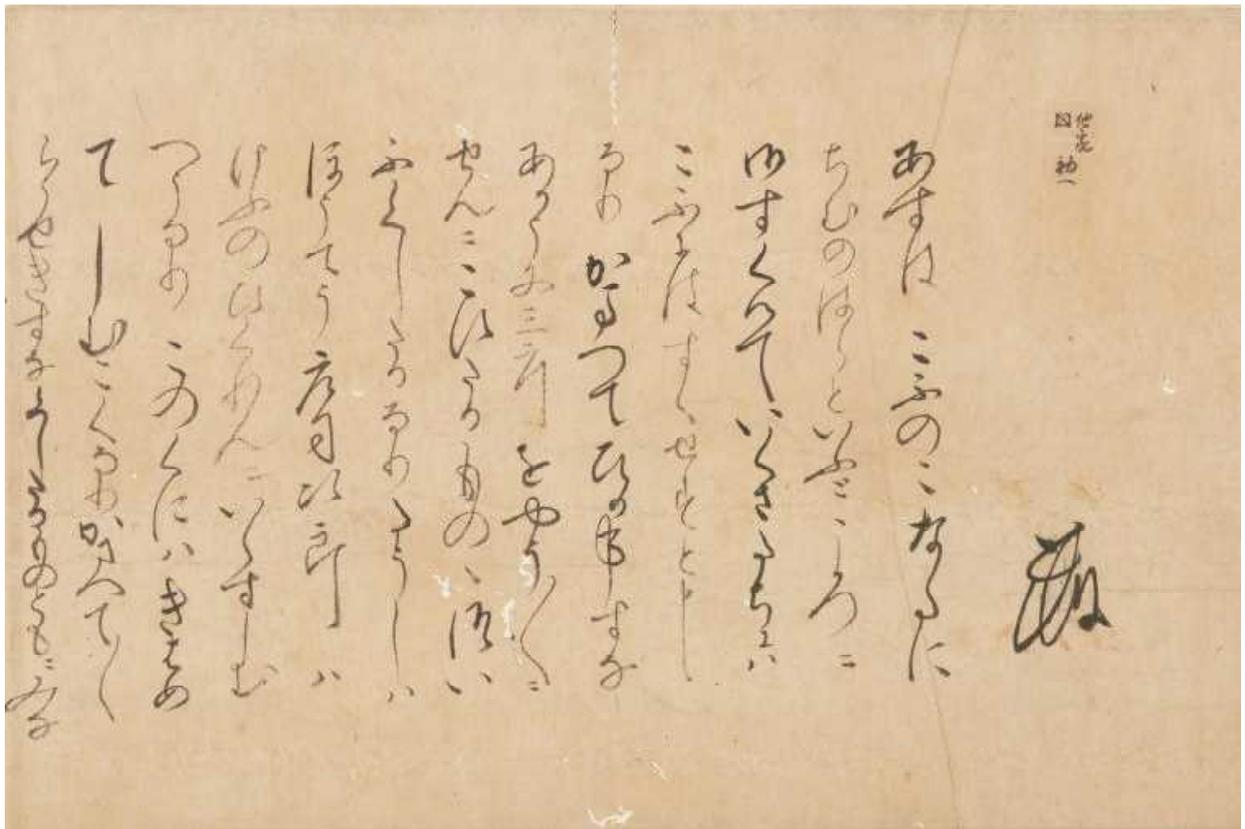
(慶長七年)
 十二月一日 忠恒 (花押)



四—四 島津忠恒書状案

従林兵衛尉殿関東
 到来之様子、為可
 有御注進、舟之儀承候
 間、即申付候、
 内府様年内御上
 洛之儀必定之由候間、
 先日進早打候キ、相
 届候哉、乍御大儀
 可被成御上国事
 所仰候、雖不及申候、
 海上之儀、能々御用心
 尤候、恐惶謹言、
(慶長七年) 羽少将
 十二月四日 忠恒
(福島正則)
 廣嶋少

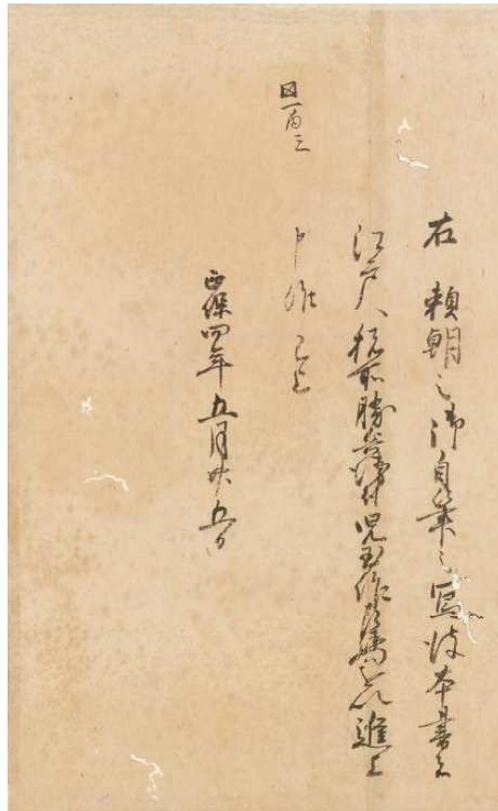
他
家
文
書



一、源頼朝袖加判平盛時奉書写

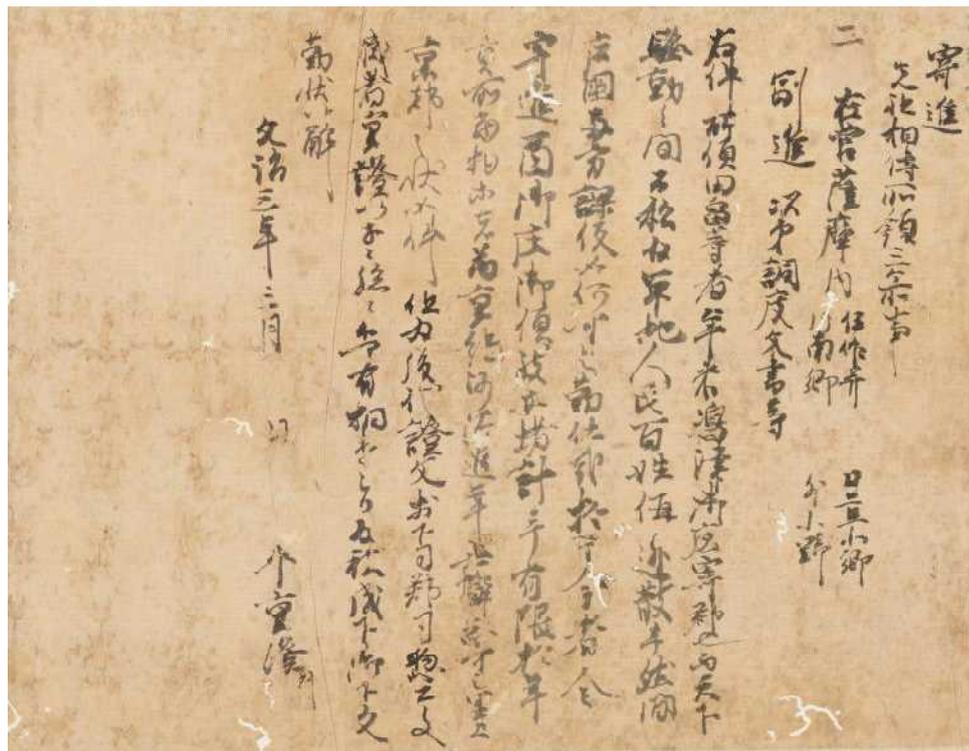
(源頼朝)
(花押影)

あすは、こふのこなたに、
ちむのはらといふところニ、
御すく候へし、いくさたちにハ、
こふにはすぐせすと申候
なり、かまへてひか事すな、
あかう又三郎を、やうくニ
せんニこひたるもの、つい
ふくしたるなり、たうしハ
(北条時政カ)
(畠山重忠)
ほうてう・庄司次郎ハ、
けふのひくわんニいらす、しむ
へうなり、このくにハきはめ
てしむこくなり、かまへてく
らうせきすな、かへしたるものともニ、
みな



右、頼朝之御自筆之写、彼本書者
江戸へ税所勝兵衛尉、児玉作左衛門尉を以進上
申候、已上、

正保四年五月廿五日



二、平重澄寄進状案

(端裏書)
□□□□

寄進

先祖相伝所領三ヶ所事

在管薩摩内 伊作并 日置北郷 同南郷 外小野

副進 次第調度文書等

右、件所領田畠等者、年来島津御庄寄郡也、而天下

騷動之間、公私為軍地、人民百姓称逃散畢、然間

庄・国両方課役、如何可令勤仕哉、於于今者、令

寄進一田御庄御領、致安堵計畢、有限於年

貢所当物等者、為重純沙汰、追年無懈怠、可令運上

京都之状如件、但為後代証文、於下司・郡司・惣公文

職者、重澄以子々孫々、不可有相違旨、為被成下御下文、

勒状以解、

文治三年三月 日

平重澄判

寺家公文所下

益山庄

可早守閑東御成敗旨且任先例

致沙汰神領上野畠事

右、件上野畠為往古神領之處、河邊平太道〔益上〕施威勢打入別符領、企濫妨之日、兼澄捧証文訴申、閑東之間、庄官・神官莅其境、可令實檢之由、被仰下之處、島津庄官、為神領之旨、勘狀事切、就之、又閑東御成敗畢云々、御沙汰之次第以嚴重也、早守此旨、上野畠止彼濫妨、任旧可為神領之狀、依長吏仰下、知如件

元仁二年三月

日公文平尚

左衛門尉中原

權寺主大法師

少別當大法師

法眼和尚位

三、弥勒寺寺家公文所下文

〔棟清〕
〔花押〕

寺家公文所下

益山庄

可早守閑東御成敗旨、且任先例、

致沙汰神領上野畠事

右、件上野畠為往古神領之處、河邊平太道〔益上〕施威勢打入別符領、企濫妨之日、兼澄捧証文訴申、閑東之間、庄官・神官莅其境、可令實檢之由、被仰下之處、島津庄官、為神領之旨、勘狀事切、就之、又閑東御成敗畢云々、御沙汰之次第以嚴重也、早守此旨、上野畠止彼濫妨、任旧可為神領之狀、依長吏仰、下知如件、

元仁二年三月 日

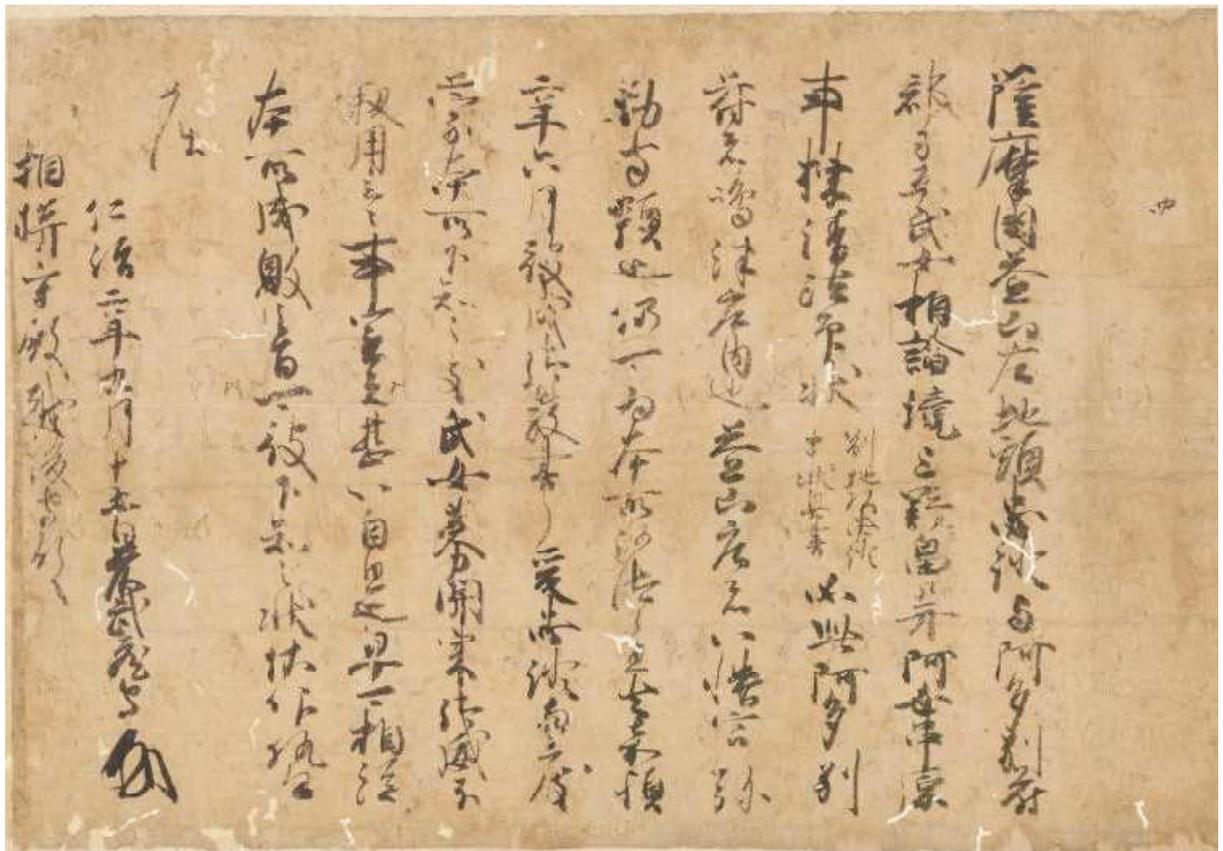
公文平 〔花押〕

左衛門尉中原

權寺主大法師

少別當大法師

法眼和尚位 〔花押〕



四、関東御教書

薩摩國益山庄地頭忠澄(益山)与阿多別府

郡司平氏女相論境上野畠并阿世串原

事、棟清法印状副地頭忠澄申状具書如此、阿多別

府者島津庄内也、益山庄者八幡宮弥

勒寺領也、仍可為本所沙汰之由、去嘉禎

二年六月被成御教書了、爰忠澄兩度

蒙本所下知之処、氏女慕関東御威、不

叙用云々、事实者、甚以自由也、早可相從

本所成敗之旨、可被下知之状、依仰執達

如件、

仁治二年九月十五日 (北条泰時) 前武蔵守 (花押)

(同時盛) 相模守殿 (同時盛) 越後守殿

鴻津庄薩摩方伊作庄預所安芸左衛門尉重宗代盛景
法師法名淨空与下司伊作平四郎則純法師法名念西代孫有純相
論条

一 下司職事

右神使慶和淨空申者文治三年則純叔父重純寄進之
間、被庄号畢、於下司者、為領家進止之處、元久二年守護人忠
久稱關東御勤氣、追出重純、令知行下司職畢、為領家依
無違亂、至寶治、比自然走過之處、惣地頭常陸後家忠久
令押領之旨、有純書送種々狀於預所之間、年來忠久知行者為押
領之由、領家始被驚思食之處、有純掠給御下知狀、違背領家
云々、如有純申者、則純幼少之時、為重純之沙汰令寄進畢、重純
給御下文押領之間、元久之比重純与則純於關東被召決之、則
純給御下知歸國之時、於門司關令入海之刻、正文紛失畢、承久
三年地領忠久以当庄書生・檢非違所并自名田尻・和田・大野三ヶ
村万雜事、令相博下司職之間、至嘉祿年中、不相違之處、忠久
死去之後、常陸後家令押領畢、訴申事由之時、可為能登前司

五、關東下知狀案

〔端裏書〕
「建長七年御下知案」

島津庄薩摩方伊作庄預所安芸左衛門尉重宗代盛景

法師法名淨空与下司伊作平四郎則純法師法名念西代孫有純相

論条々、

一 下司職事

右、對決之處、如淨空申者、文治三年則純叔父重純寄進之
間、被庄号畢、於下司者、為領家進止之處、元久二年守護人忠
久稱關東御勤氣、追出重純、令知行下司職畢、為領家依
無違亂、至寶治之比、自然走過之處、惣地頭常陸後家忠久
令押領之旨、有純書送種々狀於預所之間、年來忠久知行者為押
領之由、領家始被驚思食之處、有純掠給御下知狀、違背領家
云々、如有純申者、則純幼少之時、為重純之沙汰令寄進畢、重純
給御下文押領之間、元久之比重純与則純於關東被召決之、則
純給御下知歸國之時、於門司關令入海之刻、正文紛失畢、承久
三年地領忠久以当庄書生・檢非違所并自名田尻・和田・大野三ヶ
村万雜事、令相博下司職之間、至嘉祿年中、不相違之處、忠久
死去之後、常陸後家令押領畢、訴申事由之時、可為能登前司

光村沙汰之由、後家依載陳狀、光村尋問子細、就出和与狀、則純寶治
 二年雖蒙御下知、不違背領家、元久以前者為領家進止之間、所
 申其由也云々、爰如淨空所進重純文治三年三月寄進狀・同年
 四月十四日片宣・同十五日政所下文者、重純子孫可為下司郡司之旨佳之、
 如有純書送預所七月十九日・八月十六日・五月廿日（各不記）書狀者、伊作庄
 下司職數十年常陸後家押領之間、為領家進止之由、有純訴申之
 時、可參決之旨、被仰下之處、地頭出避文云々、如檢注使加判建長元
 年十一月解狀并有純進領家寶治二年訴狀者、依寄進奉公、給
 御下文、可備向後証文云々、如此狀者、領家進止之由、所見也、如有純
 所進天永三年國司任符治承元年片宣・元曆二年外題下文
 者、為則純相傳而帶取同所進入二年十二月御下知・御教書
 者、不帶正文之間、所相貽不審也、如寶治二年四月十日御下知
 常陸後家押領之處、有純訴申之旨付本職可則純進狀必快
 者、雖有子細、不帶補任本御下文、乍書与種々大望狀於預所、以
 地頭濫妨停止之狀、令違背領家之条、甚奸謀也、且召問常陸後
 後之處、領家進止之条、不論申歟、然者、可為領家進止焉、
 一、惣公文・田所兩職事、
 一、公文・田所給田浮免事、
 一、下司管失事、

(三浦)
 光村沙汰之由、後家依載陳狀、光村尋問子細、就出和与狀、則純寶治
 二年雖蒙御下知、不違背領家、元久以前者為領家進止之間、所
 申其由也云々、爰如淨空所進重純文治三年三月寄進狀・同年
 四月十四日片宣・同十五日政所下文者、重純子孫可為下司郡司之旨佳之、
 如有純書送預所七月十九日・八月十六日・五月廿日（各不記）書狀者、伊作庄
 下司職數十年常陸後家押領之間、為領家進止之由、有純訴申之
 時、可參決之旨、被仰下之處、地頭出避文云々、如檢注使加判建長元
 年十一月解狀并有純進領家寶治二年訴狀者、依寄進奉公、給
 御下文、可備向後証文云々、如此狀者、領家進止之由、所見也、如有純
 所進天永三年國司任符・治承元年片宣・元曆二年外題下文
 者、為則純相傳所帶歟、如同所進元久二年十二月御下知・御教書
 案者、不帶正文之間、所相貽不審也、如寶治二年四月十日御下知者、
 常陸後家押領之由、有純訴申之間、付本職可則純領掌云々、如狀
 者、雖有子細、不帶補任本御下文、乍書与種々大望狀於預所、以
 地頭濫妨停止之狀、令違背領家之条、甚奸謀也、且召問常陸後
 後之處、領家進止之条、不論申歟、然者、可為領家進止焉、
 一、惣公文・田所兩職事、
 一、公文・田所給田浮免事、
 一、下司管失事、

一 公文給田事
 一 七見崎并崎田兩坪二町事
 一 富永名事
 一 芋事 一 桑事
 一 預所日別雜事等事
 一 下司前取領家下部等作田事
 一 未進事
 一 下司親類縁者未進事
 一 下司下人等盜取收納使代則吉作田否事
 一 百姓三十人内下司抑留七人由事
 一 惡口事
 右十五箇条下司職可為領家成敗之上非沙汰之限矣
 以前條々依將軍家仰下知如件
 建長七年十二月廿五日
 相模守平朝臣在御判
 陸奥守平朝臣在御判

一、 公文給田事、
 一、 七見崎并崎田兩坪二町事、
 一、 富永名事、
 一、 芋事、 一 桑事、
 一、 預所日別雜事等事、
 一、 下司前取領家下部等作田事、
 一、 未進事、
 一、 下司親類縁者未進事、
 一、 下司下人等盜取收納使代則吉作田否事、
 一、 百姓三十人内下司抑留七人由事、
 一、 惡口事、
 右、十五箇条、下司職可為領家成敗之上、非沙汰之限矣、
 以前條々、依將軍家仰、下知如件、

建長七年十二月廿五日
(北条時頼)
 相模守平朝臣 在御判
(同重時)
 陸奥守平朝臣 在御判

薩摩國伊集院之下司持時御
 就南院上神殿村內之田地、文永
 八年九月十九日御教書同十一月
 廿八日到來、謹拜見仕候了、
 抑件於田地、以本主清忠子細之狀、
 多年知行無其相違、誠有殊子細
 者、付本主可被致其沙汰之處、
 今何閣根本就末葉、被致監訴
 候哉、仍以此旨、可有御披露候、
 比丘尼成阿恐惶謹言、
 文永八年十二月十六日 比丘尼成阿弥陀仏請文

六、比丘尼成阿請文案

薩摩國伊集院之下司持時訴申

就当院上神殿村內之田地、文永

八年九月十九日御教書同十一月

廿八日到來、謹拜見仕候了、

抑件於田地、以本主清忠子細之狀、

多年知行無其相違、誠有殊子細

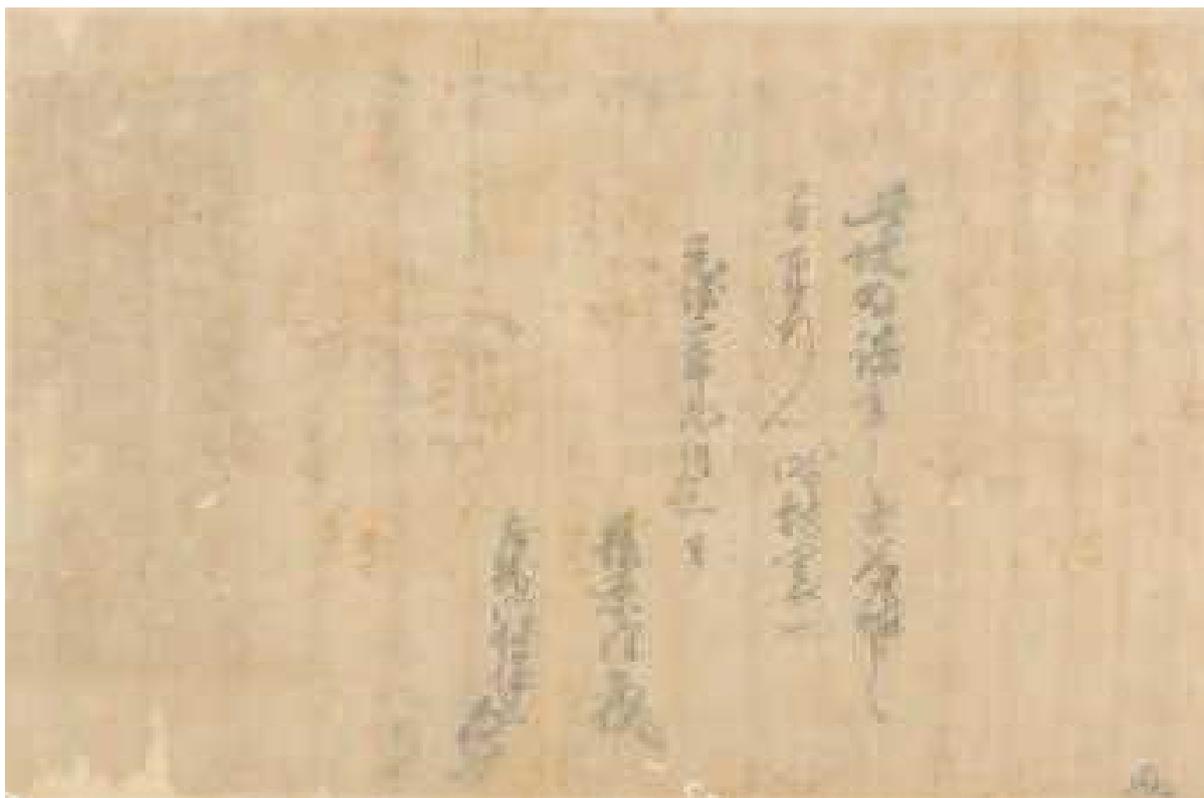
者、付本主可被致其沙汰之處、

今何閣根本就末葉、被致監訴

候哉、仍以此旨、可有御披露候、

比丘尼成阿恐惶謹言、

文永八年十二月十六日 比丘尼成阿弥陀仏請文



〔裏書〕

（花押）

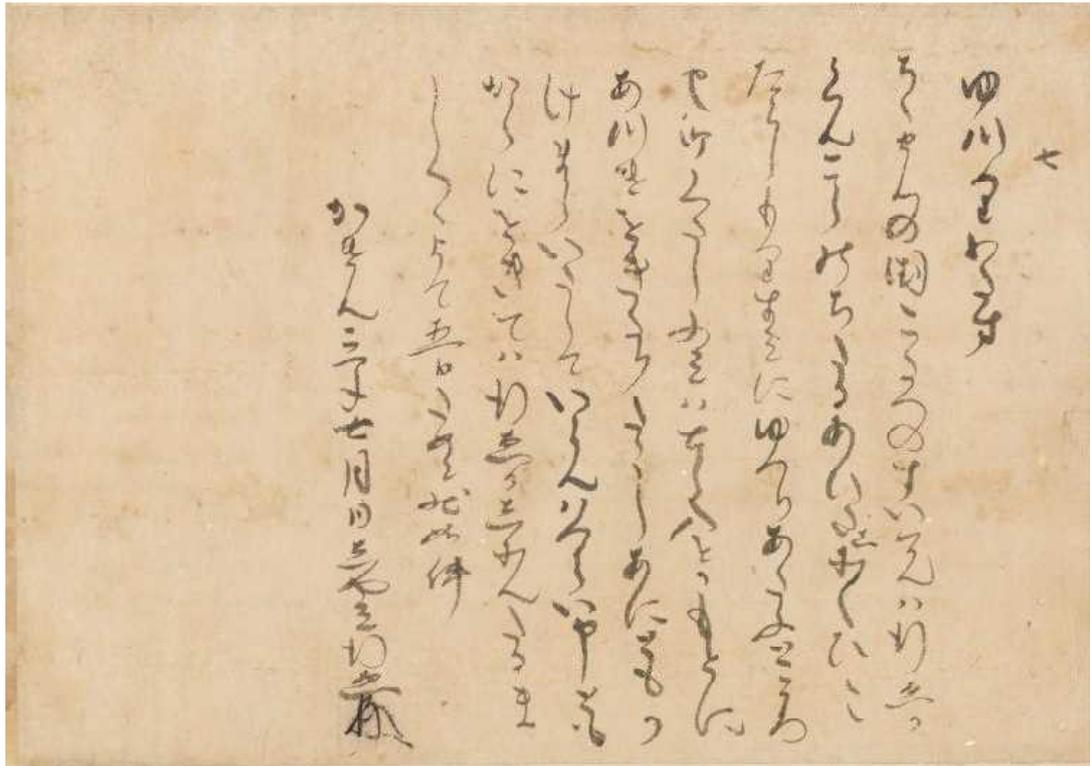
此狀為謀書之由、道祐申之

間、奉行人所封裏也、

元徳二年九月三日

藤原経尚（花押）

左衛門尉*連（花押）



七、沙弥行惠讓状

ゆつりわたす

ちくせんの国こたへのすいてんハ、行惠か
 くんこうのちたるあいた、しそくひこ
 たらうもりすみにゆつりあたふところ
 也、御くたしふミハ七郎入道かもとに
 あつけをきたり、た、しあにともか
 けまういたして、いらんハつらい申とも
 からにをきてハ、行惠かしそんたるま
 しく候、よて五日^{〔後〕}ためニ状如件、

かけん三年七月日 しやミ行惠 (花押)

八、沙弥行惠讓状

(端裏書)
「こくうさうにとらする状」

ゆつりわたす こくうさう丸か所に

さつまのくにますやまのしやう中むらのうち □

水田やしきらの事

右、くたんのところ、行惠ちうたいさうてんそりやう也、
しかるあひた、しゝさかひをきためて、こくうさう丸^平ニゆつ^り
あたふるところ也、ミなミをかきるちんすのまへのはく
をしひかしへとをして、にしハしきかやしきより
にし^りのミそをくたりにたかひかはらのさきへとをし□、

きたハひのさこのきたのくるめしをたさかひをなかくな^ち
のしりへかきる、ひかしハしもますやまへとをりたるミ□
をちんすのまへのはらのひかしのすゑにかきる、た□□
ふけん^ちのくうしニおきてハつとむへきよし、そうのおきふミ□
しるしおくところ也、おきふミをまほて、くうしニおきて

ハけたいなくつとむへき也、しよのくうしニおきて、そたう
いけ・をしろ・くわしろ・りんしくわやく・けんたん・まんさう
くうしをちやうしして、そうりやうあい、ろふへからす、

かやうニいひたれハとて、そうりやうをなきかしろニおもふこ
とあるへからす、あいたかいにふしんなきやうにてあらんす
る、そのちのけうやうニてもあらんする、よてこうたいせう
もんのために状如件、

かけん四年七月 日 　　しやミ行惠 (花押)



八、
ゆつりわたす こくうさう丸か所に
さつまのくにますやまのしやう中むらのうち

水田やしきらの事

右、くたんのところ、行惠ちうたいさうてんそりやう也、
しかるあひた、しゝさかひをきためて、こくうさう丸^平ニゆつ^り
あたふるところ也、ミなミをかきるちんすのまへのはく
をしひかしへとをして、にしハしきかやしきより
にし^りのミそをくたりにたかひかはらのさきへとをし□、
きたハひのさこのきたのくるめしをたさかひをなかくな^ち
のしりへかきる、ひかしハしもますやまへとをりたるミ□
をちんすのまへのはらのひかしのすゑにかきる、た□□
ふけん^ちのくうしニおきてハつとむへきよし、そうのおきふミ□
しるしおくところ也、おきふミをまほて、くうしニおきて

かけん四年七月 日 　　しやミ行惠

三郎次郎とらする水田やしきの事、上むらニハ
 うてんのそりやうなるあひた、こともにせうふんす
 るうち、三郎次郎とらする水田やしきの事、上むらニハ
 たはらさき九反、そのハすきやうかふるその、又中むら
 に水田一丁といはひこたらうか中むらのたのなハならひ
 なるへし、このうへにしをたニわけたらん、かた〜ハひこたらう、
 いまかた〜ハ三郎次郎りやうちすへし、このところ〜の
 かうしの事ハ、そうのおきふミニしるしおくところ也、
 そのほかのかうしニおきてハ、そたういけあてあたり物、
 りんしくわやく、まんさうかうしをちやうし候て、
 そうりやうあい、ろふへからす、た、しくうしにいろうま
 しきよしをい、たれハとて、そうりやうをそうりやうとせ
 すハ、きやうたいのなかふハなるへきうへに、よそめしちあ
 しかるへし、よく〜そんちせしむへきなり、よてこうた
 いせうもんのためには状如件、

かけん四年七月

しやミ行惠 (花押)

九、沙弥行惠讓状

(端裏書)

「三ろう二郎にとらする□」

ゆつりわたす 三らう二らうもとすミか所に

さつまのくにますやまのしやう上中むらのう

ちの水田やしきらの事

右、くたんのますやまのしやうハ、行惠ちうたいさ

うてんのそりやうなるあひた、こともにせうふんす

るうち、三郎次郎とらする水田やしきの事、上むらニハ

たはらさき九反、そのハすきやうかふるその、又中むら

に水田一丁といはひこたらうか中むらのたのなハならひ

なるへし、このうへにしをたニわけたらん、かた〜ハひこたらう、

いまかた〜ハ三郎次郎りやうちすへし、このところ〜の

かうしの事ハ、そうのおきふミニしるしおくところ也、

そのほかのかうしニおきてハ、そたういけあてあたり物、

りんしくわやく、まんさうかうしをちやうし候て、

そうりやうあい、ろふへからす、た、しくうしにいろうま

しきよしをい、たれハとて、そうりやうをそうりやうとせ

すハ、きやうたいのなかふハなるへきうへに、よそめしちあ

しかるへし、よく〜そんちせしむへきなり、よてこうた

いせうもんのためには状如件、

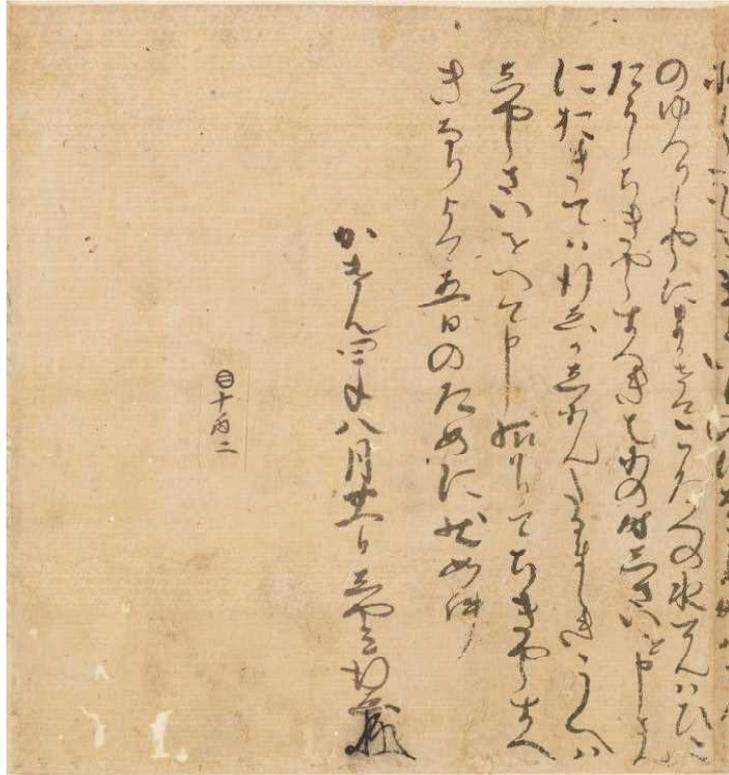
かけん四年七月 日

しやミ行惠 (花押)

夫のくにもすやまのしやうかミしをた
 中むらりやうミやうハ、行惠ちうたいさう
 てんのしよりやうなるによて、こともめんく
 のゆつり状をかきあたへ了、しかる間七郎
 入道にとらするそうのおきふミにするし
 をく所なり、この状をもてそんちしなから、
 そしともにいらんあるへからす、あんとの時ハゆつり
 状ニまかせて、めんくにちきやうすへきなり、た、し
 たうしそせうさいちうなる間、あんとの時ハ
 まちくいのハんを申へきあいた、ちくせんの
 国こたへの水てんハ、行惠かくんこうのち
 たるあひた、せん日ひこたらうにゆつると
 いへとも、とりかへしそしともかさしやうようとう
 のために、七郎入道ニとらするうへハ、そしともニわつ
 らいをかへからす、た、しこのそせうをもせすして、
 そしともをまといものになさん時ハ、せん日

一〇、沙弥行惠讓状

さつまのくにもすやまのしやうかミしをた・
 中むらりやうミやうハ、行惠ちうたいさう
 てんのしよりやうなるによて、こともめんく
 のゆつり状をかきあたへ了、しかる間七郎
 入道にとらするそうのおきふミにするし
 をく所なり、この状をもてそんちしなから、
 そしともにいらんあるへからす、あんとの時ハゆつり
 状ニまかせて、めんくにちきやうすへきなり、た、し
 たうしそせうさいちうなる間、あんとの時ハ
 まちくいのハんを申へきあいた、ちくせんの
 国こたへの水てんハ、行惠かくんこうのち
 たるあひた、せん日ひこたらうにゆつると
 いへとも、とりかへしそしともかさしやうようとう
 のために、七郎入道ニとらするうへハ、そしともニわつ
 らいをかへからす、た、しこのそせうをもせすして、
 そしともをまといものになさん時ハ、せん日



のゆつりしやうにまかせて、こたへの水てんハひこ
 たらうちきやうすへき也、その時しさいを申さん
 におきてハ、行恵かしそんたるましきうへハ、
 しやうさいをへて申給ハリて、ちきやうすへ
 きなり、よて五日（後）のために状如件、
 かけん四年八月廿一日　しやミ行恵（花押）

目十番二

○継目裏に花押あり。

引進 御館の御ほりよりしその一ヶ所事、
 右箇ハ純貞か地也、しかるを御ようとう五くわん
 もんニ自今年戊申歳拾ヶ年ひきわたし
 まいらせ候、もし十ヶ年の内ニこの箇さをいの事
 候ハ、五貫文のようとうをきたしまいらすへく候、
 それなをもてなんせいつかまつり候ハ、けん
 もんせいけ神社仏寺の所をきらハす、田箇し
 さい下人いけのかうしちををさへめされ候ハんニ、
 一口もみきを申ましく候、仍為後日、証文之
 しやう如件、

徳治参年十一月十一日

藤原純貞

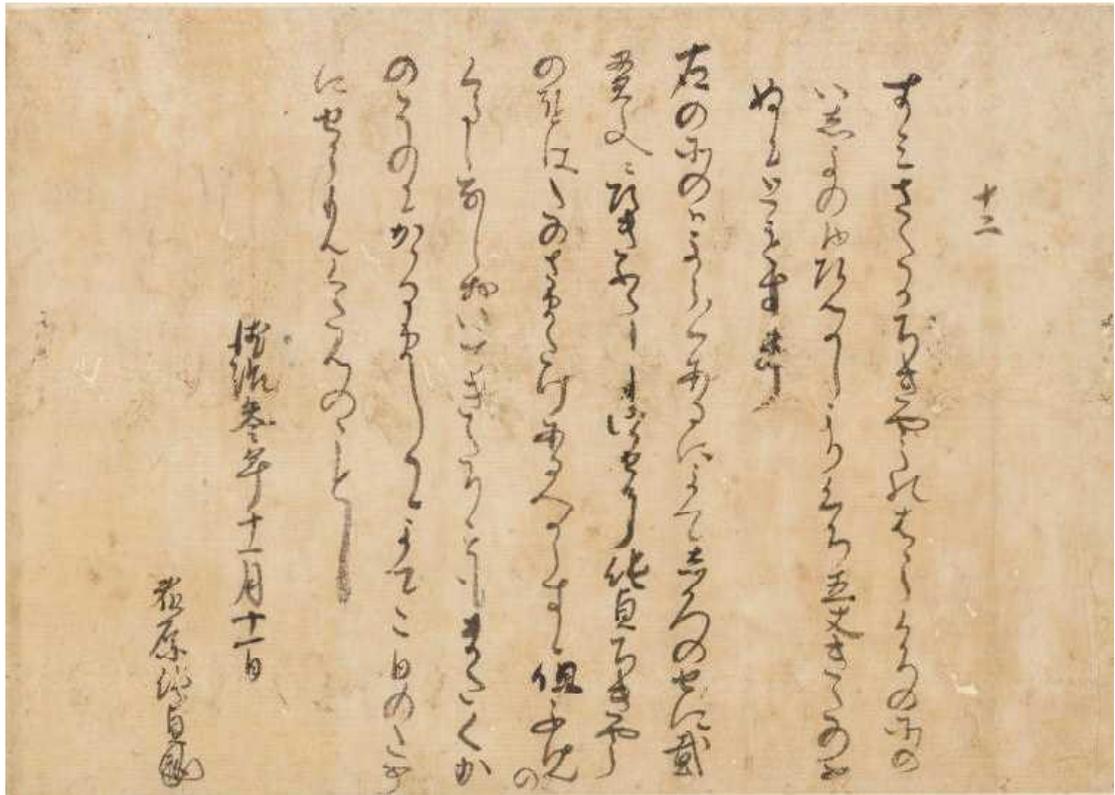
一一、藤原純貞質券

〔端裏書〕
「そうくもんすみさたの御ほりのにしのそのまいらする状」

引進 御館の御ほりよりしその一ヶ所事、
 右箇ハ純貞か地也、しかるを御ようとう五くわん
 もんニ自今年戊申歳拾ヶ年ひきわたし
 まいらせ候、もし十ヶ年の内ニこの箇さをいの事
 候ハ、五貫文のようとうをきたしまいらすへく候、
 それなをもてなんせいつかまつり候ハ、けん
 もんせいけ神社仏寺の所をきらハす、田箇し
 さい下人いけのかうしちををさへめされ候ハんニ、
 一口もみきを申ましく候、仍為後日、証文之
 しやう如件、

徳治参年十一月十一日

藤原純貞(花押)



一二、藤原純貞質券

〔端裏書〕
「そくもんすミスサの所しきのうちそのまいらする状」

すミサたかちきやうのはらくちのその

いしよの内ひんかしよりくち五丈きたのめ

ぬにとをす事

右のそのハ、ようくあるにやて、しろのせに式

貫文ニひきわたしまいらせ候了、純貞ちきやう

のほとは、たのさまたけあるへからす候、但ふけんの

くうしなし物いてきたり候とも、またくか

のそのにかゝるましく候、よてこ日のため

にせうもんくたんのことし、

徳治参年十一月十一日

藤原純貞(花押)

さつまのくにますやまのしやうハ、行惠ちう
たいさうてんのしよりやうなるによて、かの
しやうのうち、ところ(平)こくさう丸にゆ
つりたひ候とゆへとも、こきのいや二郎
あふりやうせしめ候あひた、御きたさい
中二候ところに、身ふせう二候によて、行惠の
そんしわらハな四郎太郎丸に、きやうへの
ゆつりしやうをさりあたへ候、かのしやう
をもて申給てちきやうあるへく候、きやう
こうこくさう丸あひいろふましく候、のち
のためには、おやのはんきやうをそへ候、
よてのちのためにしやうくたんのことし、

正和三年三月廿二日

あさなこくさう丸
こくさうかは、

一三、平こくさう丸・同母避状

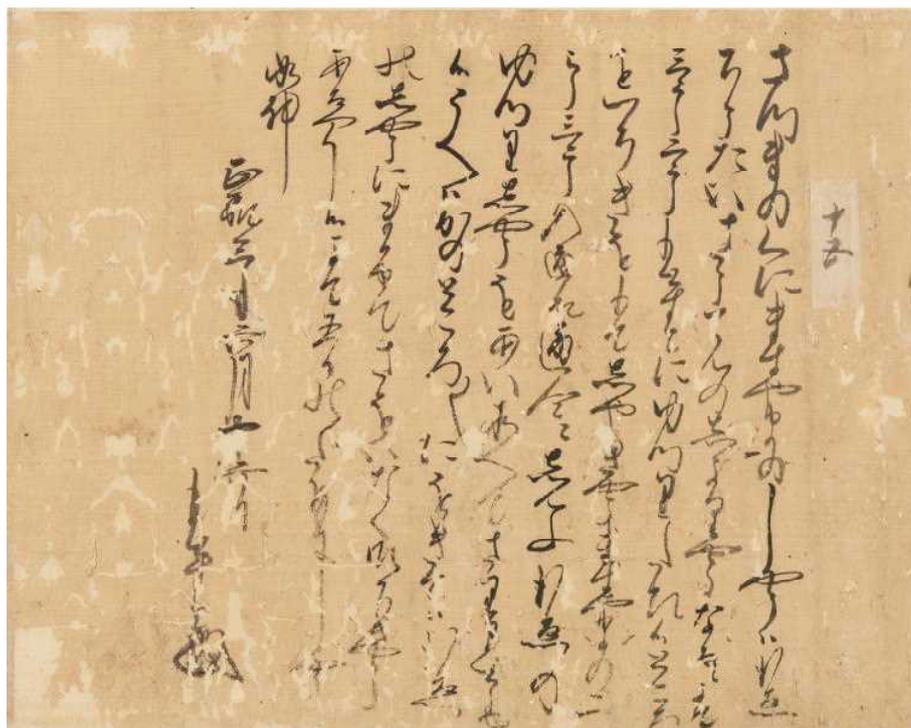
さつまのくにますやまのしやうハ、行惠ちう
たいさうてんのしよりやうなるによて、かの
しやうのうち、ところ(平)こくさう丸にゆ
つりたひ候とゆへとも、こきのいや二郎
あふりやうせしめ候あひた、御きたさい
中二候ところに、身ふせう二候によて、行惠の
そんしわらハな四郎太郎丸に、きやうへの
ゆつりしやうをさりあたへ候、かのしやう
をもて申給てちきやうあるへく候、きやう
こうこくさう丸あひいろふましく候、のち
のためには、おやのはんきやうをそへ候、
よてのちのためにしやうくたんのことし、

正和三年三月廿二日

あさなこくさう丸 (花押)
こくさうかは、 (花押)

十四
 さつまのくにますやまのしやうハ、行惠
 ちうたいさうてんのしよりやうなるニよて、
 中むらのうちを、それかしこくさう
 丸にゆつりたひ候ところに、いつきを
 もてしやきやうますやまの入道殿たう
 ねんに、しんふ行惠のゆつりしやうを
 あひそへてまいらせ候うへハ、かのところ
 にをき候てハ、行惠のしやうにまかせて、
 さをひなく御ちきやうあるへく候、
 よて五日のためニ状如件、
 正和三年三月廿二日
 こくさう丸 (花押)
 こくさう丸は、(花押)

一四、平こくさう丸・同母避状

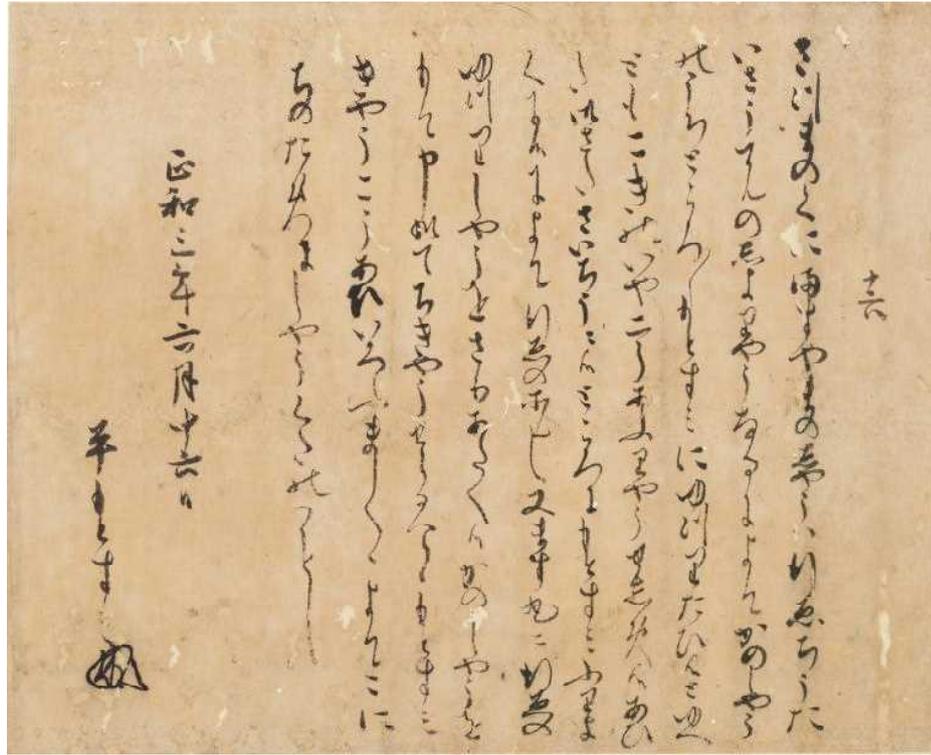


一五、平もとすみ避状

さつまのくにますやまのしやうハ、行惠
 ちうたいさうてんのしよりやうなるニよて、
 三郎二郎もとすみ(平)にゆつりたひ候ところ
 を、へちきをもてしやきやうますやまの二
 郎三郎入道殿道念ニ、しんふ行惠の
 ゆつりしやうをあいそへて、さりまいらせ
 候うへハ、かのところ一にをきてハ、行惠
 のしやうにまかせて、さ後をいなく御ちきやう
 あるへく候、よて五日のためにしやう
 如件、

正和三年六月十六日

もとすみ (花押)



一六、平もとすみ避状

さつまのくにますやまのしやうハ、行惠ちうた
 いさうてんのしよりやうなるにやて、かのしやう
 のうち、ところくもとす^(平)みにゆつりたひ候とゆへ
 とも、こきのいや二郎あふりやうせしめ候あひ
 た、御さたさいちう二候ところに、もとすみふりよ
 くに候にやて、行惠のそんし又ます丸ニ行惠の
 ゆつりしやうをさりあたへ候、かのしやうを
 もて申給て、ちきやうせらるへく候、もとすミ
 きやうこうあひいろふましく候、よてこに
 ちのため、しやうくたのことし、

正和三年六月十六日

平もとすミ (花押)

七

相博長谷寺料畠内角菌壺ヶ所
限東用作畠
限南引地垣
限西小菌堀
限北左衛門尉
平田左衛門尉
垣

与地頭御分宮内名内鍛冶前菌壺ヶ所
限東御倉菌堀端
限南大道
限西本道
限北八郎入道垣

彼菌者相互依為類地限永代所令相博也、然者向後互
 無違乱可知行之候、但於本仏居屋敷西村菌
 壺ヶ所、地頭御分桑代肆佰文分者、同限永代可
 立用之旨、被載御状候之上者、守此旨、可仕知行
 之状如件、

正和参年十月廿九日 沙弥本仏
 比丘尼妙法

一七、沙弥本仏・比丘尼妙法連署相博状

(端裏書)
 「^{さい}の^{さい}」の^{さい}の、きう
 の^{さい}の^{さい}の、きう
 はく□後上もん」

相博長谷寺料畠内角菌壺ヶ所

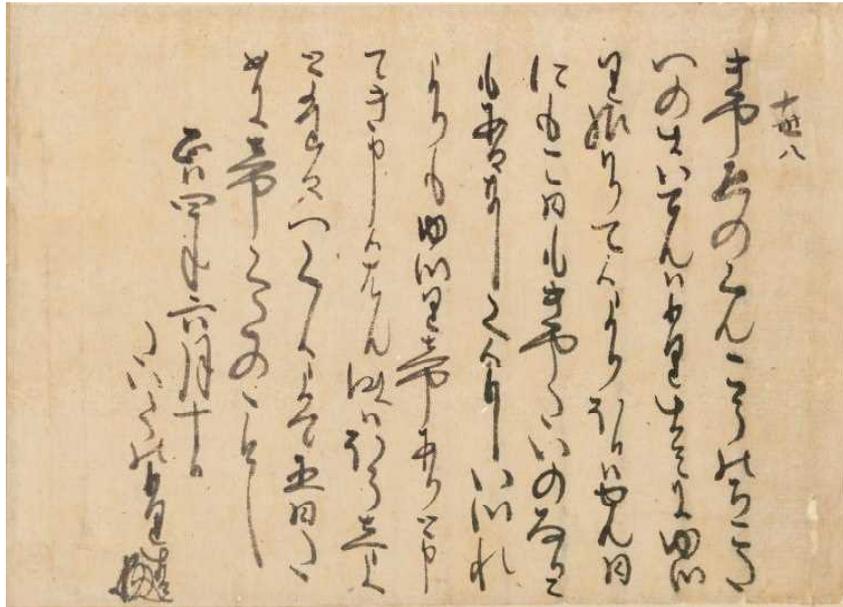
限東用作畠
 限南引地垣
 限西小菌堀
 限北左衛門尉
 平田左衛門尉
 垣

与地頭御分宮内名内鍛冶前菌壺ヶ所

限東御倉菌堀端
 限南大道
 限西本道
 限北八郎入道垣

彼菌者、相互依為類地、限永代所令相博也、然者向後互
 無違乱可知行之候、但於本仏居屋敷西村菌
 壺ヶ所、地頭御分桑代肆佰文分者、同限永代可
 立用之旨、被載御状候之上者、守此旨、可仕知行
 之状如件、

正和参年十月廿九日
 沙弥本仏 (花押)
 比丘尼妙法 (花押)

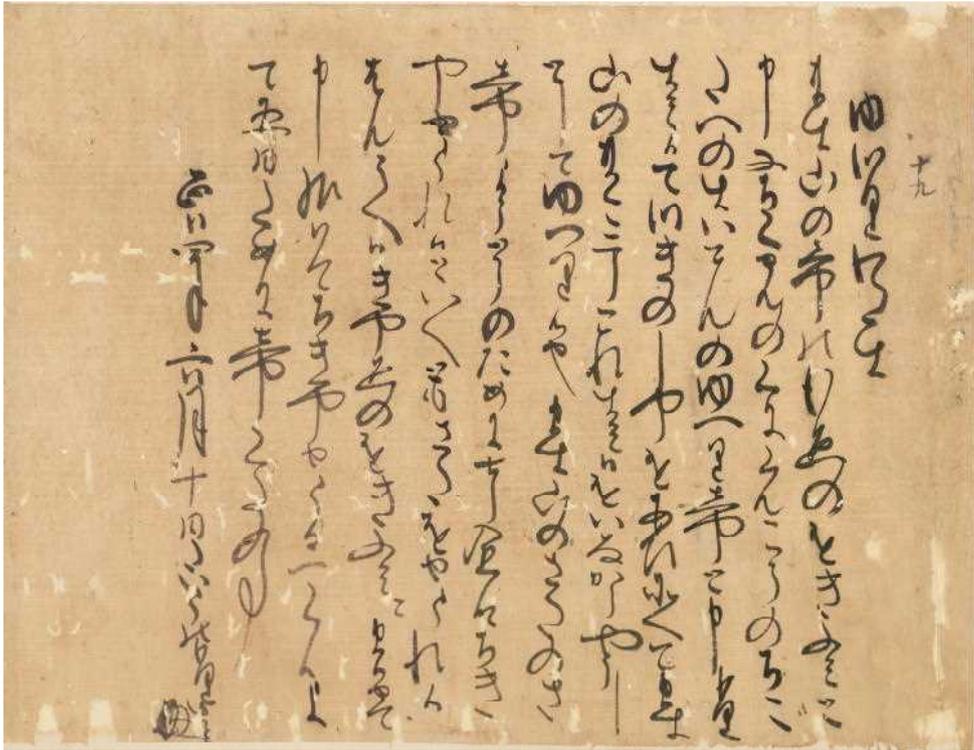


一八、平もりすみ置文

きやう急のくんこうのちこた
 へのすいてんハ、もりすみ^(平)にゆつ
 り給ハリて候よりほかハ、せん日
 にもこ日も、きやうたいのなかニ
 もあるましく候、もしいつれ
 よりもゆつりしやうありと申
 てき申候はん時ハ、ほうしよ
 とたるへく候、よて五日^後た
 めにしやうくたのことし、

正八四年六月十日

たいらのもりすみ (花押)



一九、平もりすみ置文

(端裏書)
「もりすミへの譲文」

ゆつりわたす

ます山のしやうの行惠のをきふミと

申、又ちくせんのかくにんこうのちこ

たへのすいてんのゆつりしやうと申、^(平)もり

すミかてつきのしやうをあひそへて、ます

山のまこ二郎これすミハをいながら、やうし

としてゆつり候也、ます山のきたのき

しやうようとうのために、七郎入道殿ちき

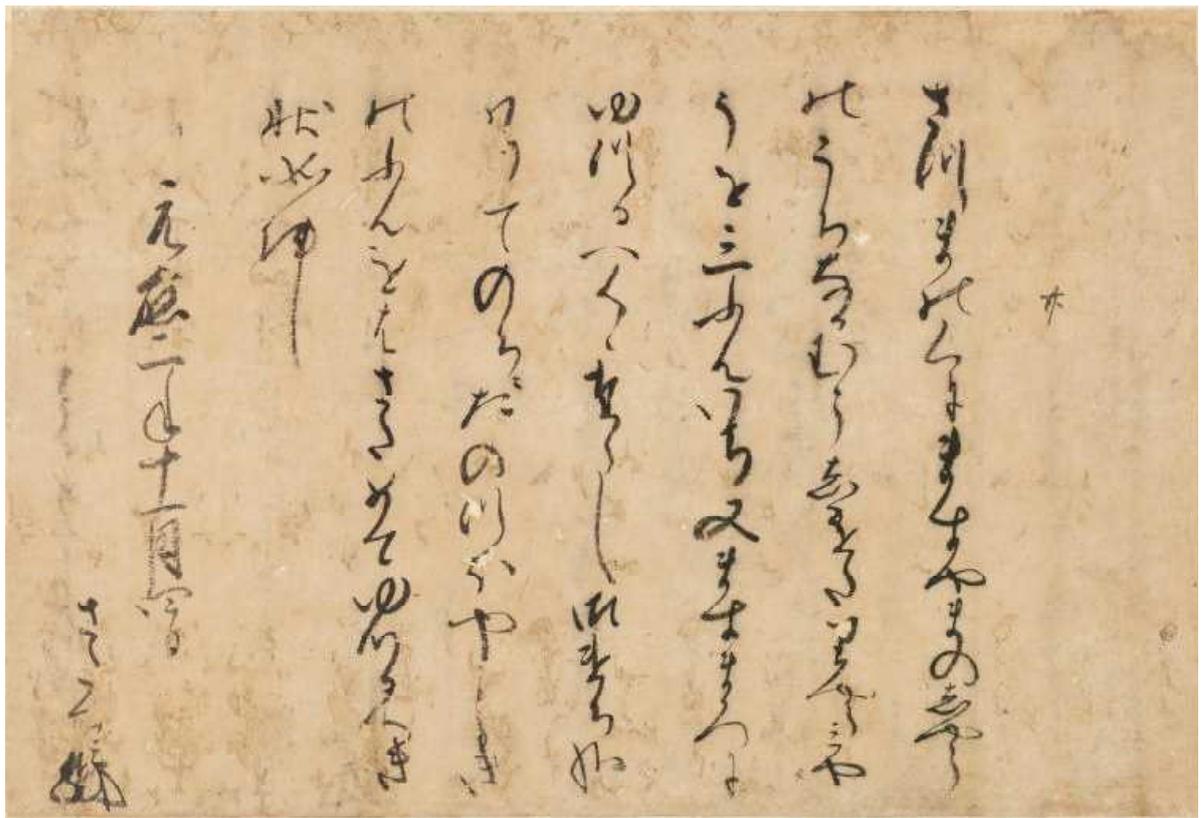
やうせられ候といへとも、きたをせられ候

はんうへハ、きやう恵のをきふミニまかせて

申給りてちきやうせらるへく候、よ

て五日^(後)ためにしやうくたの事し、

正八四年六月十日 たいらのもりすミ (花押)



二〇、平きたすみ置文

さつまのくにますやまのしやう

のうちなかむら・しをたりやうみや

うを三ふんいち、又ますまろに

ゆつるへく候、た、し御けち給

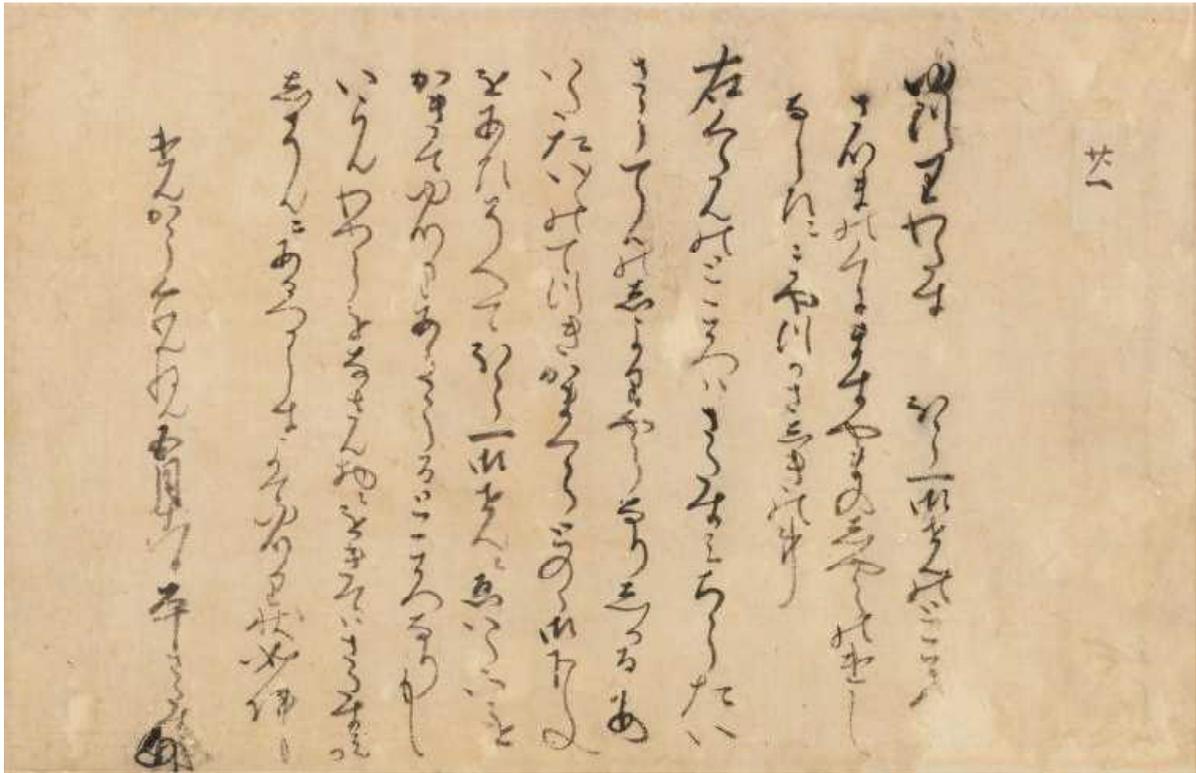
はりてのちニ、たのつほやしき

のふんをはきためて、ゆつるへき

状如件、

元応二年十一月四日

(平) きたすミ (花押)



二一、平きたすみ置文

ゆつりわたす ほう一御せんのところ□

きつまのくにますやまのしやうのけし

ならひニミやつかさしきの事

右、くたんのところハ、きたすミちうたい

さうてんのしよりやうなり、しかるあ

いた、たいくのてつきかまくらとの、御下文

をあひそへて、ほう一御せんニゑいたいを

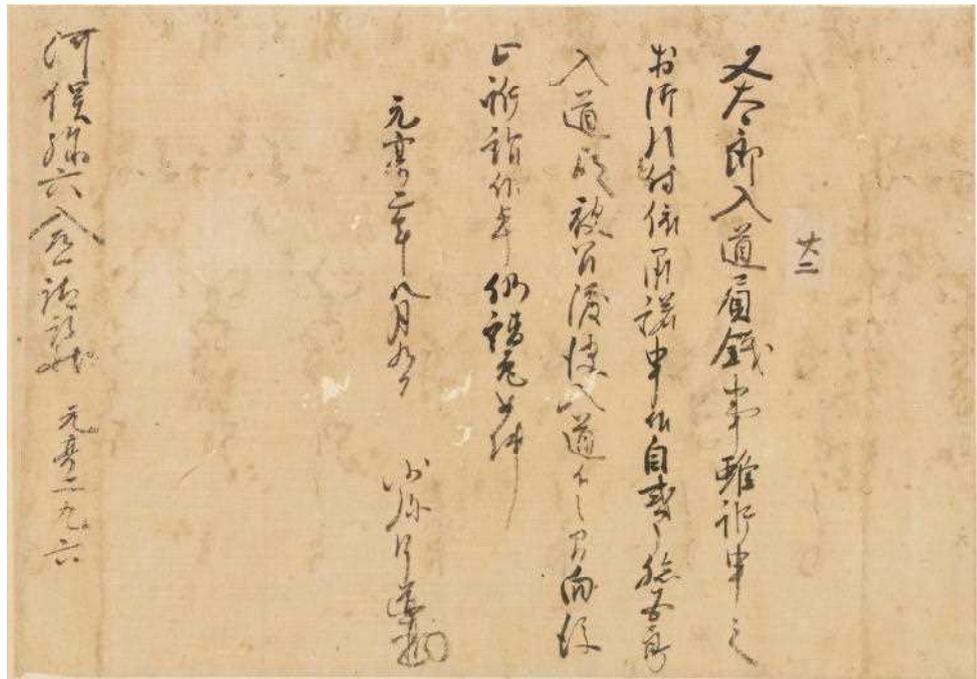
かきてゆつりあたうるところなり、もし

いらんわつらをなさん物ニをきてハ、きたすミか

しそんニあるへからす、よてゆつり状如件、

けんかうくわんねん五月十八日 平きたすミ

(花押)
(裏花押)



二二、沙弥了導請取状

又太郎入道負錢事、雖訴申之、

於御引付依承諾申候、自式部孫五郎

(島津宗久)

入道殿、被召渡彼入道候之間、向後

止訴訟候畢、仍請取如件、

元亨二年八月九日 沙弥了導 (花押)

(毛卜端裏書九)
「河侯弥六入道請取状 元亨二九六」

者塩宇上中浦の合乃魚見加崎お限、此外乃塚波
 以^上連長上其讓お可守云々、如永仁二年十月廿三日妙阿
 状者、長島山田野波自能種之手妙阿永代讓得之
 訖、仍子息六郎種秀仁限永代所讓与也、四至堺
 者能種状分明也云々、如正安三年三月六日種秀状者、
 妙阿相傳所領次第証文於相副天、子息孫六仁永
 代所讓与也、子々孫々無他妨可知行云々、^{各取}要者、一方、
 件所々事、正忘年中妙阿代種秀・蓮胤代種武
 番訴陳之処、妙阿所带状七通内、弘長三年八月六日・
 文永二年八月十五日能種両通状謀書之由、種武
 依難申、大宰少式入道淨恵・薩摩前司入道尊
 覚、遂校正加裏書、令注進関東之間、両方参
 向之刻、種武恐罪科依出去状、下国之旨頼種
 申之処、種武誠令出去状者、就彼状預御下知
 可申給、妙阿所得能種讓状正文之処、無其儀之
 上者、種武去状事不実之由、蓮種所申非無子細也、
 就中、先年注進関東之沙汰、当時難及鎮西御
 成敗之間、可被注進彼状等歟云々、頭書云、無相
 違云々、一方、如妙阿所帯建長五年十月廿一日・同六年

二三、鎮西下知状（前欠）

者塩宇上中浦乃合乃魚見加崎お限、此外乃塚波

建長六年讓お可守云々、如永仁二年十月廿三日妙阿

状者、長島山田野波自能種之手妙阿永代讓得之

訖、仍子息六郎種秀仁限永代所讓与也、四至堺

者能種状分明也云々、如正安三年三月六日種秀状者、

妙阿相傳所領次第証文於相副天、子息孫六仁永

代所讓与也、子々孫々無他妨可知行云々、^{各取}要者、一方、

件所々事、正忘年中妙阿代種秀・蓮胤代種武

番訴陳之処、妙阿所带状七通内、弘長三年八月六日・

文永二年八月十五日能種両通状謀書之由、種武

依難申、大宰少式入道淨恵・薩摩前司入道尊

覚、遂校正加裏書、令注進関東之間、両方参

向之刻、種武恐罪科依出去状、下国之旨頼種

申之処、種武誠令出去状者、就彼状預御下知

可申給、妙阿所得能種讓状正文之処、無其儀之

上者、種武去状事不実之由、蓮種所申非無子細也、

就中、先年注進関東之沙汰、当時難及鎮西御

成敗之間、可被注進彼状等歟云々、頭書云、無相

違云々、一方、如妙阿所帯建長五年十月廿一日・同六年

十二月十日能種狀者情論亦仙行代領主之由
 所見也如淨惠尊覺亦奉書者於彼狀亦在種武
 兼伏畢 是一、次如十月廿四日付弘長元 文永元年七月
 廿七日蓮胤于時種親 兩通起請文者、妙阿非一期領主
 之條分明也、是二、次弘長三年八月六日・文永二年八月十五
 日能種兩通狀謀書之由、種武雖申之、如文儀者、
 或為妙阿不可有不忠之旨誠子息等、或塩宇浦網
 庭守先例可引之由載之歟、二通讓狀蓮種承伏
 之上者、無用狀真偽不能糺明歟、是三、次如号妙阿
 狀正安三年四月十六日狀者、妙阿知行所々任能種
 置文、一期之後余天草蓮種三殿可被知行云々、蓮種帶能種
 讓、為未來領主者、争可備一期領主妙阿狀於
 龜鏡哉之由、賴種所難有其謂歟、是四、次種
 武出去狀者、尤可申給御下知之処、無其儀之上
 者、不實之旨、蓮種所申聊雖非無子細、無閑東
 資縁之鎮西訴人、疲遼遠長途之刻、論敵依
 出去狀、成一旦之悦、忘將來之煩、無左右下國之条、
 不能巨難歟、是五、加之、件去狀事、種秀下國之
 時、尊覺并奉行人宗掃部允基広披見之由、
 賴種申之、如所進六月一日不記年号、基広狀者、論

十二月十八日能種狀者、當論所等妙阿永代領主之由
 所見也、如淨惠・尊覺等裏書者、於彼狀等者、種武
 承伏畢、是一、次如十月廿四日付弘長元 文永元年七月
 廿七日蓮胤于時種親 兩通起請文者、妙阿非一期領主
 之条分明也、是二、次弘長三年八月六日・文永二年八月十五
 日能種兩通狀謀書之由、種武雖申之、如文儀者、
 或為妙阿不可有不忠之旨誠子息等、或塩宇浦網
 庭守先例可引之由載之歟、二通讓狀蓮種承伏
 之上者、無用狀真偽不能糺明歟、是三、次如号妙阿
 狀正安三年四月十六日狀者、妙阿知行所々任能種
 置文、一期之後余天草蓮種三殿可被知行云々、蓮種帶能種
 讓、為未來領主者、争可備一期領主妙阿狀於
 龜鏡哉之由、賴種所難有其謂歟、是四、次種
 武出去狀者、尤可申給御下知之処、無其儀之上
 者、不實之旨、蓮種所申聊雖非無子細、無閑東
 資縁之鎮西訴人、疲遼遠長途之刻、論敵依
 出去狀、成一旦之悦、忘將來之煩、無左右下國之条、
 不能巨難歟、是五、加之、件去狀事、種秀下國之
 時、尊覺并奉行人宗掃部允基広披見之由、
 賴種申之、如所進六月一日不記年号、基広狀者、論

所去狀薩州披見事承候畢又由園事丁存
 具旨之蓮種所不足信用之旨而申非言具
 謂歟 是六、次種武和与状事、内實書者自宰
 府所注進之妙阿相傳能種讓状云々又由浴之
 下阿方人云所持候云々同注進事云々審之
 由蓮種雖申之、如賴種所進潤十月廿一日
 遣妙阿之淨惠状者、肥後国長嶋内田畠相論
 事、於注進函者、付白石二郎左衛門尉道綱進上
 閑東云々、無不審歟、是七、次無正案文不足支証之
 由、同雖申之、彼案文事、淨惠・尊覚加封判之
 条、見先段、輒難被棄破歟、是八、次能種、妙阿類
 書事可被召出之由、同雖申之、先度悉被召
 調之処、燒失之上、当論之肝要、須依淨惠等
 封判状左右之間、蓮種所带状類書、旁不及沙
 汰歟、是九、次件所々妙阿死去之後蓮種知行之
 条、国衙取帳目錄分明也、可被召出之由、同雖申之、
 妙阿為永代領主者、蓮種知行者、可為非分押領
 歟、仍取帳等事不及沙汰歟、是十、然則於件山
 田野・河床等者可被付妙阿跡歟云々、頭書云、

所去狀薩州披見事承候畢、又歸国事可存
 其旨云々、蓮種所難不足信用之旨、所申非無其
 謂歟、是六、次種武和与状事、為実書者、自宰
 府所注進之妙阿相伝能種讓状等正文申給之、
 可隨身歟、不所持彼正文之間、注進事不審之
 由、蓮種雖申之、如賴種所進潤十月廿一日
 遣妙阿之淨惠状者、肥後国長嶋内田畠相論
 事、於注進函者、付白石二郎左衛門尉道綱進上
 閑東云々、無不審歟、是七、次無正案文不足支証之
 由、同雖申之、彼案文事、淨惠・尊覚加封判之
 条、見先段、輒難被棄破歟、是八、次能種、妙阿類
 書事可被召出之由、同雖申之、先度悉被召
 調之処、燒失之上、当論之肝要、須依淨惠等
 封判状左右之間、蓮種所带状類書、旁不及沙
 汰歟、是九、次件所々妙阿死去之後蓮種知行之
 条、国衙取帳目錄分明也、可被召出之由、同雖申之、
 妙阿為永代領主者、蓮種知行者、可為非分押領
 歟、仍取帳等事不及沙汰歟、是十、然則於件山
 田野・河床等者可被付妙阿跡歟云々、頭書云、

不及沙汰之者、後勘條々雖有其謂、先年注
 進之沙汰、於鎮西依難被是非、任先勘注申
 關東之処、如御教書者、先年沙汰事、為誰人
 奉行否不覺悟之旨、兩方令申之上、文弘不義
 事、就蓮種訴雖有沙汰、文弘死去云々、此上於
 關東依難被裁許、所返遣也、可成敗云々、被
 返下注進狀之上者、覺心可預裁許之條、先
 事書之後勘不可有相違、是一、淨惠・尊覺
 等裏書狀者七通也、此内如建長五年十月廿一
 日・同六年十二月十八日能種狀、十月廿八日
 元年七月廿七日蓮胤于時種親兩通狀等者、妙阿永代
 領主之條、所見分明之処、種武不加謀書難之
 間、承伏勿論之旨、見先事書畢、今更不及
 子細、是二、次弘長三年八月六日・文永二年八月十五日
 能種二通狀者、繼交七通之狀中畢、以彼二
 通狀加謀作難之間、淨惠等其由載裏書之
 上、記付狀之端畢、而以七通悉為謀書之旨、道
 明雖申之、皆以可加難者、七通内何閣端狀
 喚出狀中之二通可難申哉、兩通之外者、
 皆以承伏之條、載先段畢、其上彼二通狀依

不及沙汰云々者、後勘條々雖有其謂、先年注
 進之沙汰、於鎮西依難被是非、任先勘注申
 關東之処、如御教書者、先年沙汰事、為誰人
 奉行否不覺悟之旨、兩方令申之上、文弘不義
 事、就蓮種訴雖有沙汰、文弘死去云々、此上於
 關東依難被裁許、所返遣也、可成敗云々、被
 返下注進狀之上者、覺心可預裁許之條、先
 事書之後勘不可有相違、是一、淨惠・尊覺
 等裏書狀者七通也、此内如建長五年十月廿一
 日・同六年十二月十八日能種狀、十月廿八日
 元年七月廿七日蓮胤于時種親兩通狀等者、妙阿永代
 領主之條、所見分明之処、種武不加謀書難之
 間、承伏勿論之旨、見先事書畢、今更不及
 子細、是二、次弘長三年八月六日・文永二年八月十五日
 能種二通狀者、繼交七通之狀中畢、以彼二
 通狀加謀作難之間、淨惠等其由載裏書之
 上、記付狀之端畢、而以七通悉為謀書之旨、道
 明雖申之、皆以可加難者、七通内何閣端狀
 喚出狀中之二通可難申哉、兩通之外者、
 皆以承伏之條、載先段畢、其上彼二通狀依

為無用、不能糺明之子細所載先事書也、是三、
 次彼七通狀雖無正文、敵人承伏之上、淨惠・尊覺
 等裏書狀難被棄捐之子細同前、是四、次建
 長五年二月十八日蓮種所進能種讓狀案者、妙
 阿為一期領主之由、道明雖申之、妙阿為永代
 領主、帶後日狀等之處、種武承伏之次第載先段
 畢、先判無用案文不及沙汰、是五、如十二月十八日
 能種狀者、年來乃妻女仁天候之上、重恩之間、太
 郎二郎仁讓候天、殘所々別乃狀仁堺於差天讓
 給候狀、為向後披見之由、証判お可給云々、取要、如
 同廿日守護代愛甲右衛門尉返狀者、彼讓狀見知
 仕候云々、彼狀為淨惠等封判内、專所備妙阿永
 代領主之証跡也、是六、次文永二年九月二日能種
 讓狀并正安三年四月十六日妙阿狀等者、為妙阿一
 期領主支証之旨、道明同雖申之、於讓狀者、
 談儀所沙汰之時不進覽之間、後日謀作之条頭
 然也、妙阿狀又為謀書之由覺心中申之、被返下
 注進狀之上者、可被召類書之旨、道明雖申之、
 妙阿永代領主之實否、須依淨惠・尊覺

為無用、不能糺明之子細所載先事書也、是三、
 次彼七通狀雖無正文、敵人承伏之上、淨惠・尊覺
 等裏書狀難被棄捐之子細同前、是四、次建
 長五年二月十八日蓮種所進能種讓狀案者、妙
 阿為一期領主之由、道明雖申之、妙阿為永代
 領主、帶後日狀等之處、種武承伏之次第載先段
 畢、先判無用案文不及沙汰、是五、如十二月十八日
 能種狀者、年來乃妻女仁天候之上、重恩之間、太
 郎二郎仁讓候天、殘所々別乃狀仁堺於差天讓
 給候狀、為向後披見之由、証判お可給云々、取要、如
 同廿日守護代愛甲右衛門尉返狀者、彼讓狀見知
 仕候云々、彼狀為淨惠等封判内、專所備妙阿永
 代領主之証跡也、是六、次文永二年九月二日能種
 讓狀并正安三年四月十六日妙阿狀等者、為妙阿一
 期領主支証之旨、道明同雖申之、於讓狀者、
 談儀所沙汰之時不進覽之間、後日謀作之条頭
 然也、妙阿狀又為謀書之由覺心中申之、被返下
 注進狀之上者、可被召類書之旨、道明雖申之、
 妙阿永代領主之實否、須依淨惠・尊覺

封判狀歟且總州時代雖注進類書奉行入
 住宅炎上之時燒失畢其後不及類書沙汰被
 注進之處、依無御不審可成敗之旨、被仰下之上、
 閣閣東進之文書、於鎮西今更難被召出
 各別具書之由、覺心所申非無子細、是七、然則
 妙阿永代領主之段、能種讓狀以下種武承伏
 條、見淨惠等裏書狀之上、先事書之一勘、不
 可有相違之間、任彼勘錄、於山田野・河床以下
 者、可令妙阿跡領掌、次蓮種所帶文永二
 年能種讓狀并妙阿狀以下事、為謀書之
 由覺心申之處、淨種(天草)相統訴訟畢、任式目
 可有其沙汰矣、

一 殺害放火事

右、如同事書者、守護注進勘文等燒失之
 上者、被召出留案可有沙汰之由、蓮種雖申之、
 彼時守護代行忍死去畢、具官人等事敵
 對之旨、兼日訴申之間、於引付被終御沙汰
 上者、不及被召出之旨、賴種所申叶理致歟、
 仍殺害并放火事、互雖申子細、無實証

封判狀歟、且總州時代雖召類書、奉行人
 住宅炎上之時燒失畢、其後不及類書沙汰被
 注進之處、依無御不審可成敗之旨、被仰下之上、
 閣閣東進之文書、於鎮西今更難被召出
 各別具書之由、覺心所申非無子細、是七、然則
 妙阿永代領主之段、能種讓狀以下種武承伏
 條、見淨惠等裏書狀之上、先事書之一勘、不
 可有相違之間、任彼勘錄、於山田野・河床以下
 者、可令妙阿跡領掌、次蓮種所帶文永二
 年能種讓狀并妙阿狀以下事、為謀書之
 由覺心申之處、淨種(天草)相統訴訟畢、任式目
 可有其沙汰矣、

一 殺害放火事

右、如同事書者、守護注進勘文等燒失之
 上者、被召出留案可有沙汰之由、蓮種雖申之、
 彼時守護代行忍死去畢、具官人等事敵
 對之旨、兼日訴申之間、於引付被終御沙汰
 上者、不及被召出之旨、賴種所申叶理致歟、
 仍殺害并放火事、互雖申子細、無實証

間不及沙汰歟云々、頭書云、被注進本訴之

上、不及沙汰云々者、彼勘判無相違焉、

一 以關東御下文覺心号謀書由事

右蓮種則延慶二年八月八日、於奉行人安富左

近將監頼泰前、以蓮種所帶右大將家并

右大臣家御下文為謀書之由、覺心于時、令申

云々、覺心亦為不實之旨稱之者、兩方雖立

申証人、延慶申詞、彼時証人不可覺悟之上、

奉行人頼泰又死去畢、旁以無所于究之間、

不及沙汰矣、

以前條、依仰下知如件

元德元年十一月廿九日

修理亮平朝臣



間、不及沙汰歟云々、頭書云、被注進本訴之

上、不及沙汰云々者、彼勘判無相違焉、

一 以關東御下文覺心号謀書由事

右、蓮種則延慶二年八月八日、於奉行人安富左

近將監頼泰前、以蓮種所帶右大將家并

右大臣家御下文為謀書之由、覺心于時、令申

云々、覺心亦為不實之旨稱之者、兩方雖立

申証人、延慶申詞、彼時証人不可覺悟之上、

奉行人頼泰又死去畢、旁以無所于究之間、

不及沙汰矣、

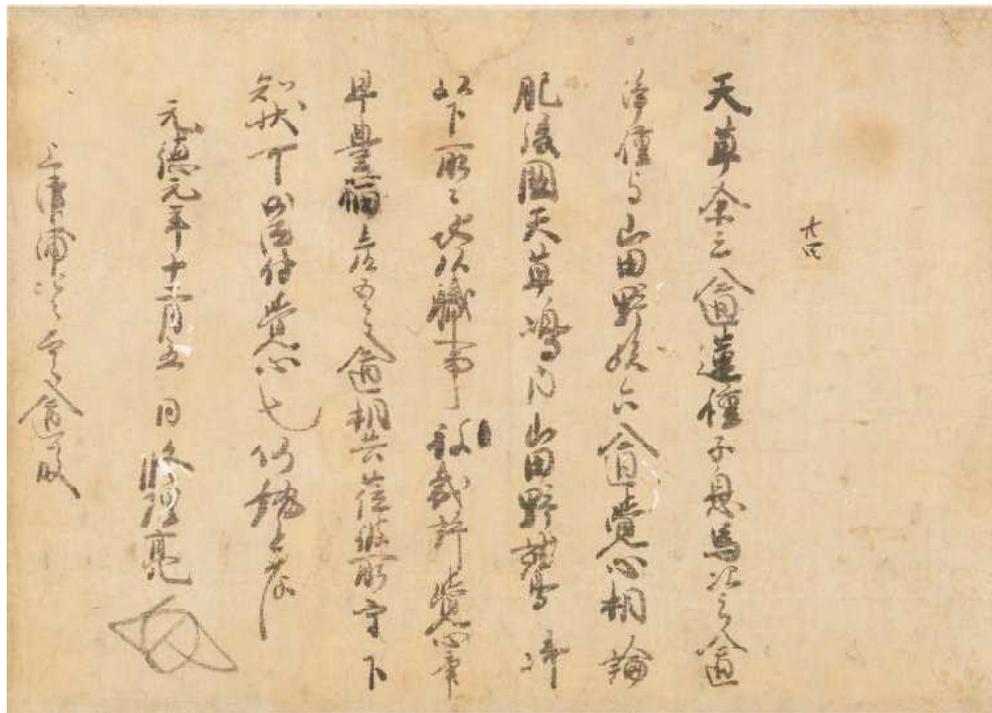
以前條々、依仰下知如件、

元德元年十一月廿九日

修理亮平朝臣 (花押)

※紙継目裏毎に花押あり。

二四、鎮西御教書



天草余三入道蓮種子息馬次郎入道

淨種与山田野孫六入道覚心相論

肥後国天草嶋内山田野・鷺崎

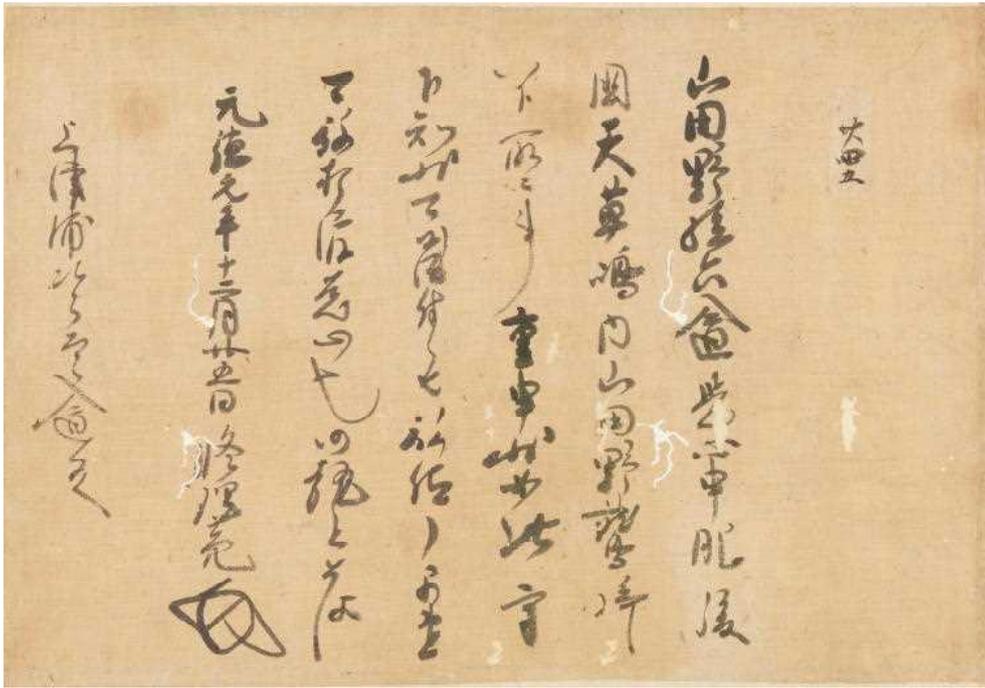
以下所々地頭職事、被裁許覚心畢、

早豊福彦五郎入道相共莅彼所、守下

知状、可沙汰付覚心也、仍執達如件、

元徳元年十二月五日 修理亮 (花押)

上津浦次郎入道殿



二五、鎮西御教書

山田野孫六入道覚心申、肥後

国天草嶋内山田野・驚崎

以下所々事、重申状如此、守

下知状、可沙汰付之由被仰了、早速

可被打渡覚心也、仍執達如件、

元徳元年十二月廿五日
(北条英時) 修理亮
(花押)

上津浦次郎太郎入道殿

二六、鎮西下知狀

隱岐三郎左衛門尉行雄法師法名代頭雄与同孫三
 郎定氏二階堂妙性相論薩摩國阿多郡北方高橋郷事
 右訴陳二問答之上於引付之座召決之處、恰恰所申、枝葉
 雖多、所詮、頭雄則彼北方者祖母忍昭所領也、而為異賊警
 固、可差下子息隱岐左衛門入道二階堂行景母々々泰行於鎮西之由、正忘
 五年依被成御教書、道忍下向之刻、当方御年貢每年佰伍
 拾貫文蒙御免之間、於下地者雖分讓之、至年貢者可弁
 惣領之條、忍昭置文分明之處、定氏對捍之上者、任誠句、
 可被付下地之由訴之、妙性亦忍昭遺領者、數輩知行之間、
 於警固役者、各令勤仕畢、争可弁御免年貢於惣領之
 由、可書置哉、眼前忍昭之謀書也、可被奇捐濫訴之旨陳之、
 爰如頭雄所進被下隱岐入道後家之正忘五年十二月
 七日関東御教書者、異賊警固事、嚴密有沙汰之上、任
 申請、可令差下子息三郎左衛門尉於所領阿多北方云、
 如被充同人之永仁二年十二月廿七日同御教書者、薩摩國
 阿多北方年貢事、当所之外無知行地之處、依異國警固
 差下子息云々、仍所有御免也云々、如忍昭正和三年二月廿八日
 置文者、薩摩國阿多北方御用途佰伍拾貫、每年仁

隱岐三郎左衛門尉行雄法師法名代頭雄与同孫三
 郎定氏二階堂妙性相論、薩摩國阿多郡北方高橋郷事
 右、訴陳二問答之上、於引付之座召決之處、恰恰所申、枝葉
 雖多、所詮、頭雄則彼北方者祖母忍昭所領也、而為異賊警
 固、可差下子息隱岐左衛門入道二階堂行景母々々泰行於鎮西之由、正忘
 五年依被成御教書、道忍下向之刻、当方御年貢每年佰伍
 拾貫文蒙御免之間、於下地者雖分讓之、至年貢者可弁
 惣領之條、忍昭置文分明之處、定氏對捍之上者、任誠句、
 可被付下地之由訴之、妙性亦忍昭遺領者、數輩知行之間、
 於警固役者、各令勤仕畢、争可弁御免年貢於惣領之
 由、可書置哉、眼前忍昭之謀書也、可被奇捐濫訴之旨陳之、
 爰如頭雄所進被下隱岐入道後家之正忘五年十二月
 七日関東御教書者、異賊警固事、嚴密有沙汰之上、任
 申請、可令差下子息三郎左衛門尉於所領阿多北方云、
 如被充同人之永仁二年十二月廿七日同御教書者、薩摩國
 阿多北方年貢事、当所之外無知行地之處、依異國警固
 差下子息云々、仍所有御免也云々、如忍昭正和三年二月廿八日
 置文者、薩摩國阿多北方御用途佰伍拾貫、每年仁

鎌倉江沙汰進須留登雖登母、故左衛門入道殿鎮西警固尔
依豆御免阿留上者、高橋郷尔每年柒拾伍貫文仁当流用
途於波、尼一期乃後者、面々庶子知行乃分限尔随天、彼用途
惣領乃方尔可弁也、何毛孫他利登雖登母、故三郎左衛門入道
身尔向豆御免安留間、尼賀心仁任世奴尔依豆、置文乎加様仁書
置也、若懈怠乎致佐半輩者、下地於可申給也、又庶子等咎
無加良年於、惣領方与利謂煩波須末志幾也云々者、後家女子
知行之鎮西所領者、非警固要器之間、可被收公之由、正応
年中有沙汰之刻、當方者、就差下子息道忍、全知行之
上、依彼劳动蒙乎百御免之間、存其由緒、於高橋郷分
柒拾伍貫文者、可弁惣領行存之條、忍昭置文分明之旨、
頭雄申之處、以忍昭所給御教書、号道忍拜領之条參差
由、妙性雖称之、可差下道忍_{于時}之旨、御教書炳焉之間、加了
見歟、而於正応御教書者、被充忍昭之處、不任意之旨、載
置文之条、為謀書之由、妙性又雖申之、依道忍下向蒙御
免之間、令書表子細歟、不足繆難、随而如御教書者年
貢也、号置文者御所用途云々、名目相違之旨、妙性申之處、
進御所之間、御所用途之由、令書歟之旨、頭雄称之、非無
会釈哉、加之、異賊番役者、面々所令勤仕也、道忍一人難
募其勞之由、妙性雖申之、無支証之上、彼役者嘉元以
來被止畢、忍昭死去者、正和年中也、本主存日不可各別
間、不及沙汰、且件年貢可弁惣領者、尤可載子細於讓狀
處、無其儀之旨、妙性雖称之、如然事、就置文有沙汰之

鎌倉江沙汰進須留登雖登母、故左衛門入道殿鎮西警固尔
依豆御免阿留上者、高橋郷尔每年柒拾伍貫文仁当流用
途於波、尼一期乃後者、面々庶子知行乃分限尔随天、彼用途
惣領乃方尔可弁也、何毛孫他利登雖登母、故三郎左衛門入道
身尔向豆御免安留間、尼賀心仁任世奴尔依豆、置文乎加様仁書
置也、若懈怠乎致佐半輩者、下地於可申給也、又庶子等咎
無加良年於、惣領方与利謂煩波須末志幾也云々者、後家女子
知行之鎮西所領者、非警固要器之間、可被收公之由、正応
年中有沙汰之刻、當方者、就差下子息道忍、全知行之
上、依彼劳动蒙乎百御免之間、存其由緒、於高橋郷分
柒拾伍貫文者、可弁惣領行存之條、忍昭置文分明之旨、
頭雄申之處、以忍昭所給御教書、号道忍拜領之条參差
由、妙性雖称之、可差下道忍_{于時}之旨、御教書炳焉之間、加了
見歟、而於正応御教書者、被充忍昭之處、不任意之旨、載
置文之条、為謀書之由、妙性又雖申之、依道忍下向蒙御
免之間、令書表子細歟、不足繆難、随而如御教書者年
貢也、号置文者御所用途云々、名目相違之旨、妙性申之處、
進御所之間、御所用途之由、令書歟之旨、頭雄称之、非無
会釈哉、加之、異賊番役者、面々所令勤仕也、道忍一人難
募其勞之由、妙性雖申之、無支証之上、彼役者嘉元以
來被止畢、忍昭死去者、正和年中也、本主存日不可各別
間、不及沙汰、且件年貢可弁惣領者、尤可載子細於讓狀
處、無其儀之旨、妙性雖称之、如然事、就置文有沙汰之

條為常例歟、將又彼年貢事不實也、可被召出御免以
 前証狀之由、依妙性申、如顯雄出帶正嘉二年十二月十六
 日、關東御教書者、阿多北方御年貢錢貨伍拾貫文、
 每年無懈怠可進云々、子細炳焉之上、或忍昭蒙御免之
 由稱之、或不存知之旨、妙性申之間、陳詞亘兩端畢、所
 詮置文謀書之由、妙性雖稱之、於顯雄差申行存弟
 六郎左衛門尉成藤・又三郎行武所帶忍昭讓狀者、号一
 味之仁、妙性嫌申訖、至妙性引申近江四郎左衛門尉後
 家所持狀者、就行存訴、弁彼用途之由、代官道阿依
 進請文、先日裁許之上、承伏狀不及召出之、宮内少輔入道
 妻者、載陳狀之間、對決之時被尋問之處、不知在所之
 旨、妙性申畢、旁難及類書之沙汰之上者、置文実
 書之條勿論歟、凡如彼狀者、致懈怠之輩分、猶惣領
 可申給之由、書載之處、以行存所帶祖母忍昭置文、定
 氏加謀作難之條、不遁其咎歟、然則任傍例、就誠句、
 於當鄉内定氏分領者、所被付于行存也矣者、依仰
 下知如件

元德元年十二月廿五日

修理亮平朝臣



條、為常例歟、將又彼年貢事不實也、可被召出御免以
 前証狀之由、依妙性申、如顯雄出帶正嘉二年十二月十六
 日、關東御教書者、阿多北方御年貢錢貨伍拾貫文、
 每年無懈怠可進云々、子細炳焉之上、或忍昭蒙御免之
 由稱之、或不存知之旨、妙性申之間、陳詞亘兩端畢、所
 詮置文謀書之由、妙性雖稱之、於顯雄差申行存弟
 六郎左衛門尉成藤・又三郎行武所帶忍昭讓狀者、号一
 味之仁、妙性嫌申訖、至妙性引申近江四郎左衛門尉後
 家所持狀者、就行存訴、弁彼用途之由、代官道阿依
 進請文、先日裁許之上、承伏狀不及召出之、宮内少輔入道
 妻者、載陳狀之間、對決之時被尋問之處、不知在所之
 旨、妙性申畢、旁難及類書之沙汰之上者、置文実
 書之條勿論歟、凡如彼狀者、致懈怠之輩分、猶惣領
 可申給之由、書載之處、以行存所帶祖母忍昭置文、定
 氏加謀作難之條、不遁其咎歟、然則任傍例、就誠句、
 於當鄉内定氏分領者、所被付于行存也矣者、依仰
 下知如件、

元德元年十二月廿五日

(北条英時)
修理亮平朝臣 (花押)

※紙繼目裏毎に花押あり。

きつまのくにますやまのしやう、をやに
てん入いしやうあわんきうたわいしやう
いへとも、あんとせられすして、めいをとし
められ候をはん、しかるおきやうとの御せ
いはいのあひた、かのさたのために、きやう
とへまかりのほり候、このところあんとして
候はぬ時、さてい又いち丸ニあんとのおんけん
をさいて、三ふん一をゆつりあたうへく
候、もしへんかい申候はん時ハ、すへすミか
ちきやうのふんをちきやうせらるへく候、
よてのちのために〔如脱〕件、

けんこう三ねん六月廿三日

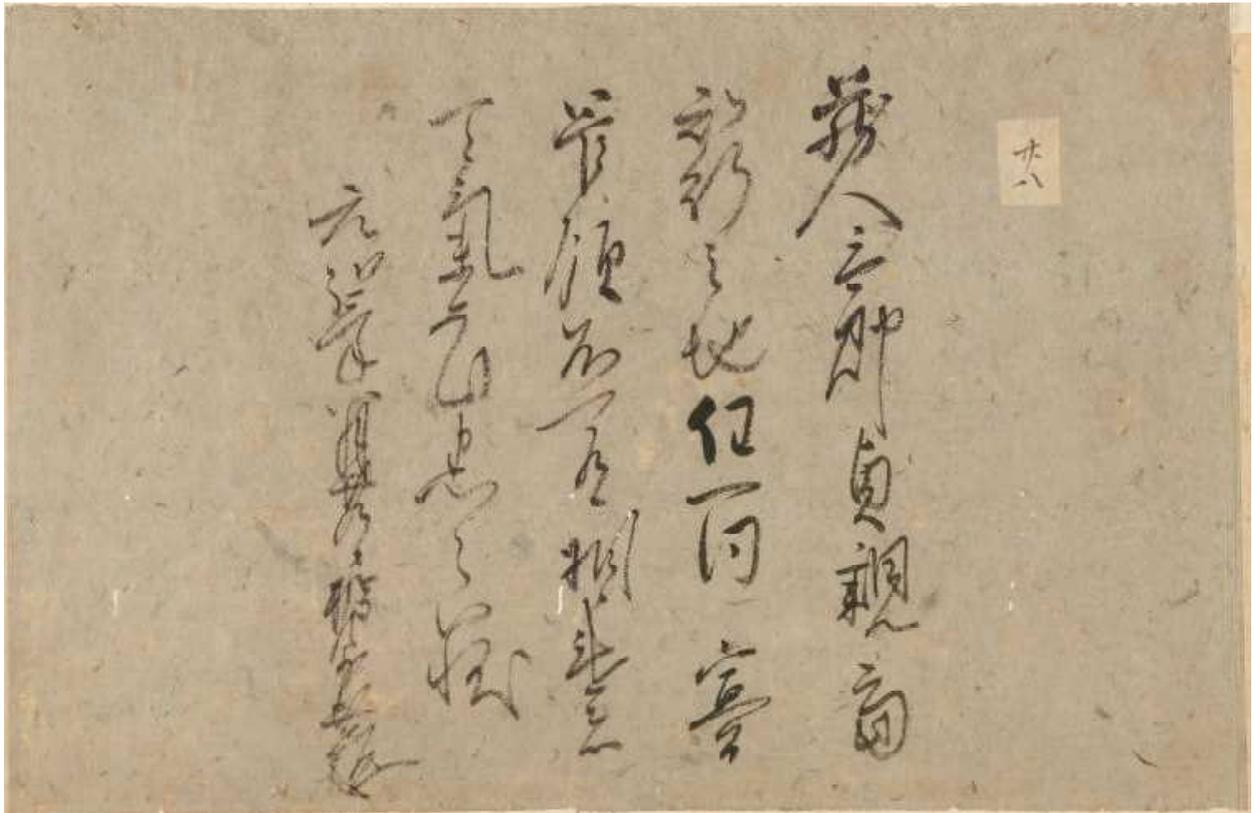
たいらのすへすミ

二七、平すへすみ置文

きつまのくにますやまのしやう、をやに
て候入たう堂ねん、さたおいたし候と
いへとも、あんとせられすして、めいをとし
められ候をはん、しかるおきやうとの御せ
いはいのあひた、かのさたのために、きやう
とへまかりのほり候、このところあんとして
候はぬ時、さてい又いち丸ニあんとのおんけん
をさいて、三ふん一をゆつりあたうへく
候、もしへんかい申候はん時ハ、すへすミか
ちきやうのふんをちきやうせらるへく候、
よてのちのために〔如脱〕件、

けんこう三ねん六月廿三日

たいらのすへすミ (花押)



二八、後醍醐天皇綸旨（宿紙）

藏人三郎貞親当

知行之地、任一同 宣旨、

管領不可相違者、

天氣如此、悉之、以状、

元弘三年八月廿九日

（高倉光守）
權左少弁（花押）

讓与 乙一磨

薩摩国阿多郡北方高橋郷

内田三丁屋敷一所 坪付有
別紙 事

右所以祖母禪尼忍照讓状

所給外題安堵也而為舅之上

依有師弟之契約相副本

證文所讓与乙一丸也不可有

他妨之状如件

建武三年八月十五日

法印大和尚位真顯 起

二九、二階堂真顯讓状

讓与 乙一磨

薩摩国阿多郡北方高橋郷

内田三丁屋敷一所 坪付有
別紙 事

右所、以祖母禪尼忍照讓状

所給外題安堵也、而為舅之上、

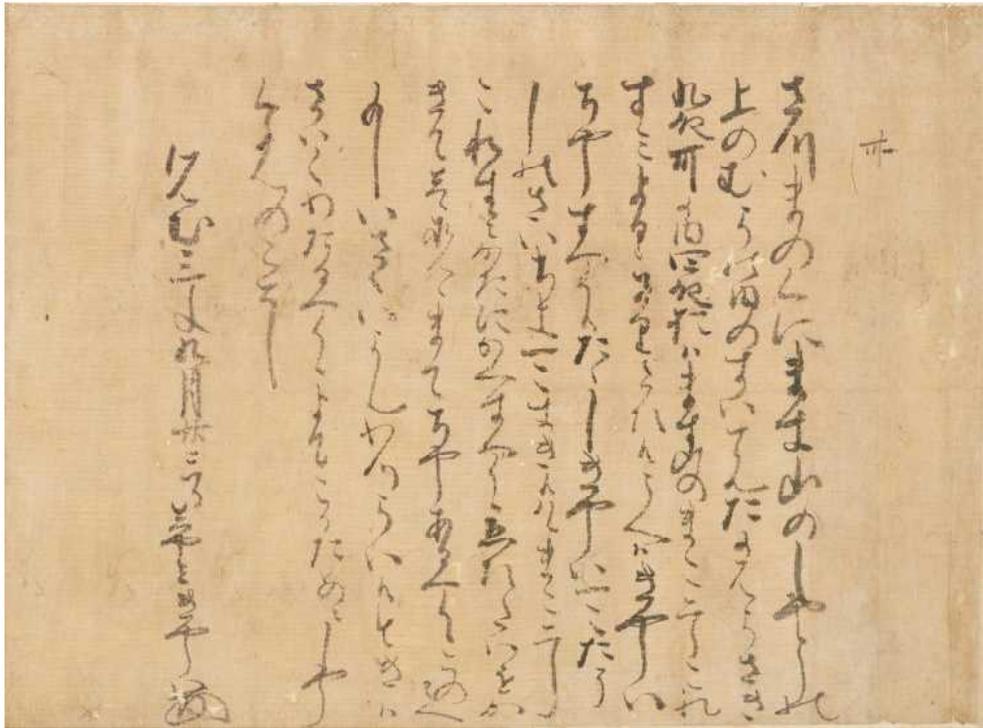
依有師弟之契約、相副本

証文、所讓与乙一丸也、不可有

他妨之状如件、

建武三年八月十五日

法印大和尚位真顯 (花押)



三〇、沙弥きやうい置文

さつまのくにます山のしやうの
 上のむらの内のすいてんたかはらさき
 九段卅の内四段おハ、ます山のまこ二郎これ
 すミより、さりたひ候うへハ、きやうい
 ちやうすへく候、た、しきやうい一こたう
 しのさいちよ一こすき候ハ、まこ二郎
 これすミかたにかへすへく候、急ひたいをか
 きてし、^{〔が脱〕}そんくまでちやうあるへく候、このうへ
 もしいさ、いらんわつらい候ときハ、
 さいくわたるへく候、よてこ日ためニ、しやう
 くたんのことし、

けんむ三年九月廿三日　しやみきやうい（花押）

貳

讓与

七郎行貞所

薩摩国阿多郡北方高橋郷内路余利南

水田拾八町六段

并井牟田、山野、
四至境見本文書

右所者、行存為相伝所領之間、所讓与行貞

實也、於公方御公事者、随分限、令勤仕、迄于

子々孫々、無他妨可令知行、仍為後日讓状

如件

建武五年九月二日

行存

三一、二階堂行雄讓状

讓与

七郎行貞所
(二階堂)

薩摩国阿多郡北方高橋郷内路余利南

水田拾八町六段
并井牟田、山野、
四至境見本文書

右所者、(二階堂行雄)行存為相伝所領之間、所讓与行貞

實也、於公方御公事者、随分限、令勤仕、迄于

子々孫々、無他妨可令知行、仍為後日讓状

如件、

建武五年九月二日

行存 (花押)

三二、二階堂行雄讓狀

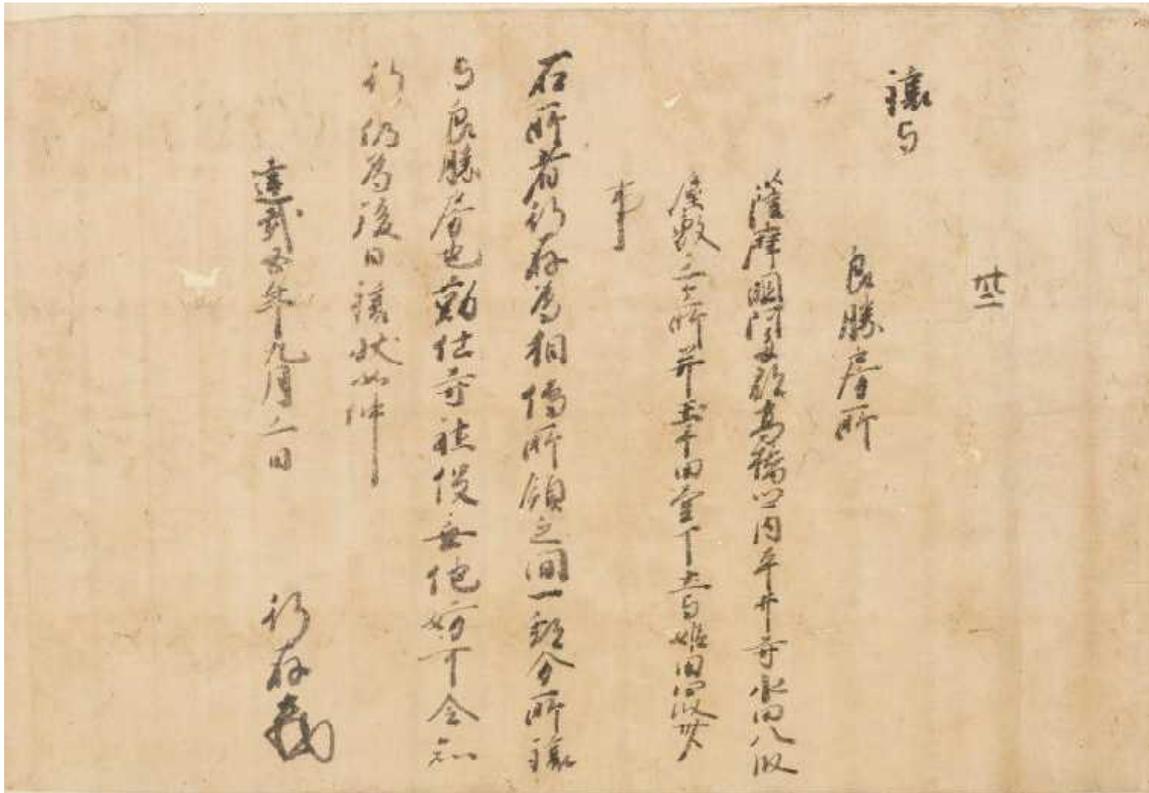
讓与

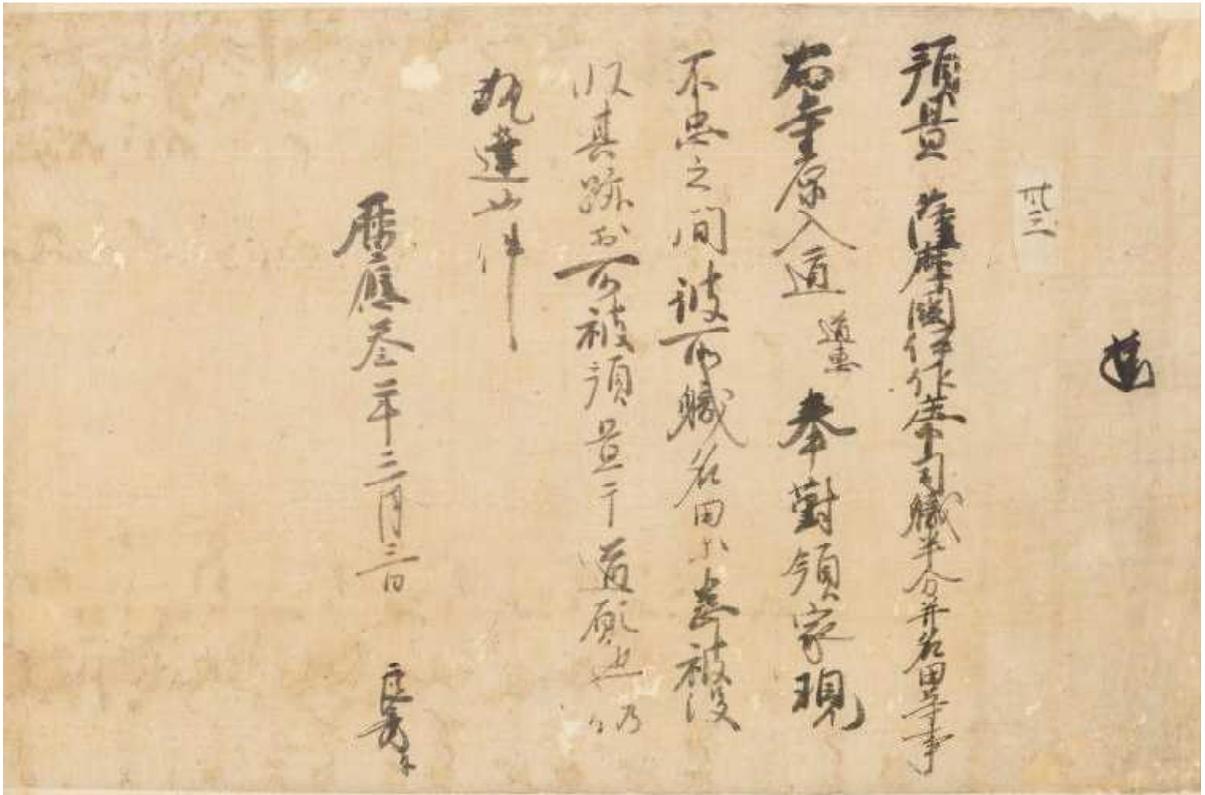
良勝房所

薩摩国阿多郡高橋郷内平井寺水田八段・
屋敷三ヶ所并玉牟田壺丁・土与姫田四段卅
事

右所者、(二階堂行雄)行存為相伝所領之間、一期分所讓
与良勝房也、勤任寺社役、無他妨可令知
行、仍為後日讓狀如件、

建武五年九月二日 行存 (花押)





三三、某袖判良秀奉書

(花押)

預置 薩摩國伊作庄下司職半分并名田等事、

右、寺原入道 道惠 奉對領家現

不忠之間、彼所職名田等悉被沒

収、其跡於所被預置于道願也、仍

執達如件、

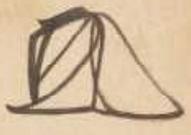
曆應三年三月三日 良秀奉

延寶二年甲寅正月廿一日、入來院隼人重香、
 忠久公御判、御文書被致進上之、為其御返礼、
 此正文隼人殿江被為給之、故為後証可写留、
 之旨、嶋津出雲殿御下知也、仍如件、

参 御方可致

軍忠之状如件

康永二年四月十二日



澁谷孫次郎殿

三四、足利直義軍勢催促御教書写

(朱筆)
 [延寶二年甲寅正月廿一日、入來院隼人重香、
 (嶋津)
 忠久公御判御文書被致進上之、為其御返礼、
 此正文隼人殿江被為給之、故為後証可写留、
 之旨、嶋津出雲殿御下知也、仍如件、]

参 御方、可致

軍忠之状如件、

康永二年四月十二日

(足利直義)
(花押)

澁谷孫次郎殿
(重広)

ゆつり渡所領事

八所行春所

右所領ハ、さつまの国あたのこほり
きたかたの内いきの村、行存さう
てんの所領たるあひた、八郎にゆつる
ところなり、このところハ次郎まこと
る間、ゆつるといへとも、とんせいする間、
八郎になかくゆつる也、し、さかいハ、
せんれいにまかせてちきやうす
へき也、後日のためにゆつり状如件、

貞和七年三月廿日

行存

三五、二階堂行雄讓状

ゆつり渡所領事

八所行春所

右所領ハ、さつまの国あたのこほり
きたかたの内いけへの村、(二階堂行雄)
行存さう
てんの所領たるあひた、八郎にゆつる
ところなり、このところハ次郎まこと
る間、ゆつるといへとも、とんせいする間、
八郎になかくゆつる也、し、さかいハ、
せんれいにまかせてちきやうす
へき也、後日のためにゆつり状如件、

貞和七年三月廿日

行存 (花押)

三六、惣公文重円等連署注進状

本六

注進

去年十月田所罷上候之時、国不審注進仕候之處、依路次難儀自道罷歸候、御領損亡無申許次第候之間、去年御年貢等不京進仕候之条、公私歎入候、此便宜不取敢候程仁、田所上洛之時注進狀進上之仕候、一、覚眼・同右衛門次郎、政所仁可引入於御敵事依露頭候、罷出於政所、御敵伊集院助三郎入道之領内仁令居住候、為御不審申上候、不路次別子細候者、急速以御脚力国不審等可申上候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言

觀應二年四月二日

惣公文重円

田所代榮應

下司道智

收納使承覚

注進

去年十月田所罷上候之時、国不審注進仕候之處、依路次難儀自道罷歸候、御領損亡無申許次第候之間、去年御年貢等不京進仕候之条、公私歎入候、此便宜不取敢候程仁、田所上洛之時注進狀進上之仕候、一、覚眼・同右衛門次郎、政所仁可引入於御敵事依露頭候、罷出於政所、御敵伊集院助三郎入道之領内仁令居住候、為御不審申上候、不路次別子細候者、急速以御脚力国不審等可申上候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

觀應二年四月二日

惣公文重円 (裏花押)

田所代榮應 (裏花押)

下司道智 (裏花押)

收納使承覚 (裏花押)

世次七

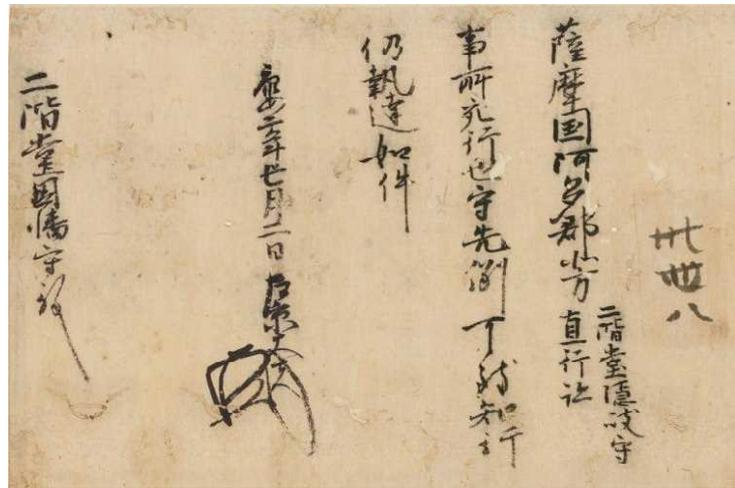
思ふありし平四郎氏純か所
すつまのくにます山のしやうのう□、
しをたなかむらのてんはくさんやら事、
右、たうしやうハ、これすミかせんそさう
てんのしりやうなり、しかるに、この内
上村のうちすいてんたかわらさき一丁、
そのハやさうけ、うかふるその一ヶ所□□
めななむらにきしさうつのしり一丁、
上村のさかい也、そのハまつたのか、は□
のいやしき一ヶ所、上^上かれこれ二町、その二ヶ所、
したいのほんもんしよ・てつきをあいそ□
て、平四郎氏純ニ急いたいをかきてゆつり
わたすところ也、のちのために、とう月と□
しひつのゆつり状、し、そんくニいたるまで、わつ
らいなくちきやうすへき状如件、

正平七年二月十日 平惟純

三七、平惟純讓状

ゆつりあたう平四郎氏純か所に
さつまのくにます山のしやうのう□、
しをたなかむらのてんはくさんやら事、
右、たうしやうハ、これすミかせんそさう
てんのしりやうなり、しかるに、この内
上村のうちすいてんたかわらさき一丁、
そのハやさうけ、うかふるその一ヶ所□□
めななむらにきしさうつのしり一丁、
上村のさかい也、そのハまつたのか、は□
のいやしき一ヶ所、上^上かれこれ二町、その二ヶ所、
したいのほんもんしよ・てつきをあいそ□
て、平四郎氏純ニ急いたいをかきてゆつり
わたすところ也、のちのために、とう月と□
しひつのゆつり状、し、そんくニいたるまで、わつ
らいなくちきやうすへき状如件、

正平七年二月十日 平惟純 (花押)



三八、斯波氏経奉書（小切紙）

薩摩国阿多郡北方 二階堂隱岐守
直行跡

事、所充行也、守先例可致知行、

仍執達如件、

康安二年七月二日 （斯波氏経）
左京大夫 （花押）

二階堂 （行貞）
因幡守殿

出拳御米事

合五拾石者

右米者、今年中可返進候、

若無沙汰之儀候者、阿多郡内

新山并太田・上床三ヶ村

相当于此米候之程、可有御

知行之由、所仰候也、聊

不可有違乱煩之儀候、仍状

如件、

貞治五年七月十日

泰久
通喜
花押

三九、通喜・泰久連署出拳米借券

出拳御米事

合五拾石者

右米者、今年中可返進候、

若無沙汰之儀候者、阿多郡内

新山并太田・上床三ヶ村

相当于此米候之程、可有御

知行之由、所仰候也、聊

不可有違乱煩之儀候、仍状

如件、

貞治五年七月十日

泰久
通喜
(花押)

四〇、禅麟讓状

軍

ゆつりを渡所領事

な、一丸所

右所領ハ、さつまの国あたのこほり
きたかたの内、まくの村事、禅りん
さうてんの所領たるあひた、な、一にゆ
つる所なり、さんやか、いし、さかいハ、
せんれいにまかせてちきやうす
へきなり、後日のためニゆつり状
如件、

天授元年十一月十二日 禅麟 (花押)

四一、宗光契状

長申らん 字一

一右の意趣ハ、於前々も、上方をゆめく
 おろかに存たてまつらす候、今よりのちも、
 弥々公方をおろかに存申へからす候、
 一、不慮のさんしや候て、上方を聊おろかに存申と、
 御み、に入候する時ハ、ちきに仰蒙候て可申開候、
 又上意いかやうにむきて候と申人候する時ハ、其
 衆きを上方へ可申上候、若この条ニいつはり申候者、
 惣日本国大少神祇、別伊勢天照大神・熊野三所権現、
 ことに八当社 八幡大菩薩・諏訪上下大明神・
 天満自在天神御罰可罷蒙候、仍請文如件、
 宗光
 応永廿年九月廿三日

畏申上候、

一、右の意趣ハ、於前々も、上方をゆめく

おろかに存たてまつらす候、今よりのちも、

弥々公方をおろかに存申へからす候、

一、不慮のさんしや候て、上方を聊おろかに存申と、

御み、に入候する時ハ、ちきに仰蒙候て可申開候、

又上意いかやうにむきて候と申人候する時ハ、其

衆きを上方へ可申上候、若この条ニいつはり申候者、

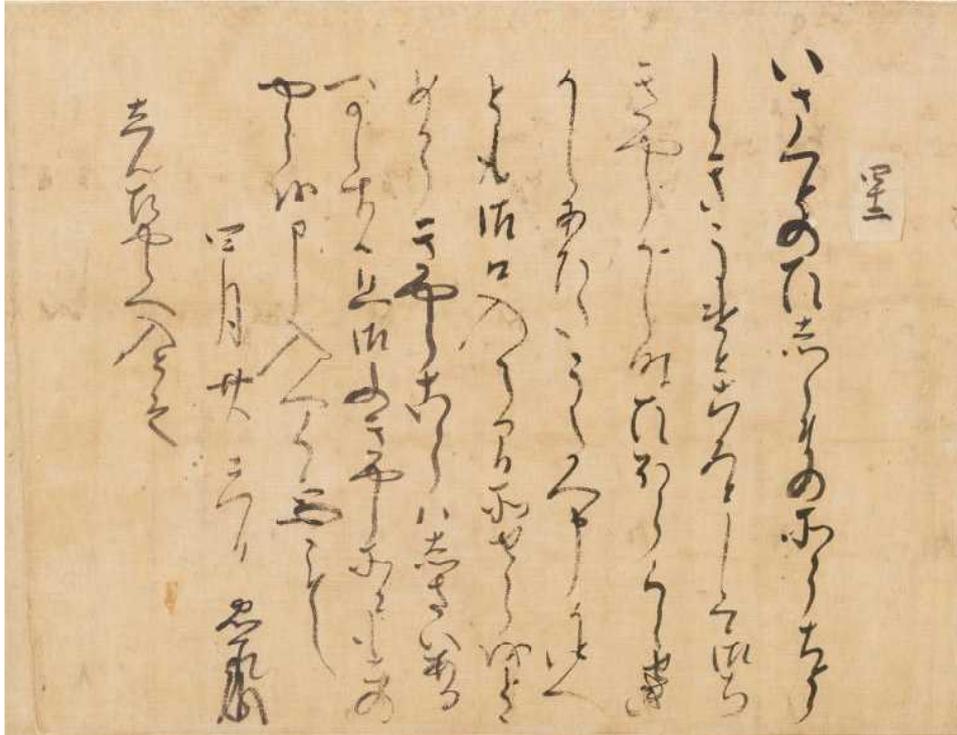
惣日本国大少神祇、別伊勢天照大神・熊野三所権現、

ことに八当社 八幡大菩薩・諏訪上下大明神・

天満自在天神御罰可罷蒙候、仍請文如件、

宗光

宗光(花押)



四二、比志島忠範書状

(島津宗久)
いさくとの、ひししまのそうちとう

しき、うけところとして御ち

きやう候之時、ひほうらうせき

候しあひた、うたへ申候といへ

とも、御口入之間をせうをと、

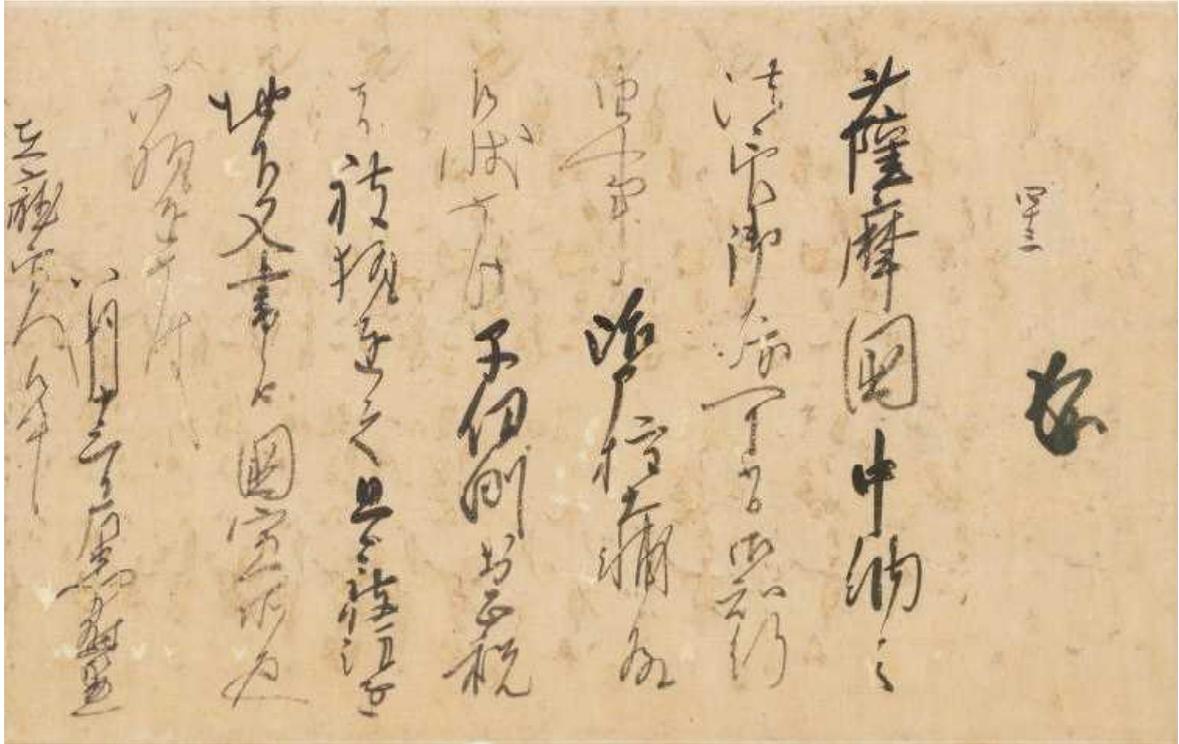
め候了、きやうこうハしさいある

へからす候、且御ふきやう所ニもこの

やうを申入へく候、恐々謹言、

(延慶四年)
四月廿三日
(比志島)
忠範 (花押)

しんひやうへ入とう殿



四三、薩摩国宣

(一乘院覚実)
(花押)

薩摩国中納言

(房玄)

法印御房可有御知行

由事、治部權大輔殿

(広橋兼綱力)

御状如此、早任例於正税

者被執達之、且可被注進

地下文書之由、国宣所候也、

仍執達如件、

(貞和二年)
八月十三日 左衛門少尉家忠

在庁官人御中

右のゆつりあたへたてまつる やうし
 こほうしとのゝところニ
 さつまのくにかこしまのこほりの内
 かみいしきのむらのみやうてんはくい
 けきんやらの事
 右ミやうてんはくいけのさんやらハ、かくち
 かしやていきたちか、そりやうなり、しか
 るあいた、けんふ二ねん十一月廿五日、しひつ
 をもてかくちにゆつりあたへをわんぬ、かの
 しやうにまかせて、かくち、きやうさをいなし、
 よてきたちか、しひつならひにかくちか
 このゆつりにまかせて、いちこのゝちは、
 こほうし殿にゆつりたてまつるところ也、
 たまゝ、きたちか、かくちともなんしなきうゑハ、
 あとのこせほたいをこたらす、とふらわるへく候、
 又そくちよひくにそゆふハう御ふちあるへ
 く候、よてこうしようのためニゆつりしやう
 如件、
 女件
 名にかきしめ

四四、沙弥かくち讓状

ゆつりあたへたてまつる やうし

こほうしとのゝところニ

さつまのくにかこしまのこほりの内

かみいしきのむらのみやうてんはくい

けきんやらの事、

右ミやうてんはくいけのさんやらハ、かくち

かしやていきたちか、そりやうなり、しか

るあいた、けんふ二ねん十一月廿五日、しひつ

をもてかくちにゆつりあたへをわんぬ、かの

しやうにまかせて、かくち、きやうさをいなし、

よてきたちか、しひつならひにかくちか

このゆつりにまかせて、いちこのゝちは、

こほうし殿にゆつりたてまつるところ也、

たまゝ、きたちか、かくちともなんしなきうゑハ、

あとのこせほたいをこたらす、とふらわるへく候、

又そくちよひくにそゆふハう御ふちあるへ

く候、よてこうしようのためニゆつりしやう

如件、

しやミかくち (花押)

45	29	27	元弘三年六月二十三日	平すへすみ置文	豎紙	31.5×40.8
45	29	28	元弘三年八月二十九日	後醍醐天皇綸旨	豎紙	33.0×49.4
45	29	29	建武三年八月十五日	二階堂真頭讓状	豎紙	32.4×49.8
45	29	30	建武三年九月二十三日	沙弥きょうい置文	豎紙	30.0×40.0
45	29	31	建武五年九月二日	二階堂行雄讓状	豎紙	32.5×47.4
45	29	32	建武五年九月二日	二階堂行雄讓状	豎紙	32.8×47.6
45	29	33	暦応三年三月三日	某袖判良秀奉書	豎紙	39.3×49.3
45	29	34	康永二年四月十二日	足利直義軍勢催促御教書写	豎紙	35.5×49.7
45	29	35	貞和七年三月三十日	二階堂行雄讓状	豎紙	33.6×48.4
45	29	36	觀応二年四月二日	惣公文重円等連署注進状	豎紙	30.5×40.5
45	29	37	正平七年二月十日	平惟純讓状	豎紙	29.0×40.5
45	29	38	康安二年七月二日	斯波氏経奉書	豎紙	15.6×23.7
45	29	39	貞治五年七月十日	通喜・泰久連署出挙借券	豎紙	27.3×39.7
45	29	40	天授元年十一月十二日	禅麟讓状	豎紙	30.5×41.0
45	29	41	応永二十年九月二十三日	宗光契状	豎紙	34.0×38.4
45	29	42	四月二十三日	比志島忠範書状	豎紙	30.9×39.9
45	29	43	八月十三日	薩摩国宣	豎紙	31.1×49.0
45	29	44		沙弥かくち讓状	豎紙	31.6×46.4

51	3	27	八月十七日	島津義弘書状	切紙	18.0×45.5
51	3	28	二月十四日	細川忠興書状	続紙	第1紙16.1×39.5第2紙16.1×47.0 第3紙16.1×46.0第4紙16.1×28.6
51	3	29	八月三日	相良長每書状	続紙	第1紙16.9×46.1第2紙16.8×49.9
51	4			〔文書二十五通 四〕		
51	4	1	六月十七日	石田三成書状	続紙	第1紙15.2×45.7第2紙15.1×2.2
51	4	2	十月六日	島津忠恒書状	折紙	28.9×45.0
51	4	3	十二月一日	島津忠恒書状	折紙	32.5×44.3
51	4	4	十二月四日	島津忠恒書状案	折紙	16.1×51.0
45	29			〔他家文書 四十四通〕		
45	29	1	八月十五日	源頼朝加判平盛時奉書写	続紙	第1紙33.5×49.8第2紙33.5×50.9 第3紙33.5×15.7
45	29	2	文治三年三月 日	平重澄寄進状案	豎紙	29.2×37.6
45	29	3	元仁二年三月 日	弥勒寺寺家公文所下文	豎紙	31.5×47.5
45	29	4	仁治二年九月十五日	関東御教書案	豎紙	31.8×46.0
45	29	5	建長七年十二月二十五日	関東下知状案	続紙	第1紙29.4×38.6第2紙29.2×38.4 第3紙29.2×38.6
45	29	6	文永八年十二月十六日	比丘尼成阿請文	豎紙	33.2×49.4
45	29	7	嘉元三年七月 日	沙弥行惠讓状	豎紙	30.1×42.3
45	29	8	嘉元四年七月 日	沙弥行惠讓状	豎紙	32.2×46.0
45	29	9	嘉元四年七月 日	沙弥行惠讓状	豎紙	32.0×46.5
45	29	10	嘉元四年八月二十一日	沙弥行惠置文	続紙	第1紙29.7×41.6第2紙29.7×27.0
45	29	11	徳治三年十一月十一日	藤原純貞質券	豎紙	30.5×42.1
45	29	12	徳治三年十一月十一日	藤原純貞質券	豎紙	30.4×42.0
45	29	13	正和三年三月二十二日	平こくさう丸・同母避状	豎紙	29.7×39.5
45	29	14	正和三年三月二十二日	平こくさう丸・同母避状	豎紙	25.6×33.4
45	29	15	正和三年六月十六日	平もとすみ避状	豎紙	26.8×33.5
45	29	16	正和三年六月十六日	平もとすみ避状	豎紙	29.6×31.4
45	29	17	正和三年十月二十九日	沙弥本仏・比丘尼妙法連署相博状	豎紙	27.0×37.5
45	29	18	正和四年六月十日	平もりすみ置文	豎紙	24.1×33.3
45	29	19	正和四年六月十日	平もりすみ置文	豎紙	31.7×40.7
45	29	20	元応二年十一月四日	平さたすみ置文	豎紙	33.9×49.1
45	29	21	元享元年五月十八日	平さたすみ置文	豎紙	33.3×51.2
45	29	22	元享二年八月九日	河俣了道請取状	豎紙	28.4×40.3
45	29	23	元徳元年十一月二十九日	鎮西下知状（前欠）	続紙	第1紙32.2×50.3第2紙32.2×51.0 第3紙32.3×49.2第4紙32.3×51.0 第5紙32.3×51.0第6紙32.3×51.3 第7紙32.3×42.8
45	29	24	元徳元年十二月五日	鎮西御教書	豎紙	31.0×43.2
45	29	25	元徳元年十二月二十五日	鎮西御教書	豎紙	30.0×42.2
45	29	26	元徳元年十二月二十五日	鎮西下知状	続紙	第1紙34.2×51.3第2紙33.9×53.3 第3紙33.5×52.2

51	2	6	六月九日	近衛前久書状	続紙	第1紙18.2×49.9第2紙18.1×50.1
51	2	7	六月十九日	石田正澄書状	豎紙	29.0×36.4
51	2	8	八月二十二日	島津義久書状	折紙	34.5×49.0
51	2	9	十一月二日	島津義久書状案	切紙	17.7×47.6
51	2	10	十二月二日	島津義久書状	切紙	19.4×47.6
51	2	11	十二月十三日	島津義久書状	豎紙	28.5×41.6
51	2	12	慶長二年六月九日	島津義久知行宛行状	豎紙	33.8×49.2
51	2	13	五月二十四日	島津義久書状	切紙	17.5×45.1
51	2	14	九月十四日	島津義久書状	折紙	32.6×49.6
51	2	15	十二月十六日	島津義久書状	豎紙	27.5×43.0
51	2	16	正月八日	照高院如雪（道澄）書状	切紙	13.5×38.8
51	2	17	四月六日	石田三成書状	折紙	30.5×48.8
51	2	18	二月二十六日	島津義久書状	切紙	19.3×49.1
51	2	19	三月二十六日	島津義久書状	切紙	17.8×49.5
51	3			〔文書二十九通 三〕		
51	3	1	八月十六日	秋月種実書状	切紙	16.6×50.3
51	3	2	六月九日	照高院如雪（道澄）書状	切紙	19.1×51.2
51	3	3	三月二十四日	甲斐宗運（親直）書状	続紙	第1紙17.0×48.7第2紙10.5×7.8
51	3	4	閏八月二十九日	島津忠平書状案	切紙	16.8×48.4
51	3	5	五月七日	島津義弘書状	続紙	第1紙28.3×43.1第2紙28.4×44.8
51	3	6	十月三日	青蓮院宮尊朝法親王書状	切紙	21.1×46.6
51	3	7	八月十四日	豊臣秀吉朱印状	折紙	43.8×63.8
51	3	8	二月二十一日	島津義弘書状	折紙	29.3×43.6
51	3	9	二月十二日	某一之書状	折紙	29.6×48.1
51	3	10	三月二十三日	山中長俊書状	切紙	15.5×45.2
51	3	11	六月二十日	島津義弘書状	続紙	第1紙14.2×36.6第2紙14.2×43.3
51	3	12	七月八日	島津義弘書状	折紙	28.7×44.2
51	3	13	八月十日	島津義弘書状	折紙	28.5×43.6
51	3	14	十月十二日	島津義弘書状	続紙	第1紙14.0×45.7第2紙14.0×45.2
51	3	15	四月十五日	近衛前久書状	折紙	28.8×46.2
51	3	16		近衛前久自筆書状	折紙	30.1×44.9
51	3	17	七月十五日	島津義弘書状案	豎紙	29.6×21.6
51	3	18	七月二十九日	大谷吉継書状	豎紙	33.9×39.6
51	3	19	十一月十三日	井伊直政書状	折紙	31.4×44.0
51	3	20	十二月二十三日	黒田長政書状	折紙	32.0×44.1
51	3	21	十二月八日	島津義弘書状	続紙	第1紙15.4×47.7第2紙15.4×48.9 第3紙15.3×23.2第4紙15.4×8.7
51	3	22	十二月	島津義弘書状	切紙	16.8×49.5
51	3	23	慶長七年八月十日	島津義弘起請文案	豎紙	30.6×48.4
51	3	24	二月十一日	島津義弘書状	折紙	第1紙31.1×49.3第2紙31.0×49.1
51	3	25	十月二十八日	松浦宗静（鎮信）書状	折紙	34.1×53.0
51	3	26	四月七日	島津義弘書状	折紙	36.2×51.0

島津家文書「御文書」外中世史料部集 総目録

51	1			〔文書三十三通 一〕	卷子	
51	1	1	七月二十五日	島津勝久書状	切紙	15.5×34.1
51	1	2	三月二十日	龍造寺家門書状	切紙	19.0×43.8
51	1	3	十月十九日	近衛尚通書状	続紙	第1紙21.1×46.7第2紙21.0×1.0
51	1	4	八月十四日	近衛信輔書状	切紙	18.9×47.7
51	1	5	十二月二十四日	有馬義純書状	続紙	第1紙19.7×40.9第2紙19.7×2.3
51	1	6	三月十三日	近衛前久書状	切紙	20.3×46.3
51	1	7	十一月二十八日	志岐麟泉書状	切紙	21.1×49.7
51	1	8	十二月六日	土持親成書状	続紙	第1紙20.3×47.7第2紙20.3×1.9
51	1	9	十一月六日	天草鎮尚書状	続紙	第1紙21.2×46.8第2紙21.2×1.3
51	1	10	十二月二十六日	土持親成書状	切紙	16.6×48.4
51	1	11	六月十八日	飛鳥井雅継書状	切紙	20.2×40.9
51	1	12	五月十五日	島津義久書状案	続紙	第1紙20.0×4.9第2紙20.1×41.0
51	1	13	六月十六日	足利義昭御内書	切紙	19.0×48.7
51	1	14	十月十五日	島津義久書状案	切紙	19.3×48.6
51	1	15	九月十九日	近衛前久覚書	竪紙	31.5×49.6
51	1	16	八月二日	龍造寺隆信書状	切紙	15.8×44.2
51	1	17	十一月二十六日	近衛信輔書状	切紙	22.0×50.8
51	1	18	八月二十四日	島津義久書状	続紙	第1紙16.9×4.5第2紙16.8×40.4
51	1	19	九月十三日	伊集院忠棟書状	折紙	24.2×39.0
51	1	20	十月二十日	島津義久書状	切紙	17.1×39.6
51	1	21	八月四日	島津義久書状案	切紙	17.5×43.9
51	1	22	正月二十五日	毛利輝元書状	切紙	20.0×48.5
51	1	23	三月二十三日	島津義久書状	続紙	第1紙29.1×45.0第2紙29.0×20.3
51	1	24	三月二日	秋月種実書状	続紙	第1紙16.8×48.2第2紙16.7×1.4
51	1	25	三月十五日	安国寺恵瓊書状	切紙	17.4×51.8
51	1	26	四月十二日	松浦鎮信書状	切紙	18.8×49.5
51	1	27	五月十一日	小早川隆景書状	切紙	18.5×49.5
51	1	28	正月十九日	島津義久書状案	続紙	第1紙17.5×51.7第2紙17.5×1.5
51	1	29	五月二十八日	梶井宮胤法親王御内書	切紙	21.5×41.4
51	1	30	九月十五日	青蓮院宮尊朝法親王書状	切紙	20.0×50.1
51	1	31	二月二十九日	島津義久書状	切紙	14.7×44.1
51	1	32	三月五日	近衛前久書状	切紙	14.7×44.1
51	1	33	八月三日	近衛前久書状	折紙	29.6×45.6
51	2			〔文書十九通 二〕		
51	2	1		近衛前久書状	折紙	28.2×46.1
51	2	2	四月十七日	島津義久書状	続紙	第1紙14.3×2.7第2紙14.3×34.3第3紙14.3×31.4
51	2	3	五月三日	豊臣家奉行連署奉書	続紙	第1紙15.3×49.0第2紙15.3×48.2
51	2	4	天正十九年十二月二日	島津家人質番組書上	続紙	第1紙31.6×47.7第2紙31.5×43.8
51	2	5	五月三日	近衛前久書状	折紙	35.2×52.8

東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二三―六

島津家文書『御文書』外中世文書集

二〇二四年三月二六日発行

発行主体 JSPS 20H01307

『原本史料情報解析』の方法による中世西国武家文書の研究と展開

(研究代表者／本郷恵子)

編集 小瀬玄士・畑山周平・村井祐樹

